

嗜癖に見られる人間の不合理性の研究
ー欲望の連鎖とパーソナリティの成熟ー

熊本大学大学院社会文化科学研究科 公共政策学専攻

渡邊淳子

目 次

序 論	1
第 1 章 嗜癖者の自己システム	5
1・1 嗜癖の定義	5
1・2 刺激防御壁の存在	8
1・3 自尊心の低下と抑うつ	10
1・4 養育体験	11
1・5 認知の歪みをもたらすもの—虐待のケース	14
1・6 自我同一性の統合	15
1・7 抑圧、分裂、投影同一視	17
第 2 章 パーソナリティの関与	20
2・1 気質と性格	20
2・2 パーソナリティ理論	21
2・3 Temperament and Character Inventory	22
2・4 TCI のパターンと嗜癖の関係	24
2・5 Parental Bonding Instrument	26
2・6 共分散構造分析による検証	27
2・7 高い新奇性追求と低い損害回避	29
2・8 親の養育態度と自己志向	31
第 3 章 欲望と行為の自己決定	33
3・1 欲望の 2 階層と「一般的・社会的価値」	33
3・2 欲望の形成—他者のまなざし	36
3・3 欲望の連鎖	38
3・4 複雑性外傷後ストレス障害	40
3・5 権力者と服従者の関係	41
3・6 芝居の脚本構築と自己欺瞞の成立	44
3・7 精神の遊離と傍観者化	45
3・8 自己欺瞞	46
3・9 個人のルール	48
3・10 行為の 3 段階	50
3・11 自発性における人間の可塑性と自尊心	52
3・12 合理的自由	55

結 論	59
引用・参考文献	62
資料および図表	71

序 論

ある行動や現象を表現するために、それらに対応する記号としての明確な言葉あるいは概念が付与されると、急速に理解が深まる。概念化することによって、当該行動や現象の輪郭線がはっきりと認知されるためである。仮にその概念が多少の曖昧性を含んでいたとしても、一般的な理解を妨げる材料とはならないだろう。むしろ、概念化することによってそれらの行動あるいは現象の周辺にあるものも取り込み、概念自体の裾野を広げるといった現象も起きるかもしれない。例えば、近年、一般にも広く知られるようになった「アダルトチルドレン (adult children of alcoholics: AC)」という用語は、元々、アルコール依存症家族に育った子供が、成長して親と同じようにアルコール依存症になりやすかったり、さまざまな問題を引き起こしやすいといった臨床経験的な問題が概念化されたものであるが、時とともにアルコール依存症を含む機能不全家族へと戦線を拡大することで、社会に家族の問題を投げかけることになった。アルコール依存症の問題は、ほぼ同時に、「共依存」¹というもうひとつの概念も生み出し、発展させてきた。

概念化による行動や現象の明確な認知という点において、「嗜癖 (addiction)」という用語も、「AC」や「共依存」をのみこんだ包括的概念として広がりを見せていると言えよう。addiction という言葉自体は決して新しい用語ではないのだが、人々が長期にわたり衝動強迫的に没入する可能性をはらんだ様々な問題行動に対する総合的な概念として非常に有効である。日本に比して嗜癖概念が広く市民権を得ている米国で addiction という語（を帯びた言葉）を探すならば、それに関する書籍リストを見ただけでも、薬物、アルコール、ギャンブルといった日本でも「依存症」としてなじみあるものから、買い物、セックス、人間関係、食物、チョコレート、砂糖、インターネット、テレビゲーム、暴力等々、枚挙にいとまがない²。臨床分野においても、例えば嗜癖行動に関する質問紙 Shorter PROMIS Questionnaire: SPQ を開発した Christo ら (2003) は、質問調査の項目としてアルコール、ニコチン、薬物、処方薬、ギ

¹ アルコール依存症者に対する家族の対応行動が、実はアルコール乱用を維持・促進しているという臨床現場からの観察によって生み出された概念である。AC と相まって、病理者の背景としてこうした概念が発展したことにより、アルコール依存以外の嗜癖も当事者に限定された問題ではなく、家族全体で見なくてはならないといったシステム家族論的見方に道を開いた。(遠藤優子, 「臨床から見た共依存・アダルトチルドレン問題」, 清水新二編『共依存とアディクション 心理・家族・社会』, 2001, 培風館, pp. 85-126)

² ちなみに米国の書籍サイトで addiction をキーワードに検索したところ、10 万件を超える書籍がヒットした。

ャンブル、セックス、カフェイン、過食、拒食、運動、買い物、仕事、支配的
人間関係、服従的人間関係、強迫的支配的世話焼き、服従的世話焼きの 16 項目
を提示している³。人間生活に付随したさまざまな物質や事象が嗜癖の対象とな
りうるだけでなく、中にはメールやテレビゲームなど、時代の雰囲気の色濃く
映し出すような対象もある。その意味においては、嗜癖は極めて現代的な病理
であるとも言えるだろう。

一般的にわが国においては、「嗜癖 (addiction)」よりも「依存症
(dependence)」(例えば「アルコール依存症」「ギャンブル依存症」「ニコチン
依存症」など) という用語の方が通りは良いかもしれない。両用語ともに同義
的に使用されることが多いが、本論文では敢えて「嗜癖」という用語を採用す
る。それは、addiction 概念が dependence という概念をも包摂した大きな概
念であると考えからである。このことについては、嗜癖の定義に関わる問題
であり、厳密な意味での二つの用語の違いを含めて第 1 章で触れることになる。

嗜癖行動はさまざまな形態をとって表出するが、これらの問題行動に共通し
て特徴的なのが、コントロール不能状態に陥り、明らかに不利な結果を招くに
もかわらず継続されるという点である。その点を踏まえ、Goodman は
DSM-III-R の分類を基にしながら、衝動抑制の失敗、執着など、以下のような
6 項目の scale を提示している (Goodman, 1990)。

- (A) 特定の行動をやりたいという衝動に抵抗することの繰り返しの失敗
- (B) 行動を開始する前のすぐさまの緊張感の増大
- (C) その行動を行っている間の喜びあるいは安心感
- (D) その行動を行っている間の抑制が欠如した感じ
- (E) 少なくとも以下の 5 点
 - (1) その行動そのもの、あるいは、その行動に至る準備への常習的な没頭
 - (2) その行動を意図したよりも多く、長い時間行う
 - (3) 行動を減少、抑制あるいは停止しようという努力を繰り返す
 - (4) 行動あるいは行動への従事、あるいはその効果からの回復に必要な活動に費やされる膨大な時間
 - (5) 職業、勉学、家庭、あるいは社会での責務を果たすことが期待されるときでも、常習的にその行動を行う
 - (6) その行動のために、重要な社会的、職業的あるいは娯楽的活動をやめる、あるいは減らす
 - (7) その行動によって引き起こされたり悪化する社会的、経済的、心理的、肉体的問題が

³ Christo らは、16 項目の嗜癖尺度に対し各 10 項目の質問を設けた。各回答を点数化することによって、回答者の嗜癖への傾向性を査定した。

固定化したり、周期的に起きると分かっているながら、その行動を継続

(8) 耐性: 同じ程度での継続行動では物足りない、あるいは減じた効果を達成するために、程度、あるいは頻度を増す必要性。

(9) もしその行動をやることができないと、落ち着かなくなったりいらいらする

(F) 不安定ないくつかの症状が少なくとも1ヶ月固定したり、より長期間、繰り返し起きる。

上記の scale はさまざまな嗜癖の共通的特徴を網羅的に表していると思われる。さらに嗜癖がやっかいなのは、問題行動の進展が本人の身体や精神を蝕む結果となるだけでなく、経済的問題も含め、家族や友人など周囲の人々にも深刻な影響を与えるということである。それだけに、嗜癖に対し「死にいたる病」(シェフ, 1993)とする極端な社会学的立場からの表現があったとしても、決して奇をてらった言い回しではないようにも思えるのである。

では、明らかに不利な結果となることが分かっているながら、なぜ嗜癖者は「やめられない」のだろうか。嗜癖からの回復（あるいは予防）を図るためにも、嗜癖に対する目線は、現前する事態への対症療法的視点だけでなく、周辺環境（例えば、生育環境、社会生活、人間関係など）がどのように個人の内面に影響を与え、行動を規定していくのかという点にまで広げられるべきであろう。というのも、嗜癖的な問題行動は、仮に表面に現れた行動を抑えることができても、他の問題行動に移行したり、一度に複数の異なる問題行動を抱えていたりすることが多いからである。例えば、Christo ら (2003) は、SPQ の信頼性妥当性を確認する中で、問題飲酒と処方薬乱用、薬物と極端なセックスやギャンブルとの緊密な関係性などを確認した。また、薬物やアルコールなどの物質関連依存症と、それ以外の嗜癖行動との間には生理学的に機能的類似性があることも観察されている (Donovan, 1988; Orford, 1985)。こうした先行研究は、問題行動に対する個別的な対症療法の限界を示しているだけでなく、様々な嗜癖的問題行動の根底にある種の共通因子が存在することを示唆するものである。

嗜癖行動は病理であるという主張の半面、嗜癖者に対する世間一般の見方は、依然厳しいものがある。例えば、飲酒やギャンブルにのめり込んで身を持ち崩す人は、昔から落語、講談、あるいは芝居でも取り上げられるほどポピュラーな存在である。そして、彼らに向けられる世間の目は、「意志が弱い人」「だらしない人」「向上心のない人」と批判的である。嗜癖者に浴びせられるこれらの評価に対する検証も本論文の中で行われることとなるが、仮に嗜癖者の行動の原因を「意志の弱さ」「向上心のなさ」として一刀両断に切り捨てるにしても、それでは「意志の弱さ」「向上心のなさ」がどのように形成され、不合理ともいえる行動につながっていくのかということは、それはそれで興味深い問題である。

本論文の目的は、先行研究を基にした嗜癖の理論構築とその実証を行い、併

せて回復への道筋も視野に入れながら、人間の自発性や合理性の能力の可能性を探ることにある。そこで、第 1 章では数多くの先行研究を基に嗜癖システムを概略的に示しながら概念そのものの再定義を行い、併せて嗜癖行動のメカニズムを整理し、嗜癖へと至るプロセスをたどる。

第 2 章ではパーソナリティと環境因子（親の養育態度）が嗜癖構造にどのように関わっているかということ、統計的手法により検証する。全国の大学生 4,024 人を対象とした疫学的調査データを使用するが、共分散構造分析により、「嗜癖」という概念そのものが実臨床でも有効であることも検証する。

第 3 章では、嗜癖という不合理な行為を通じて、人間の自己決定に関する総合的な考察を行う。特に嗜癖行動の分析に際しては、あらゆる行動の起点となる欲望について、Frankfurt が提示した欲望の 2 階層論を取り上げながら考えることになる。また、Davidson の「自己欺瞞の生成プロセス」を概観することによって、私たちの欲望を規定している「一般的・社会的価値」にふれるとともに、他方で Grice による Davidson 批判に注目し、Davidson の行為分析に関する理論自体が嗜癖性を帯びるということを指摘したい。こうした嗜癖性を帯びた理論は、循環するある種の閉鎖的状况を構築することになるが、この循環的閉鎖的状况から脱するためには、Grice が提案する **strong freedom** を前提とした、人間の **person** としての自発性にもとづく変化の可能性と成熟の概念が重要な意味を持つということを確認する。

Grice の提案はまた、臨床の場において言われてきたこれまでのパーソナリティ理論にも修正を加えることになり、嗜癖のような不合理な行動を考察するにあたり、原因の除去に決してたどり着くことのない循環的閉鎖空間から脱し、回復さらには成熟へと導くパーソナリティモデルを提供する。結果として、これらの考察は、嗜癖からの回復（あるいは予防）の方策や大量の嗜癖を生み出す社会システムの在り方を考える上でも、ひとつの基本的な方向性を提示することになるだろう。

第1章 嗜癖者の自己システム

1・1 嗜癖の定義

序章でも触れたが、本論文を進めるにあたって、厳密な意味での「嗜癖 (addiction)」と「依存症 (dependence)」との違いについて若干の説明を加えたい。精神科の領域において、**addiction** という用語が使用されることはまれである⁴。同義的に **dependence** という用語が充当されるにしても、使用される範囲は限定的である。例えば、心的および行動障害の診断基準として臨床現場で広範に使用されている DSM-IV-TR において、**dependence** の使用は、アルコール、ニコチン、コカインなどの物質関係に限られており、ほとんどの嗜癖行動を当てはめようとするれば、「他のどこにも分類されない衝動制御の障害 (impulse-control disorder not elsewhere classified)」の中の「特定不能の衝動制御の障害 (impulse-control disorder not otherwise specified)」ということになる⁵。もっとも、病的賭博 (pathological gamble) のように、個別の記述はあるにはあるが⁶、それらもあくまで特定の対象に向かう問題行動であり、そこに **addiction** (あるいはそれに類した) という包括的な視点を見出すことはできない。以上のことから言えるのは、現在においても、精神医学が **addiction** という包括的な概念を持っていない (あるいは持とうとしない) ということである。

addiction という用語は、むしろ臨床心理学の世界において頻繁に使用されている。アルコール依存症から起こった共依存概念が、諸種の強迫的な「のめり込み」行動に援用されるに至り、従来の精神医学的な限定的 **dependence** 概念だけでは包括しきれない、ある種の共通性を持ったさまざまな問題行動が注目されるようになった。時には社会問題にもなることがあるこれらの強迫的で自己破壊的な行動を、臨床家たちは **addiction** 概念を用いて説明するようになってきた。以後、**addiction** の拡大は、仕事 (ワーカホリック)、危険な性行動、パソコン、携帯電話、摂食異常、ドメスティックバイオレンス (DV) など、とどまるところを知らない (Greenfield, 1999)。

以上の理由から、本稿では **dependence** すなわち「依存症」は、**addiction** すなわち「嗜癖」に包摂された一概念として扱う。本稿中で必要に応じて「依存症」という語を使用したとしても、そのことが嗜癖と区別されるものではないことを最初に確認しておく。

⁴ 1964 年に世界保健機構 (WHO) は、嗜癖 (addiction) という用語はもはや科学的な名称とは言えないとの結論を下し、薬物依存 (drug dependence) という用語を推奨した。

⁵ American Psychiatric Association 編、高橋三郎・大野裕・染矢俊幸訳、『DSM-IV-TR 精神疾患の診断・統計マニュアル』, 2002, 644 (以下 DSM-IV-TR と表記する)

⁶ DSM-IV-TR, 638-641

嗜癖とみなされる衝動強迫的行為は、境界の曖昧さを伴いながらも、向かう対象や態様によって①物質嗜癖（薬物、アルコール、ニコチンなど）、②プロセス嗜癖（過度なセックス、買い物など）、③関係嗜癖（共依存、支配的世話焼きなど）に大別されることが多い。例えば、プロセス嗜癖として挙げた買い物嗜癖について、Dittmar は、買い物への衝動が我慢できないものとして経験され、買い物行為の抑制を失っていき、個人的、社会的、職業的生活における不利益や負債にもかかわらず過度な買い物を続けるという「三つの共通特徴」があるとした (Dittmar, 2005)⁷。質問紙研究から導かれた Dittmar の見解は、買い物嗜癖に限らず、さまざまな嗜癖的行動に共通する特徴を抽出した Goodman の嗜癖定義とも重なってくる。すなわち、嗜癖とは「(1) 行動制御のくりかえしの失敗と (2) 明らかに不利な結果を招くにもかかわらず継続されるという特徴を持ったパターンにおいて、特定の行動（それらは喜びをつくり、内的苦しみからの解放を与える機能を持つことができる）にいたるプロセス」である (Goodman, 1990)。

わが国においては、斎藤学も「ある習慣への執着」⁸である嗜癖を指して、「自己のコントロールの下にあったはずの習慣行動から派生し、自己のコントロールをはずれる状態にいたったもの」⁹と説明する。Dittmar、Goodman そして斎藤の3人が、共に嗜癖の第一の特徴として行動制御（コントロール）の不能の状態を挙げている。Goodman は自らの嗜癖定義を基に、序章で紹介したような嗜癖判定を行うための尺度を提示した。また、斎藤の場合、嗜癖の本質の一つとして「スリ替え充足」を挙げる。満たされない愛着欲求を嗜癖行動にスリ替えて充足させているということであり、斎藤は、不安や怒り、抑うつが嗜癖行動へとスリ替えられるとも指摘する¹⁰。19世紀末から Freud によって考え出された精神分析の考えかたでは、人間の感情や行動を無意識から説明する。本来、持っていた欲動や感情が、環境要因（例えば社会的な禁止など）から直接的に表出できない（しない）場合に、人間が無意識のうちにその感情や行動を別の形で表出すると考えてきた。こうした流れからすると、斎藤の言う「スリ替え充足」は大変、精神分析的な考え方である。

一方で、シェフは、嗜癖に対する視点を個人や家族レベルから周囲の環境や

⁷ 買い物嗜癖は *compulsive buying* と用語化され、機能不全行動として近年、研究対象となることが少なくない。ちなみに、西側先進国における大人の1-10%が *compulsive buying* であると見積もられている。(Neuner et al., 2005)

⁸ 斎藤学, 1984, 3

⁹ 斎藤学, 1998, 91

¹⁰ 斎藤学, 1984, 28-69

また、斎藤は、嗜癖行動にスリ替えられた真の欲求は「母からの抱擁」であるとし、人生早期の母子関係や心理的発達を嗜癖と深く関連づけている。(斎藤学, 1998, 102)

社会システムにまで広げて、回復への道筋を模索していくことの重要性を訴えた（シェフ，斎藤学訳，1993）。その主張は、個を取り巻く社会や文化システム（系統）そのものが嗜癖的であり、常に個人（個体）が巻き込まれる危険性をはらんでいるということ、さらに、個人と社会が持つそれぞれの嗜癖システムには共通点が見いだせるということを示唆している。本来、嗜癖概念は固体の特徴として考えられており、このことに異論を唱えるものはいない。しかし、人間の心理や行動は個体と環境の相互作用のなかで発生するものである。シェフのように嗜癖のありかを個体のみならずその環境に求める考え方は大変刺激的なものであった。この中でシェフは、嗜癖概念を個人の上に現れる嗜癖行動群と、それらを支える社会的、文化的嗜癖システムとに大別する考えへと発展させた。

本章では、個人としての嗜癖行動を様々な角度から検証することになるが、シェフが指摘する環境や社会システムという考え方も無視することはできない。というのも、人は好むと好まざるとに関わらず、他者や社会との接触なしに日常の生活を考えることはできないからである。個人の内面においては抑うつ、不安といった自尊心の低下を伴った心的状況に対する「スリ替え充足」、外にあっては嗜癖を助長する環境や社会システムといった状況を考えたとき、本章は Goodman や斎藤らの提案に付け加える形で「嗜癖とは、自尊心の低さを原因として生じる不快感情、無価値観、空虚感から逃れようと、機会、学習、社会的強化によって習慣づけられた行動であり、同時に、その行動の結果が自己に不利益をもたらすと知っているにもかかわらず、長期間にわたり行動衝動を制御できない状態に陥ったもの」と仮説設定することから出発する。

また、本章では嗜癖を広く捉えなおし、精神分析学、特に対象関係論に依拠してメカニズムや発生要因を概観する¹¹。具体的には、抑うつ、自尊心、自己愛、養育体験など、嗜癖メカニズムの辺縁部に位置すると考えられ、パーソナリティ形成やその在りようにも深く関係しているとされるものを整理することで、嗜癖そのものの輪郭を浮かび上がらせた。さらに、臨床心理学や精神分析といった先行研究を基に嗜癖者の自己システム図（図1）を作成した。嗜癖メカニズムの説明の一助としたい。

¹¹精神分析学は人間理解の基礎を無意識の理解に求めた。従って、その証明方法は従来、ロールシャッハテストなどの投影法といわれる検査に頼るなど、実証性に欠けるところが多く、方法論的批判を受けてきた。しかし、最近はこうした無意識も実証的研究の対象となることが飛躍的に増加した。そもそも人間の無意識は僅かに意識に上ることが多い。例えば防衛メカニズムはその一例であり、実証的評価が可能になっている（Bond, & Perry, 2004）。また、精神分析理論に依拠した治療法—例えば転移焦点心理療法（Clarkin, Yeomans, & Kernberg, 2006）—について、対照群と比較する形の臨床的実効性が報告されるようになってきている（Clarkin, Foelsch, Levy, Hull, Delaney, & Kernberg, 2001; Clarkin, Levy, Lenzenweger, & Kernberg, 2004, 2007）。

1・2 刺激防御壁の存在

太宰治は自死の1カ月前に書き上げた『人間失格』の中で、主人公の大場葉蔵の手記に託して自らの「恥の多い生涯」を包み隠すことなくさらけ出した。この作品の文学的評価はともかくとして、太宰が小説の中で描いてみせた「自画像」は、睡眠薬への依存、他者とのいびつな関係性（例えば、繰り返される女性とのかかわりと自殺未遂）など、随所で典型的な嗜癖者の姿をあぶりだしている。特に嗜癖とのかかわりにおいて見逃すことができないのは、少年時代からピエロを装いながらその実、冷静な計算によって他者との関係構築を図るとともに、そんな自分を突き放して見る「対自的自己」や見捨てられ不安からくる「偽自己」の存在である。そこには、「嗜癖の循環構造」とでも呼ぶことができるひとつのイメージが浮かび上がる。

そこで、これまでの嗜癖および、嗜癖にかかわる内的環境（例えば自我の発達など）についての先行研究を整理するために、非嗜癖者と嗜癖者の自己システムを対比してみたい。以下の記述は、先行研究を通じて組み立てた、自己システムのモデル設計である。

嗜癖対象となるモノあるいは行為の多くは、日常的に私たちの周囲にあり、適切な距離を保って付き合うことができれば生活に彩りを与えるものとなる。非嗜癖者と嗜癖者の違いは、対象と接した時、自己の行動をコントロールできるかどうかの違いにある。対象とのかかわり方を自我という観点から見ると、対象と適正な距離を保つことができる非嗜癖者の自我は好ましい心理的発達を経て、基本的信頼感や良い自己評価を伴った自立的な自我機能を獲得していると言えよう。これを仮に「二次的機能自我」と呼ぶことにする(図2)。二次的機能自我という考え方は、Freudの「一次過程」、「二次過程」に関連するものである。「一次過程」は、本能的にしたいことをすぐに満足させようとする過程のことであり、「二次過程」とは、本能衝動をすぐに満足させるのではなく、それを延期させつつ、自我のいろいろな機能を分化発達させながら、次第に成熟に向かっていく過程のことである(ムーアー, 福島章訳, 1995)¹²。したがって、非嗜癖者の自我の満足は常に二次過程の作用によるものである。さらに二次的機能自我は、依存欲求の真の満足や克服を通して健康な自己愛を持つ。また、対象となるものは、はっきりと認識されており、自己と対象との相互作用の結果として、自我はより成熟へと向かうことになる。

これはどういうことかという、例えば他者とのトラブルがストレス要因(外部刺激)となった時、そのストレスがどのように処理されるかを考えてみるといいだろう。他者とのトラブルは、不安や怒り、時には抑うつを伴って現実の

¹² ムーアー, 1995, 13-14

ものとして認識される。そこで、その現実から一時的に逃避（飲酒や食事、買い物など）を図ろうとする一方で、自我は他者との現実的問題を自我が持つ二次的機能（現実的態度や論理的思考を作り上げたり、試行錯誤という内界の活動性を通して問題解決に向かうなど）を使って克服する努力も行う。つまり、非嗜癖者の自我は自力再生の力を持ち、結果として自己愛を満足させることになり、自我のさらなる成熟につながるのである。

一方の嗜癖者であるが、非嗜癖者との大きな違いは自己システム全体を包み込む「刺激防御壁」の存在である(図1)。刺激防御壁は、ありのままの自分を見つめて、それを認めることに対する恐れから生じるものである。

非嗜癖者の自我が自力再生の力を持ち、ありのままの自分を受け入れる健全な自己愛を育てるのに対し、嗜癖者の自我では「ありのままの自分」や現実を認識する目をわざと曇らせる「刺激防御壁」とでも呼ぶべきバイアス的なものが存在する。刺激防御壁は、ありのままの自分を見つめ、現実を認めることに対する恐れから生じるものであり、そこで「偽自己」的な振る舞いに至る。嗜癖者にとって「偽自己」であるということは、不安などの不快感情に対する防衛である。そのため、葉蔵にも言えることだが、ありのままの自分であることや現実を認識するということは、偽自己であることに違和感や罪悪感を抱くことよりも脅威なのである。そこで、ありのままの自分を映し出す世界や他者、さらには、ありのままの自分との関係をも遮断する壁をつくってしまうことになる。刺激防御壁はこの恐れが高まるほど厚いものとなる。この刺激防御壁の存在により、自我の対象認識はぼやけたり、歪曲されたものとなる。

また嗜癖者の自我は、対象に対する安定した評価や健康な自己愛の発達を阻害された状態にある。自我の満足は常に一次過程によるものである。したがって、自我機能は一次的であり依存的で未熟である。この一次的機能自我は全体として強迫的傾向を持ち、パーソナリティ障害の範疇で言うならば、偽自己を中心に自己愛的傾向と境界例的傾向を合わせ持つ。自己愛的傾向は誇大な自己愛を発達させることによって、不安や抑うつから防衛する。境界例的傾向は、誇大型自己愛が急激に崩壊してしまった結果生じる抑うつや不安に対する防衛としても機能する。つまり、より重篤なあり方¹³である境界例的傾向の自我にまで退行して防衛するのである。

¹³ 自己愛的傾向の人と境界例的傾向の人とは、その人が抱く自己像は正反対である。自己愛的傾向者は、自己の活性化は困難であるが、自己像は誇大であり、自己主張はそれほど困難ではない。それに比べると境界例的傾向者は、自己像は貧困である。そのために、自己主張は困難である。つまり、自己像の歪みの程度が、自己愛傾向者よりも境界例的傾向者のほうが大きいということである。このことから考えると、境界例的傾向者の示す防衛反応は、自己愛的傾向者の防衛として現れる誇大自己像の崩壊の結果と考えられるのである。(マスターソン, 富山幸佑・尾崎新訳, 1990)

嗜癖者の自我を取り囲む刺激防御壁は外界からの刺激を遮断する働きを持つのだが、それを傍らで見つめるまなざし（対自的自己）の侵入を防ぐことはできない。対自的自己は、時として怒りを表出させながら不本意な在り方をする偽自己とぶつかりあう。しかし、怒りは偽自己の持つ見捨てられ不安のエネルギー（否認や分裂）により歪曲される。このため、怒りが抑制され、見捨てられ不安は自責感（自尊心の低下）を生み、抑うつへと急降下する。そして、再び自己愛を取り戻そうと欲求充足スリ替え行動を引き起こし、嗜癖の循環に陥ることになる。この「嗜癖の循環」の仮説をより深く検証するために、次節以降は自己愛と自尊心の低下を中心とした嗜癖者の自己システムを形成するとされる各因子を詳細に見ていく。

1・3 自尊心の低下と抑うつ

自己愛は、親子関係のような対象関係を基礎として形成される。健康な自己愛と不健康な自己愛とでは、その基礎は同じであっても質的には大きく異なる。この自己愛の質の差を決定付けているのが「自尊心」である。例えば、健康な自己愛を支えているのは「自分はこれでいいんだ」という自尊の心である。Watson らは、自己愛、自尊心と親の養育態度の関係について検討し、自己愛の概念そのものに自尊心が含まれていると結論づけている (Watson, 1995)。

一方、自尊心の低下とうつ病との関連を示す報告もなされている (Abela, 2002; Roberts ら, 1996)。嗜癖者の自己システム (図1) でも示したように、嗜癖者は自己愛の障害を持ち、そのことによって引き起こされる抑うつから逃れようとして嗜癖行動へと向うというひとつの図式が浮かぶ。嗜癖自体が、自尊心の低下に伴った抑うつに対する 逃避（防衛）行動であるとする見方もある (Olivardia, 2004)。

人生早期の対象との関係を基礎とした自己愛（あるいは自尊心）の形成過程において、不適切でいびつな人間（対象）関係は誇大な自己像や尊大さを生み出す。例えば、子どもの要求に対して共感する能力を欠いている親は、子どもに対して適切な機能（例えば不安を和らげたり、行動に対する支持や称賛など）を果たせない。このため子どもは褒めてもらったり、なだめてもらうなどの早期経験を内在化できないまま成長することになる (ウィニコット, 牛島定信訳, 1977)。このことは長じて「尊大さ」と結びつき、誇大な自己像を発展させる動機へとつながる (サルズマン, 成田善弘・笠原嘉訳, 1985)。

ここで言う「尊大さ」とは、「現実的可能性や実現性の彼方にある高位の、優れた状態に自分があると思ひ込むこと」である (サルズマン, 1985)¹⁴。それは一見、高い自己評価に見えるが、しょせんは「強さについての幻想」であって、

¹⁴ サルズマン, 1985, 200

自己評価が高いということとは質的に異なる。発達早期における望ましい経験は、後の心地よい感情を伴った自己価値や自己尊敬といった自尊の心につながるだろう。しかし、「尊大さ」とは「真の自己尊重の否定」であり、「その人の資質を否定し、不可能で超人的な属性を要求する」¹⁵ことである。人生早期に不確実で矛盾し、一貫性のない人間関係（家族環境）の中で過ごしていると、いつも自分は危機に瀕していると感じて育つ。このとき生じる感情を克服するために、子どもは全能感情（「尊大さ」）を発展させる。しかも、全能感情は不快感情を克服するための適応手段ともなり得るのである。

「尊大さ」は、不合理で、心理的欲求から生じる防衛的、適応的發展として、嗜癖が問題になる場面において常に見出される。例えば、嗜癖者はその「尊大さ」ゆえに高揚感を求める。この高揚感は、（自分の無能さの認識や不快感情に打ち勝つという）強さの幻想に繋がる。しかし、強さの幻想という「酔い」から醒めると、後悔や罪悪感が生じ、行動をコントロールしようとしても成功の見込みはない。なぜならば、嗜癖の根底にある「強迫」¹⁶が影響を受けるわけではないからである。結局はコントロールできない自己の無能さの自覚が強められるだけとなり、再び高揚感を求め、嗜癖行動に没入していくという悪循環の図式が成立することになる。

1・4 養育体験

自己愛が健全に育まれるかどうかは、基盤となる対象関係が健全なものであるかどうかにかかっていると考えられる。人生早期の環境、特に親子関係は重要な鍵となる。

Bowlby の attachment 理論（1969, 1973, 1988）のように、親子関係をはじめとした対人関係をその後のパーソナリティ形成に影響を与える最も根源的な要素としてとらえた発生論的観点¹⁷から考察し、理論づけるやり方は、フロイトにまで遡る。フロイトは、身体感覚と心理状態は密接に結びついており、人間には幼児期から性欲があり、それが生涯にわたり発達したり、減少、消失しな

¹⁵ サルズマン, 1985, 202

¹⁶ 嗜癖者には、コントロール欲求と、コントロールを喪失した結果生じる不安から逃れたいとする欲求が存在する。適量の飲酒（コントロール）ができず、全てのコントロールを放棄し、大量飲酒してしまうアルコール依存症者の行動は、オール・オア・ナッシングの様相を呈している。完全に自分をコントロールできないとわかると、全てのコントロールを放り出して対極（コントロール不能状態）に走ってしまうのである。サルズマンは、このような衝動のコントロール失敗を「強迫的問題」として取り上げ、その根底には、全能感情（尊大さ）が横たわっているとする（サルズマン, 1985, 200-208）。「尊大さ」によって嗜癖の全体が構成されているわけではないが、嗜癖の形成過程において注目すべき要素の一つであろう。

¹⁷ 過去の体験や幻想的記憶を遡及的に考察し、理論づける見方。

がら持続するとする「性欲論」を提起した（フロイト，1969）。

フロイトの性欲論では、乳幼児は誕生後から口腔、肛門、性器の順に、それぞれの部位を通して欲動を充足し、満足の体験を得る。これらの時期が、「口愛期」、「肛門愛期」、「男根愛期」であり、男根愛期とはほぼ重なる時期は両親との関係性の側面から「エディプス期」とも呼ばれる。また、それぞれの時期の性的欲動のエネルギーは、自分自身の欲求を満たしたいという欲求に限るものではなく、他者との愛情的な関係を求める欲求でもあり、フロイトは「リビドー (libido)」と呼んだ。例えば口愛期には、乳を吸うことによる快感の身体的陶酔という意味での自体愛が乳を与えてくれる母親などの養育者に愛着するというように、リビドーの対象は対象愛へと広がっていく。この時期に養育者との間に安心と信頼の感覚（基本的信頼感：basic security）が成立し発達する。

肛門愛期には、養育者による排泄の躰によって周囲の人々とのよい関係を保つために、社会の秩序や約束事、ルール（決まった場所で、決まった仕方で排泄すること）に従うことを学ぶ。この時期は、好まれる行為（躰に従って排便するなど）や贈り物をする事で相手を喜ばせるという働きかけを学ぶときでもある。肛門愛期までの関係性は、養育されるものとするものの関係という意味で、二者関係、または前エディプス的 (preoedipal) 関係とも呼ぶ。エディプス期以後は社会のなかで自分を位置づけていく時期であり、性別という要因を加えた対人関係の複雑な葛藤が生じ、この葛藤状況に適応することを学ぶ。エディプス期以後の関係は、三者関係、あるいはエディプス的關係と呼ばれており、対人関係の発達度を表す用語とされている。

以上のようにフロイトは、身体感覚と結びついた感覚や感情、あるいは対人関係は、現実のものとして体験されるだけでなく、幼児の内面でその子独自の他者像あるいは関係表象を作りだし、その後の現実の対人関係にも反映されるとした。彼は、幼児性欲の不健全な扱いが神経症の原因であると考えたが、現在では、神経症の形成には個人を取り巻く環境や自我の発達など、多くの要因が絡んでいると考えられており、幼児性欲の固着のみで精神病理を説明することには大きな限界がある。しかし、フロイトが示した周囲との関わり、特に養育者との関わりや働きかけが、成長の各段階における対人関係を形成し、それらを内面に取り入れながら、それらと自分の欲動との葛藤や適応によってパーソナリティが構成されていくという見方は、養育者の働きかけや関わり方の重要性を説くものとして、その意義は今日でも色あせることはない¹⁸。

¹⁸ フロイトが以上のような性欲論を含む精神分析理論を形作った時代背景には、性役割が厳しく規定されていたヴィクトリア王朝期のウィーン社会、また、男性優位のユダヤ社会があった。フロイトの理論も時代の影響を受け、親の役割や機能的要素を、父親と母親の役割としてはっきりと分けている。この時代、父親は家計の責任を負って外で働き、家族に対する絶対的権威を持っていた。一方、母親は家庭で子育てと家事というように、子ど

人生早期の経験がその後のパーソナリティの形成や心の健康に及ぼす影響についての研究は、フロイトの理論を含む精神分析的家族理論以降、Bowlby (1969) の attachment 理論、Ainsworth (1978) らによる strange situation という attachment の安定性についてのタイプ分けの研究などの流れがある。フロイト以降、母子関係の成立には養育者からの一方的な態度（例えば授乳をはじめとする育児の仕方）が重要であるという見方が大勢であったが、1960 年以降は、子どもの側にも生まれつき社会的相互作用の要求が備わっており、乳児のころから特定の他者に接近を求め、泣きやぐずり、微笑み、発声などの行動を向け、これらの行動に対して適切に反応してくれる対象に対して子どもは attachment を形成するという Bowlby の理論のように、人生早期の経験が子どもの成育や後のパーソナリティの発達や適応に及ぼす影響についての検討や、親子、さらには家族の発達の機能の研究へと向かった。

Bowlby は、戦争や貧困のために施設に収容される乳幼児が、施設や病院の設備を改善しても、一般の家庭の子どもよりも病気にかかりやすく、死亡率が高いということに加え、後の精神発達やパーソナリティ形成、その他の心理面でも問題を残す率が高いというデータ結果を検討するために、子どもの成育と被養育経験との関係を検討した。その結果、これまで施設症 (hospitalism) と呼ばれていたこれらの症例は、Bowlby (1969) によって、母性剥奪 (maternal deprivation) と呼ばれるようになった。Bowlby は、乳幼児と母親との人間関係が密接で持続性があり、両者が幸福感に満たされ満足しているような状態にあることが、乳幼児の性格発達や精神衛生の基礎であると考え、施設収容児にみられる心身の発達障害は施設収容児に限らず、「望ましい母子関係、あるいは保育に欠ける状況」があれば、一般の家庭で育つ子どもにも起こり得ることであることを示した。この Bowlby の母性剥奪理論は、子どもの心身の発達障害を、幼少期の被養育体験の質的な貧困から説明する視点の拡大へとつながった。

一方、Ainsworth (1978) らは、生後 1 年間における母親との相互交渉を繰り返し観察し、母子愛着と愛着行動を検討した。Ainsworth らの実験は、見慣れない場面 (strange situation = 子どもにとって初めての部屋) で母親と分離させた後で再会させるというステージを設定し、再会時に子どもの示す行動を、A・B・C の 3 つのタイプに分けるというものである。Ainsworth らは、母子の

もの養育への責任は、母親に負わされていた。この流れから、今日でも子どもの病理や不適応が母親の責任であるという母原病的な解釈や、母親の子どもへの愛情や養育態度は、生得的に賦与されたものであるなどといった誤解に結びつけられる恐れもあるが、これらの考え方は、フロイト以降、現在までにさまざまな修正がなされてきた。今日では、養育者が誰であったかというように、それが母親か父親か、産みの母親であるかそうでないかとか、養育者との接触時間の長さを問題にするのではなく、養育の質の重要性が指摘されるようになった (Parker, 1979) (Tennant, 1988)。

愛着においては、母親との接触や交流の量がある程度満足するものであることが必要であるが、その先は乳幼児の発する愛着信号に対して、母親からの応答が適切であるかどうかによって決定づけられると指摘した。つまり、養育に重要なのは、その量であるよりも質であるというわけである。

その後、養育の質を重視した養育研究は、Parker (1979) や Tennant (1988) らの研究を経て現在に至っている。

1・5 認知の歪みをもたらすもの―虐待のケース

以上概観したように、養育の質はパーソナリティ形成に重要な影響を与える。不健全なパーソナリティ形成は、自尊心の低下につながる可能性をはらみ、その結果、抑うつ的傾向を招き、嗜癖行動への道を開くことになる。

養育の質を下げるものとして真っ先に考慮されるのは、幼児期における虐待であろう。幼児期の虐待経験が後の発達過程において不安定な愛着パターンと共に、抑うつや解離、薬物乱用や自傷といった嗜癖的な行動へとつながるといいう先行研究は数多い (Brown & Kolko, 1999; Muller, Lemieux & Sicoli, 2000, 2001; Roche, Runtz & Hunter, 1999; Vall & Silovsky, 2002)。

子どもへの虐待 (child abuse) は、大きく、1. 身体的虐待 (physical abuse)、2. ネグレクト (neglect)、3. 性的虐待 (sexual abuse)、4. 精神的虐待の四つに分けられる。この中で精神的虐待は、「情緒的侮辱行為と暴言」や「情緒的無視と情緒的剥奪」という内容を含む。増田 (2004) の定義によると、「情緒的侮辱行為」とは、「親や養育者が子どもの行動にけっして満足しないで、執拗に非難し、とがめ、脅し、嘲笑し、恥をかかせ、やりこめ、不安と恐怖をひき起し、情緒的に虐待する冷酷な行為」といった「養育者の積極的な暴言やあからさまな拒絶行動」である。また、「情緒的無視」とは「苦痛や苦悩の訴え、援助・愛情・優しさ・同調・安心・励まし・受容などの懇願を無視し、意識的に拒絶する行為」であり、養育者の「消極的な無視や無関心」によるものである。

精神的虐待は、それによって直接的に身体や生命の危機が表面化するものではないことから実態把握が難しく、身体的虐待や身体的放置、性的虐待に比べると、社会的関心の低いものであるようだ。しかし、精神的虐待はその他の虐待の根底にも共通して潜むものであり、子どもへの虐待を考える際に、その核心をなすものとして見逃してはならないものである。またいずれの虐待にしても、それは当人のトラウマとなり、成長後も様々な障害を引き起こすとされる。

幼児期のトラウマは、それが突然のものであれ継続的なものであれ、子どもを無力にし、通常の養育のメカニズムを壊す外的な精神的打撃の心理的結果であると定義されている (Terr, 1991)。虐待を経験した子どもは、発達の過程で多くの混乱に苦しみ、それらの混乱は、愛着システムや認知の発達に影響を及ぼ

す (Briere, 1996)。人が特定の他者に持つ強い情緒的絆の感情としての attachment は、特に新生児が親に対して持つものであり、この attachment によって作られる自己と他者についての表象を内的表象 (internal working model) という (Bowlby, 1958, 1977)。虐待が常態化した養育環境が原因となったトラウマは、子どもたちの内面に不安定な attachment を形成し、自分自身や他者に対する認知の歪みにもつながる。この認知の歪みは、幼児期、成人期のどちらにおいても同様に現れる (Muller et al, 2000, 2001; Roche et al, 1999)。つまり、幼児期に確立された内的表象の型枠は、成人期の対人関係にも影響を及ぼすということである (Bartholomew, 1990, 1993)。幼児期に形成された attachment によって作られた自己や他者についての内的表象の型枠が、成人期においての人間関係の在り方や行動パターンにも影響を与えることになる。

ところで、行動パターンを組織化するにあたっては、習得された価値のシステムが重要になってくる (Clarkin et al, 2005)。このシステムは、一般に親の価値観や禁止が大きくかかわるという側面を持つものの、経験 (特に子どもと養育者間の相互作用による) によって成熟したものであれば、安定的で、親の価値観や禁止に固く束縛されることもなく他者との外的関係からも独立し、自己調整の芽生え、否定的感情を超えた積極的情動の優勢や仲間とのスムーズな相互作用の増加をもたらす。一方で、このような正常な価値システムの発達は、肉体的、感情的虐待によって特徴づけられるような悩ましい環境によって混乱させられもする。そうすると子どもは、否定的情動、貧弱な自己調整、自己と他者概念の混乱、仲間との悩ましい関係を呈してくる。このような対人関係の混乱もまた、不健康な自己愛や自尊心の低下を招く要因となるのである。

1・6 自我同一性の統合

人生早期の体験の影響は対象関係の歪みとも関係してくる。「自己表象」、「対象表象」、「自己表象と対象表象」の相互作用における情動 (affect) の働きという3要素を一つの単位として組織化されたものを、対象関係ダイアッド (object relations dyad) と呼ぶ。対象関係理論 (Jacobson, 1964; Kernberg, 1980; Klein, 1957; Mahler, 1971) においては、Freud によって記述されたリビドー (libido) と攻撃性 (aggression) の衝動が、ある特定の他者 (対象) との関係において経験され、この内的な対象関係は精神構造を組み立てる部品として重要な役割を持つことが強調される。

情動は成長の初期段階に現れる先天的な気質である。未熟な自らの生存の手段を助ける生物学的機能であるとも言え、自分が必要としていることの合図¹⁹を送るためには激しいものとなる。発達初期の対象関係の中で、愉快で楽しい情

¹⁹ 喜びや育むものを探すことや、害を排除するために表現するもの。

動はリビドーとして組織化され、苦痛、嫌悪、否定の感情は攻撃として組織化される。

幼児が情動の頂点 (peak of affect) にあるときの自己と対象との関係 (対象関係ダイアッド) は、情動記憶構造 (affective memory structures) の中でコード化される。また、情動記憶構造は、発達している個人の動機づけシステムにも影響を与える。脳神経生理過程における記憶痕跡という視点から内的対象関係にアプローチするやり方もあり、近年は脳神経生理学においてもこのことを支持する研究結果が出ている²⁰。

また、子どもの成長過程における多様な経験は、満足した経験をもとに理想化された「良い」イメージと、否定、嫌悪、無価値な「悪い」イメージとともに組み立てられる。乳幼児の内界には、「良い」関係単位 (自己および対象についての良いイメージ) と「悪い」関係単位 (自己および対象についての悪いイメージ) が分裂して存在している²¹。正常に成長している子どもには、生後2、3年の間に、この自己と他者の極端な「良い」と「悪い」の融合がある。この融合は、人は良い性質と悪い性質の混合なのであり、時に満足し別の時には不満を抱くものだという現実を認めることにつながるとされる。

このことは、自己と対象の首尾一貫した統合された感覚と、自己一致性を映す行動のパターンの両方を生じさせる。自己の首尾一貫し統合された感覚は、自尊心や他者との関係や仕事との関わりから喜びを得る能力の基本である。また、対象の首尾一貫し統合された感覚は、共感や物事に対する機転を含めた対象の現実的評価に寄与する。自己と対象に対する一貫した感覚は、自立的感覚を持ちながら対象との感情的関わりを構築するための能力となり、自己と対象との成熟した関係の基礎となる。しかし、正常な対象関係が育っていない場合は、自己と他者の明確な表象や自我同一性の統合を維持することは困難であり、自他の歪んだ表象をベースにした関係に陥る。このことは、一次嗜癖である関

²⁰ 発達初期における母子関係は、あり方次第で一種のストレスの元となる。近年では、こうしたストレスが脳の発達にも関係しているという報告がある (De Bellis ら, 2002; McEwen, 2000; Andersen ら, 2004; Teicher ら, 2004)。人の脳は、胎児期から幼児期を経て、成人期、老年期に至るまで徐々に発達しながら変化していく。脳の発達は、遺伝的に規定されているのか、それとも環境によって決まるのかという問題は、哲学や心理学などでも盛んに議論されてきたことであるが、脳科学の分野では、環境要因がもっとも大きな役割を演じていると考えられている。脳の発達の大枠は遺伝的に規定されているが、出生前の母胎環境や生後繰り返し受けるさまざまな刺激 (環境) によって、神経細胞の数やそのつながり方が複雑に変化していく。人の体の脳以外の臓器は、生まれたときに完全に規定されており、成長にともなって変化していくのは、その大きさや長さだけである。これに対し、脳の発達の方は他の臓器と違い、形態だけではなく、その機能も変化していく。

²¹ カーンバーグは、分裂の機能は「本来は精神装置における統合能力の“生理学的”な欠如であったものの結果」であり、「その欠如は、早期の自我の基本的な防御操作となる」という。(カーンバーグ, 前田重治訳, 1983, 25)

係嗜癖へと道を開く結果となる。

1・7 抑圧、分裂、投影同一視

嗜癖者の自己システム（図1）を手がかりとした考察の最後に、防衛機制としての抑圧、分裂および投影同一視を俎上にのせる。抑圧とは、意識的な自我から観念や情動のいずれか、あるいは両者を排除する防衛機制（ベンジャミンら、井上令一・四宮滋子訳、1996、222）である。自我発達の初期の段階では分裂が特徴的であるが、発達後期になると抑圧が中心的防衛機制になる（カーンバーグ、1983）。より正常な自我発達のプロセスでは、発達後期になると抑圧の機制が働き、自我の核を固定し保護するとともに自我境界の形成に決定的な貢献を果たす。分裂から抑圧への移行が正常に進み、抑圧が優勢になるほど自我はしっかりとしたものとなっていく。しかし、発達早期に好ましい発達が遂げられなかった場合は、発達後期の段階に至っても分裂が優勢であり、後にそれが自我境界の形成を妨害する要因となるとされる。

マラー（高橋雅士・細田正美・浜畑紀訳、1981）の分離個体化理論²²によると、早期乳幼児期における「分離—個体化の過程」の正常な進展が阻害された場合、その影響は固定化し、構造化され、後の人間関係の中で繰り返し現れてくる。子どもにとって、個体化に向かう時期は母親からの承認や支持をより必要とする時期である。この時期に自らも不安を持つ母親は、子どもの自律的振る舞いに対し、喜びを分かち合うことができない。子どもが分離し始めると、子どもへの関心を放棄してしまい、「見捨ててしまうぞ」という恐怖を与えることになる。さらにはわが子の受身的で退行的、依存的な行動に対してのみ、支持、愛情の供給を行うことになるため、子どもは個体化に向かう急激な発達と、その発達の過程での母親からの情緒的供給の放棄に対する恐れとの間でジレンマを感じたり、見捨てられ抑うつに陥る。そこで、子どもはこの「見捨てられ抑うつ」を回避しようと、自己防衛としての分裂機制（splitting）²³を用いることになるのである。しかも、この分裂機制は、その他の防衛機制によってさらに強化され、自立への発達を妨げることになるとされる。

嗜癖者においては、前節で触れたような「良い」と「悪い」の融合プロセスが進化していない。これは、分裂（splitting）の内的メカニズムであり、嗜癖者

²² マラーは、乳幼児が母親との未分化な存在から一個の独立した個人として誕生するまでの過程を「分離—個体化の過程」と呼び、「正常な自閉期」、「正常な共生期」、「分離—個体化期」とに分けた。この過程はおおよそ30～36ヶ月までに達成される。

²³ カーンバーグは、境界性パーソナリティ障害（BPD）に触れ、その中心メカニズムは分裂機制であるとする（カーンバーグ、1983、3-40）。また、マスターソンも、BPD者の用いる否認、原始的理想化や価値切り下げといった原始的防衛は、分裂機制を用いることによって強化されると指摘する。（マスターソン、1990。）

の自己システムにおける中心的メカニズムである。嗜癖者の自己システムにおいては、「悪い」関係単位が圧倒的となり、この「悪い」関係単位により、彼らは「良い」関係単位が破壊されはしないかという恐れを抱く。このため、両者を分裂した別のものとして分けておくという分裂機制が発動し、「良い」関係単位を保護するのである²⁴。この分裂は後に、同一化システム（自己、対象世界および自我同一性一般）の組織化とその病理に関与する機制となるとされる²⁵。

このように嗜癖者は分裂機制を用いるために、自己や他者のなかに「良い」部分と「悪い」部分が存在することを十分認識できず、仮に多少認識できたとしても、この二つを同時に認識することは著しく困難である。自己や他者を前に、良い部分もあれば悪い部分もあるというように、分離、明確化することができないのである。つまり、自己や対象を理想化して、良い面しか見ていないときには、悪い面を選びわけて分離できないことから、良い面のみが見えてしまうという分裂が生じ、「良い」と「悪い」の統合が行われなくなるのである。

この過剰な分裂の結果、自己と対象が区別されるプロセスが妨害され、自我境界が曖昧なものになる。嗜癖者は、このもろい自我境界のために、自己の願望や絶望、怒りなどを外部対象に投射し、それを外部対象のものであると取り違えて感じるようになる。このために自分の願望や怒りが投影されている外部対象を支配しようとする欲求が生じてくる。これは投影的防衛システム（projective defense mechanism）に特徴的である。

投影同一視は、他者変容的に働く防衛機制のひとつでもある（成田，1989）。つまり、本来自分のものである感情や衝動に向き合うことが耐え難い場合、それを対象者に移しかえ、対象のものとして体験するのである。この投影同一視が適応的に健全に機能した場合は、共感や思いやりと呼べるものになるだろう。しかし、対象者に対する恐怖心や被害者意識が前面に出ると病的なものとなり、対象者も混乱の中へと巻き込まれることになりかねない。これは、嗜癖者の人間関係のあり方が早期乳幼児期に固着している可能性があるために、分離個体化期の社会的身分や役割が存在しない二者関係が再現されることによるとされる。

こうした関係は、現実的な生身の関係や身分や地位といった社会的構造を欠くことから、対象をコントロールしやすい状況をつくりだそうとする。そこで嗜癖者は、対象者個人の都合を無視して自分の要求に服従させようとし、対象

²⁴ ここで強調されなければならないのは、対象関係論は、単なる認知イメージだけではなく、対象を奪いさることへの憎悪を含む激しい原初的情動（primitive affect）に関係していることから、純粋な認知心理学とは区別されるということである。

²⁵ 本来、後期の発達段階では、自我の統合性は、分裂機制によって妨害されることは少ない。仮に重篤な退行や、自己や表象世界の分裂があったとしても統合性は部分的に維持される。（カーンバーグ，1983，25）

者はこの関係に苦痛を感じるようになり嗜癖者と距離をとろうとする。しかし、対象者が自分の思い通りに動かないという現実を知った嗜癖者はその現実を受け入れられず、今度は対象者を激しく非難、攻撃してしまう傾向にあるのである。これは、マスターソンのいう「見捨てられ感情 (feeling of abandonment)」とも関係しており（マスターソン, 成田善弘訳, 1979）、対象へのしがみつき（嗜癖的關係）となって表面化する。また、このような投影同一視は、分裂機制とセットになって作動し、否認や原始的理想化、価値切り下げなどを生み出すことになる。そして原始的防衛メカニズムは、人間関係によって起きてくる否定的思考が活性化する危険性に抗する防衛的なものとして機能するとされる。

以上、嗜癖者および非嗜癖者の自己システムを形成されると思われる各因子について、先行研究を基にしながら個別的に説明を加えてきた。嗜癖者の自己システムにおける最大の特徴は、**図1**において提示した「刺激防御壁」と呼ぶべきものの存在であった。外部からの刺激を遮断する壁の存在は、自我の対象認識を歪曲するだけでなく、自己愛の発達を阻害する結果となる。これによって生じる自尊心の低下や抑うつは、防衛機制としての嗜癖へと連なると指摘し、防衛機制の代表的な要素として抑圧、分裂、投影同一視に言及した。

自己愛の健全な成長は、対象関係がどのように育まれてきたかということにかかっていた。Bowlby の attachment 理論のように、人生早期の養育環境が大きく貢献しているという指摘は少なくない。裏を返せば、劣悪な養育環境はパーソナリティの発達を阻害することとなり、対象認知の歪みをはじめ、さまざまな障害を惹起することにもなる。

第2章 パーソナリティの関与

2・1 気質と性格

第1章では、嗜癖およびその辺縁に存する先行研究から導きだした嗜癖システム図を基に、嗜癖の全体像を俯瞰した。それは、嗜癖者における認知の歪み、すなわち不全な対象関係が自尊心の低下を招き、抑うつから抗いがたい問題行動へと走るといった悪循環の図式でもあった。ただ、嗜癖の定義（仮説）や嗜癖の循環構造モデルを示すことはできたが、例えば、嗜癖と最も関連性が強調されていた被養育体験ひとつとってみても、その質が高ければその人は合理的な行動ができて、質が低ければ不合理な行動に走るとは必ずしも断言できないという曖昧さが依然として残る。これに付随して、嗜癖という概念そのものが実際のところ成立するのかという疑問も残る。

嗜癖行動は「償い行動であり、行動することを通じて自己同一性と気分の問題を処理しようとする試みである」という主張（Dittmar, 2004; Elliott, 1994）は、嗜癖の循環の中に取り込まれた防衛機制を裏付けるものであり、嗜癖者が不安やいらいら感、抑うつから逃れるために制御不能の強迫的行動に走る様子を説明している。嗜癖者は嗜癖的な行動によって、いったんは心の平安を得るものの、その後、罪悪感に苛まれ、再び不安、抑うつへと陥る。換言するならば、ひとたび嗜癖の悪循環に囚われた人たちのこの繰り返しは、一種のアイデンティティの再確認作業ということができるかもしれない。

嗜癖行動が内面に引き起こす不安、罪悪感や抑うつなどには、自尊心の低下が関与している。人間が社会的存在である以上、自己の置かれた立場や周辺環境は、自己の行動を決定するにあたって、大きな影響を与えるだろう。しかし、社会システムなり周辺環境が人間を不安、罪悪感といった心理状態に追い込む力を持つとしても、同じ量のそうした負荷を抱えた人たち全員が不適応状態に陥るわけではない。この健常者群と嗜癖者群を分けるものを、本章ではパーソナリティという概念を使って検証する。その際、基になるのは、パーソナリティは気質（temperament）と性格（character）の2因子によって構築されたとした Cloninger ら のパーソナリティ理論である（Cloninger, 1993）。

同理論では、パーソナリティは生得的に備わる「気質」と後天的に環境からの影響を受けながら規定される「性格」との相互作用によって形成され、特に、性格は成熟の度合いを示すものであるとしている²⁶。本章では、成熟とは逆向きの退行現象としてとらえられる嗜癖行動に、パーソナリティ（気質と性格）と、

²⁶ もっとも、パーソナリティの成熟が高まると自発性の能力が発揮されるようになる。循環する嗜癖からの脱却の一つの可能性をはらむ概念であり、人間の合理的な行為につながる。この点については第3章でふれる。

パーソナリティ形成に重要な影響を及ぼすと考えられる人生早期における親の養育態度がどのように関わっているかを統計的手法によって考察することになる。併せて、実臨床において嗜癖という包括概念そのものが成り立つかどうかという基本的な問題も検証する。

2・2 パーソナリティ理論

アリストテレスは『ニコマコス倫理学』において、「性格」は「習慣」によって形成されると論じている。つまり、人の性格の状態は、優れた性格であれ悪い性格であれ、自然によって私たちにそなわるものではなく、習慣を通じて生まれるというわけである。また、若い頃からの習慣づけは、結果として後の性格形成において、個々の全面的に大きな違いを生むとも言い添えている。一方、自然によって私たちに備わるものは、まず当の能力であり、その後にその能力を現実化する能力である。アリストテレスは自然によって備わる能力の例として、感覚を挙げる。私たちは何度も見たり聞いたりすることによって感覚能力を得たのではなく、感覚能力を持っていたからこそ用いることができたのであるというわけである（アリストテレス, 林一功訳, 2002)²⁷。

またカントは次のように述べている。

悟性や機知や判断力など精神の才能と言われているようなものは、あるいは、勇気や決断力や根気といった気質の特性は、無論いろいろな点で善いし望ましい。だが、そうしたものは生まれつきの自然の恵みであって、それを用いるはずの意志が善くなければ、したがって意志の個性的性質である性格が善くなければ、きわめて悪く有害になるかもしれない。幸運の恵みについても事情は同じである。権力や財産や名誉は、それどころか健康や、全く平穩無事で自分の境遇に満足しているという意味での幸福でさえ、勇気をかき立て、そのせいで時々慢心させもする。そうなるのは、善い意志を欠く場合である。幸運の恵みが心に及ぼす影響を、行為の全原理ともども、是正し普遍的＝合目的とするのが善い意志である。（カント, 平田俊博訳, 2000)²⁸

このように哲学領域においても、従来からパーソナリティは生得的な部分と、環境や自己努力で発展・成熟する部分が合わさって出来上がるとする考え方があった。Cloningerらは、パーソナリティを形成する二つの因子のうち、「気質」は遺伝的に規定され、「性格」は気質を基礎としながら後天的な環境で規定されるとした。そして、パーソナリティは「気質」と「性格」が相互に影響しあっ

²⁷ アリストテレス, 2002, 56-59

²⁸ カント, 2000, 1-116

て発達すると仮定した (図 3)。この考えを基に個人の中の気質と性格の傾向性を査定するために開発された質問紙が Temperament and Character Inventory (TCI) である。

以下において、この TCI 及び、親の養育態度や被養育体験を査定する質問紙 Parental Bonding Instrument (PBI) を用いた実際の質問調査データを統計学的に解析し、嗜癖とパーソナリティとの間の関連性を明らかにする。そこでまず、解析調査に移る前に、TCI 及び PBI の質問紙についての説明を交えながら、嗜癖に関するいくつかの仮説を提示したい。

2・3 Temperament and Character Inventory

TCI において、パーソナリティは気質と性格からなり、気質は四つの下位尺度、性格は三つの下位尺度を持つ。

【気質】

「気質」は遺伝性のものとされる。(1) 行動の触発 Novelty Seeking (NS : 「新奇性追求」)、(2) 抑制 Harm Avoidance (HA : 「損害回避」)、(3) 維持 Reward Dependence (RD : 「報酬依存」)、(4) 固着 Persistence (P : 「固執」)²⁹ の4次元(下位尺度)で構成される。主として幼児期に顕在化し、認知記憶や習慣形成に際して前概念的バイアスを伴うものとみなされている。また、これらの次元は、中枢神経内の「ドーパミン(dopamine)」、「セロトニン(serotonin)」、「ノルエピネフリン(norepinephrine)」といった神経伝達物質の分泌と代謝に依存しているものと想定されている (Cloninger, 1987)。

各次元の詳細は以下のとおりである。

(1) 「新奇性追求 (NS)」は、行動の触発システムとして考えられており、「探究心 vs. 厳格」、「衝動 vs. 熟考」、「浪費 vs. 儉約」、「無秩序 vs. 組織化」というさらに細かい特性から成り立っている。高い新奇性追求の行動は、頻回の探索的活動、新奇刺激への接近、嫌悪刺激からの活動的回避などと特徴づけられる。新奇性追求の高い個人は好奇心が強く、物事を直感で判断し、積極的に規則を破る行動を示す傾向がある。「新奇性追求」においては、快楽行動の刺激的な触発におけるドーパミンとの関連が想定される。

(2) 「損害回避 (HA)」は、行動の抑制に関わり、「予期不安・悲観 vs. 無抑制の楽観」、「不確実性に対する恐れ」、「人見知り」、「易疲労性・無力症」といった特徴を持つ。損害回避の高い個人は、心配性、悲観的、内気、慣れない状況で緊張し疲れやすい傾向がある。反対に損害回避が低いと、楽天的、外交的、危険を恐れずむしろそれを好む傾向がある。「損害回避」や行動の制御にはセロ

²⁹ 鍵括弧内の呼称は、TCI 日本語版における下位尺度名

トニンが重要な役割を果たしていると考えられている³⁰。

(3)「報酬依存 (RD)」は、行動の維持に関わるもので、「感傷」、「愛着」、「依存」などがその特徴である。ここでいう報酬とは金銭的見返りを指すのではなく、対人関係上の情緒的報酬を指している。報酬依存が高い人は、情緒豊かで思いやりがあり、他者の承認を求める傾向がある。また、報酬依存の測定値と尿内のノルエピネフリン量とに有意な相関があるという研究結果もある (Garvey, 1996; Curtin, 1997)。

(4)「固執 (P)」は、従来は報酬依存の下位尺度であったが、TCI においては、行動遺伝学の研究 (Stallings, 1996) などの成果を基に報酬依存から独立して考えられるようになり、TCI においては新たな気質特性として概念化された。固執の高い個人では、物事に熱心に取り組み、野心的で完全主義という傾向を持つ。

これら四つの気質特性の絡み合いによって観察される行動は、知覚的経験、つまり学習と密接な関わりを持っており、知覚経験を通じた環境と気質の相互作用、並びに気質下位尺度間の相互作用の関数であると考えられている (Cloninger, 1987)。

【性格】

Cloninger らは、「性格」が環境の影響を受けて成熟するものと考えた。人の行動を自動的に触発、抑制、維持、固着する反応は、発達初期の気質によって決定されるが、これらの反応は経験による自己洞察学習において概念的に再組織化され、新しい適応的な反応に変容し、性格が気質を調整するかたちでパーソナリティの成長へとつながる。つまり、パーソナリティ理論において査定される人間の成熟度は、性格部分の高得点によって示され、パーソナリティ障害は性格の低得点で規定される。このことは、環境からの影響を受けて成長するという性格の特性を考え合わせると、パーソナリティ障害、あるいはパーソナリティ障害を伴ったあらゆる適応障害への対処に際して、環境への働きかけが重要性を持つことを示していると考えられる。

「性格」は、三つの下位尺度、つまり (1) 自律的個人 Self-Directedness (SD: 「自己志向」)、(2) 人類社会の統合的部分 Cooperativeness (C: 「協調」)、(3) 全体としての宇宙の統合的部分 Self-Transcendence (ST: 「自己超越」) からなり、この性格の3次元が占める割合は自己同定の度合によって異なる。

(1)「自己志向 (SD)」は、一人の自律的な人間として選択した目的や価値観に従って適切な行動を取り、その行動の結果に対して自己責任を持とうとす

³⁰ 極端に損害回避が高いと、セロトニンの turnover が高くなるという研究 (Demitrack, 1992) や、極端に危険を好み衝動的な人は、セロトニンの turnover が低いという研究 (Stein, 1993) がある。

る傾向のことである。「自己責任 vs. 他人非難」³¹、「目的志向性 vs. 目的志向性の欠如」、「臨機応変」、「自己受容」、「啓発された第二の天性」³²といった特性を持つ。自己志向の高い人は、自尊心が強く責任感があり、自分の目標を追求するために柔軟に行動する能力がある。

(2)「協調 (C)」は、他者の確認と受容に関する個人差を説明するものであり、「社会的受容性 vs. 社会的不寛容」、「共感 vs. 社会的無関心」、「協力 vs. 非協力」、「同情 vs. 復讐心」、「純粋な良心 vs. 利己主義」から成り立っている。協調得点が高い人は、他者に対して寛容で、同情的で協力的な姿勢を示す。「協調」が説明する共感や、協力、同情などは、対象との関係性、さらには社会関係において示されるものだけに、成熟のサインとしても重要なものである。つまり、協調は有機的人間集団の中で成熟するパーソナリティ特性である。

(3)「自己超越 (ST)」は、従来のパーソナリティ研究では看過されてきた特性である。自己の存在を一人の人間としてとらえるのではなく、世界や宇宙を構成するものの一部としてとらえる傾向である。全てのものは全体の一部であるとする「統一意識」の状態を含み、自己と他者を区別する重要性はなく、個人的自己というものはない。自己超越は、「霊的現象の受容 vs. 合理的物質主義」、「自己忘却 vs. 自己意識経験」、「超個人的同一化 vs. 自己弁別」という特性を持つ。自己超越の高い人は、自己と世界が一つになるようなスピリチュアルな体験や、科学的には説明しにくい第六感を体験するということもある。自己超越は広い世界の中で成熟するパーソナリティ特性でもある³³。

2・4 TCI のパターンと嗜癖の関係

嗜癖の対象になる種々の行動は、元来、日常的に誰もが遭遇し、なかには生きていくため、あるいは生活していくためにほとんど毎日行っている行動も少なくない。言い換えるならば、誰もが嗜癖に陥る状況にさらされているのである。しかし、嗜癖の対象となるような行動を日常的に行っていても、外的にも内的にも適応的な行動をとることができる者がいれば、いくつもの嗜癖行動に悩まされたり、嗜癖的行動を取り続けた結果、家庭崩壊や経済破綻にまでいきつく者とが存在する。これには、個人のパーソナリティ特性が大きく関与して

³¹ 「自己責任 vs. 他人非難」のように対になって示されている傾向は、自己責任と他人非難が一直線につながっていることを示している。自己責任の傾向が低いと、自己の行動に責任を取らず他人に責任転嫁して非難する傾向が高くなる。

³² 「啓発された第二の天性」とは、「Yoga」における用語であり、自らの目標と価値観を明確にすると顕在化する性質である。自らの目標や価値観にもとづいた一貫した反応を自動的に行うことで第二の天性を啓発すると、個人が本来持っている性質を超えて、抑圧された葛藤を感じることなく目標にそった行動をとることができる (Cloninger, 1993)。

³³ Cloninger らは、自己超越の尺度によって測定される現象は、特に 35 歳以上の成人の適応状態と人生の満足度を知る上で重要であるとしている (Cloninger, 1993)。

いると考えられる。

そこで、本研究ではパーソナリティの傾向性を測定する TCI にも、嗜癖傾向に関わる特徴的パターンがあると仮定した。TCI における七つの下位尺度の中で、嗜癖との関連性が強いと思われるのは、気質では「高い新奇性追求」と「低い損害回避」、性格では、「低い自己志向」である。第 1 章で提示した嗜癖概念の定義において、(1) 自尊心の低下、(2) 行為抑制の周期的失敗、(3) 重大な否定的結果にも関わらず反復する一などの特性を挙げたのもこうした考え方からである。さらに、回復の可能性と関連して第 3 章で詳しく触れることになるが、嗜癖の特徴として(4) 自発性、合理性の能力の欠如を加えることも可能である。

嗜癖の触発システムである「新奇性追求」が高ければ、行動への接近や頻度も高くなる。自動車にたとえるならば行動へのアクセルがより深く踏まれた状態である。加えて、行動の抑制に関わる「損害回避」が低ければ、たとえその行動が否定的な結果につながるとしても抑制のブレーキが弱くなり、反復されることになる。つまり、気質面では、アクセルが強く、ブレーキが弱いという傾向が嗜癖傾向を強めると想定される。

「自己志向」は、目的や価値、自尊心に関わる因子であり、嗜癖的障害の核心部分であるとも言える。また、性格の下位尺度である「自己志向」は、誕生後、環境からの影響を受けながら形成されるだけに、さまざまな視点から注意深い考察が求められる性格因子でもある。この「自己志向」が低いと、「私はこれでいいのだ」という感情によって形成される自己に対する自信が持てず、現実から逃避したり、将来の目的に対して価値を見いだせないなどの空虚感にさいなまれることになる。アクセルが強く、ブレーキが弱い、その上、目的もないままに自信が持てない運転であれば、事故に遭う（自分の体力や身体機能が損なわれる）か、ガソリン切れにならない限り、自分自身の力でストップさせるのは困難である。まさに嗜癖の特性を表しているのである。

逆に、「自己志向」が高い場合は、仮に、アクセルが強く、ブレーキが弱いとしても、自己の価値ある目的を見据えた柔軟な判断ができるようになる。回復へのキーワードとして挙げた「自発性」、「合理性」の能力も、この「自己志向」との関わりが強いと考えられる。今回行った統計分析では、環境因子として親の養育態度 (parental style) を設定し、「自己志向」や嗜癖因子が、相互にどのような関連を持つかということを見た。こうした相互関係の考察は、嗜癖的障害からの回復への糸口を見出すための端緒を示すものとしても大きな意義を持つはずである。

人間の発達は、Cloninger らが提示したパーソナリティ理論が示すように、生得的にあらかじめ決められた遺伝的なプログラムに依存するかたちで展開する。同時に、社会的存在として環境からの刺激を受け、さらには自己を外界と

適応させるというように、環境との相互作用による後天的なプログラムによって形成される。生物学的な存在としての「ヒト」として生まれてくる私たちは、親や兄弟、祖父母などの家族、さらには周囲との対人的交渉を重ねながら、社会的存在としての「人」に成長していく。そこで次節では TCI とともに環境因子として統計分析で扱うことになる親の養育態度、あるいは被養育体験について考察を加える。併せてこれらについて実際に調査、分析のために使用した Parker 開発の Parental Bonding Instrument (PBI) (Parker, 1979) に対する若干の説明を加え、メンタルヘルスとの関係にも触れる。

2・5 Parental Bonding Instrument

Parker (1983) は、Champney (1941)、Perris (1980)、Raskin (1971)、Schaefer (1965)、Schvaneveldt (1968a;1968b)、Solyom (1976)などの親の養育態度と行動のチェックリストを用いた研究を精査し、親の養育態度項目に対する回答から、それらに共通する因子を抽出した。その結果、多少の配置の差はあるものの、「母親の過干渉」について定義的な共通性が見られたと報告している(Parker, 1983)。

また、Parker は人生早期の発達や社会化の過程で受ける親からのケアや干渉、さらには青年期以降に精神医学的症状を呈する患者の回想的報告から共通して得られる「愛情欠損的統制 (affectionless control)」と呼ばれる傾向に着目し、これらの「親の養育の質」を定量的に測定することを目的に、Parental Bonding Instrument (PBI) を開発した (Parker, 1979)。

PBI は、15 歳以前に父および母から受けた養育を遡及的に評価させる自己評価尺度である。調査実施条件や目的によって短縮簡易版も用意されているが、フル項目である 25 項目版は、母親用、父親用それぞれ 25 の質問項目からなり、ケア (care: 愛情、暖かさ、共感、親密さ)と過干渉 (over-protection: コントロール、侵入、過剰接触、幼児的扱い、自立の妨害) の下位尺度で構成され、当てはまる程度を 4 段階で回答することが求められる。どちらも加算点数が高いほど強度が大きくなる尺度である。日本語訳は鈴木らが行い、その妥当性を Kitamura が報告している (Kitamura, 1993)。Parker らが再検査法によって高い信頼性を確認している (Parker, 1979)。PBI はまた、両親や同胞による他者評価と高い一致率を示すことから、養育行動の回顧的認識を意味するだけでなく、実際の養育行動を反映したものである可能性が示唆されている (Parker, 1989)。

これまでの精神医学・心理学の研究の中で、思春期以降のさまざまな心理状態の基礎を児童期に親から受けた養育の良し悪しが規定していることが示されてきた (竹内, 2000)。PBI はこうした研究の流れの中で開発され、多くの研究者に

よって使用されてきた。これまでに、統合失調症 (Byrne ら, 1990; Onstad ら, 1994; Warner ら, 1988), 強迫性障害 (吉田ら, 2000), 摂食障害 (高橋ら, 2000), 人格形成 (Byrne ら, 1990; Zweig ら, 1991), 結婚適応 (Kitamura ら, 1995) などと PBI の関係が報告されている。ことに多数の報告があるのがうつ病である (Furukawa, 1992; Murphy ら, 1997; Parker, 1979b, 1983; Plantes ら, 1988; Rey ら, 1995; Rodriguez Vega ら, 1993; Sato ら, 1997a, 1997b, 1998; Uehara ら, 1998; 坂戸ら, 2000)。低いケアと過干渉がうつ病の者の親の養育の特徴であることが多くの研究者によって繰り返し指摘されており、「低いケアと過干渉＝成人のうつ病」の関係は強く支持されている。

2・6 共分散構造分析による検証

本節では以下の仮説の下、統計学的手法を用いて嗜癖とパーソナリティ及び環境との関連性の検証を試みた。これまで説明してきたように、TCI はパーソナリティ、PBI は養育体験を査定する質問紙である。今回はこれらの質問に加え、アルコール、喫煙、危険な性行動という三つの嗜癖的行動に関する質問調査³⁴を行い、得られたそれぞれのデータを共分散構造分析にかけた。

【仮 説】

- (1) アルコール使用、喫煙、危険な性行動は、ひとつの潜在変数で説明できる(「嗜癖」因子)。
- (2) 特定の気質(高い新奇追求と低い損害回避)が嗜癖因子を決定する。
- (3) 特定の性格傾向(低い自己志向と高い自己超越)が嗜癖因子を決定する。
- (4) パーソナリティの形成に親の養育態度が関与し、形成されたパーソナリティが嗜癖に影響を与える。

【対 象】

日本の全大学(615校)のうち、協力の得られた110校(18%)に33,799人分のアンケート用紙を配布し、うち有効な回答は4,357票であった。本研究の解析は、このうち25歳以下の学生を対象に、今回使用する変数について有効回答を得た4,024人分のデータを扱った。学生への調査票の配布は、各大学に一任し、授業時、健康診断時、大学祭の講演時に配布されるか、もしくは、学生課、健康管理センター、保健室に調査票を入れた箱が設置されるなどの方法が取られた。調査は無記名で、参加はあくまでも学生の自由意志によるものであるよう依頼した。その説明は各大学に依頼すると同時に調査票の表書きに文書で記した。調査票の回収は、学生個人から調査者へ直接郵送法の形をとった。

³⁴調査期間は平成11年9月26日～平成12年3月31日である(岸田, 2000)。

【調査項目】

属性：性別、年齢

喫煙：①1ヶ月以上毎日タバコを吸った経験の有無（1度も吸ったことがない、以前は吸っていた〔今は禁煙中、今は吸わない〕、現在吸っている）、②タバコへの依存の程度（最も多く吸っていた時点での1日あたりの本数）。

飲酒：①飲酒の有無（飲んだことがない、以前は飲んでいて〔今は禁酒中・今は飲まない〕、現在飲んでいる）。②酒への依存の程度（まったく飲まない：1、1カ月に1回以下：2、1ヶ月に1～3日：3、週に1～2日：4、週に3～4日：5、ほとんど毎日：6）。

性行動：①初交年齢、②現在の性的パートナーの有無、③過去性交頻度（1年に数回以下：1、2～3ヶ月に1回くらい：2、1ヶ月に1回くらい：3、2～3週間に1回くらい：4、1週間に1回くらい：5、2～3日に1回くらい：6、ほとんど毎日：7）、④最近の性交頻度（全くない：1、1年に数回以下：2、2～3ヶ月に1回くらい：3、1ヶ月に1回くらい：4、2～3週間に1回くらい：5、1週間に1回くらい：6、2～3日に1回くらい：7、ほとんど毎日：8）。

パーソナリティの査定：Temperament and Character Inventory (TCI) を用いた。日本語版 TCI は原著者の許可を得て、木島ら（木島, 1996）が作成し、その信頼性・妥当性については Kijima (Kijima, 2000) および Tomita ら (Tomita, 2000) の報告がある。今回の調査では Kitamura ら (Kitamura, 1999) の調査結果をもとに、TCI 日本語版の中から下位尺度得点と相関係数の高い新奇性追求 (NS) 3 項目、損害回避 (HA) 3 項目、報酬依存 (RD) 3 項目、固執 (P) 2 項目、自己志向 (SD) 3 項目、協調 (C) 3 項目、自己超越性 (ST) 3 項目による短縮版を用いた。各項目はオリジナルでは2件法であったが、内的整合性を高めるため4件法に変更した (Kijima, 2000)。

被養育体験の査定：Parental Bonding Instrument (PBI) を用いた。

【解析の手順】

本研究では、共分散構造分析作成のために、予備的共分散構造分析を行った。飲酒回数、喫煙本数、初交年齢の上位に嗜癖という潜在変数を設定し、TCI のそれぞれ下位尺度が嗜癖に影響するというモデルを検討した。これは十分な適合度を得た。また、PBI 下位尺度の上位に parental style という潜在変数を設定し、parental style が嗜癖に影響するというモデルを検討した。しかし、このモデルの適合度は不良であった。

そこで、PBI が TCI、殊に性格を規定するということを示唆した先行研究 (Kitamura, 2002; Kitamura & Kishida, 2005; 北村, 2005) を勘案すると

もに、気質が性格の基礎になっているという Cloninger らの理論を取り込み、**図 4** に示すモデルを作成した。ここでは、①気質が性格に影響する、②気質も性格も嗜癖に影響する、③ **parental style** が性格及び嗜癖に影響する、と仮定した。また、気質の四つの下位尺度相互に相関があることから、これらに共分散を設定した。

【倫理審査】

本研究計画は、国立精神・神経センター国府台地区倫理委員会で審査の上、承認された。

【解析】

本研究の解析には、SPSS for Windows、ANOS 7 を用いた。有意水準は 0.05 未満で評価した。

【結果】

以上の結果、**図 5** に示すように共分散構造モデルの適合度を確認した。この研究で用いたすべての変数の平均値、標準偏差、変数間の相関は **表 1** に示す通りである。このモデルの適合度は、GFI=0.961、AGFI=0.930、RMSEA=0.072 と十分なものであった。

(1) PBI の四つの下位尺度をカバーする **parental style** が潜在変数として成立した。**parental style** は、母親の高ケア得点、父親の高ケア得点と正の相関があり、母親の過干渉得点、父親の過干渉得点と負の相関があった。この結果からは、父母のケア得点が高く、父母の過干渉得点が高いほど **parental style** は高くなる（親の養育態度は好ましいものになる）と考えられる。

(2) 飲酒回数、喫煙本数、初交年齢という三つの変数をカバーする嗜癖という潜在変数が成立した。嗜癖は、飲酒回数、喫煙本数と正の相関があり、初交年齢と負の相関があった。この結果は、飲酒回数、喫煙本数が上がり、初交年齢が低いと嗜癖傾向が強まることを示している。

(3) TCI の各下位尺度が「嗜癖」変数を説明できた。

(4) **parental style** は、先行研究から予想したように性格カテゴリーの自己志向 (SD) と協調性 (C) を上昇させていた。High care-low overprotection という **parental style** が嗜癖を抑える影響力は有意ではあるが、弱いものであった。

2・7 高い新奇性追求と低い損害回避

分析の結果、気質の中では高い新奇性追求 (NS) と低い損害回避 (HA) が嗜

癖傾向を強めていた。高い新奇性追求と低い損害回避は、特に嗜癖において見られる特徴でもある。

アルコール症の発生頻度は男性が多いという疫学上の所見を、男性に多い反社会性パーソナリティ障害の存在から説明しようとした Cloninger, Christiansen, Reich, and Gettesman (1978) は、その後、中枢神経における情報伝達物質の関与の差からアルコール症を 1 型と 2 型に分けるようになった (Cloninger, 1987)。1 型は 25 歳以降の発症、喧嘩と逮捕歴が少なく、心理的依存が強く、罪責感が少なく、幼少期に飲酒環境が少ない。一方、2 型は 25 歳以前の発症、喧嘩と逮捕歴が多く、心理的依存は低い罪責感も低い。そして、さらに個人の気質のパターンがこの差を説明できると述べた (Cloninger, Sigvardsson, & Bohman, 1988)。

これは 624 名の 11 歳の一般人口中の子どもを 27 歳まで追跡した調査で、この研究で Cloninger は 1 型アルコール症は低い新奇性追求、高い損害回避、高い報酬依存で特徴付けられ、一方 2 型は高い新奇性追求、低い損害回避、低い報酬依存であるとした。なお、こうした研究から Cloninger, Przybeck, and Svrakic (1991) は TCI の前段階である Tridimensional Personality Questionnaire (TPQ) を作成した。なお TPQ は日本語訳 (竹内・吉野・大野・加藤・北村, 1992) とその妥当性検討 (Takeuchi, Yoshino, Kato, Ono, & Kitamura, 1993) が行われ、日本におけるアルコール症患者でも Cloninger らの示すパターンに近似するものが報告されている (Yoshino, Kato, Takeuchi, Ono, & Kitamura, 1994)。

今回の日本の大学生調査における結果は飲酒を含む嗜癖が、Cloninger のいうアルコール症の 2 型に近いことを示している。嗜癖者は人間関係の失敗をきっかけとした様々な不快感情から逃れようと、効力感、あるいは一種の「酔い」を伴う行動に没入していく³⁵。嗜癖の中心的特性の一つであるこの種の「酔い」は、新奇性追求とドーパミンとの関連を支持するものでもあろう。この「酔い」は、特にアルコールを代表とする物質関連依存において主観的、客観的、科学的に十分な理解がなされてきた。今回の調査では、明らかに「酔い」を伴う酒やタバコの物質関連依存と、当該行動の最中に客観的科学的な測定が困難である「危険な性行動」が一つの潜在変数 (嗜癖因子) によって説明できた。これは、「危険な性行動」という物質関連以外の耽溺行動が実は物質関連依存と共通の特性を包含していることを示しており、嗜癖概念そのものの成立を証明して

³⁵嗜癖はその形態によって、大きく物質嗜癖、プロセス嗜癖、関係嗜癖の三つに分けられる。このうち、人との関係に対する嗜癖である関係嗜癖は共依存ともいい、一次嗜癖と呼ばれている。これに対して物質嗜癖、プロセス嗜癖は、二次嗜癖と呼ばれる。アルコール、薬物などへの依存やギャンブル、セックス、買い物などへののめりこみは、コントロールしきれない相手を断念しようとして生じる怒りや寂しさの中から生まれてくる二次的なものである。この意味でも、あらゆる嗜癖の根底には人間関係に関わる問題が潜んでいると考えられる。

いるとも言える。

また、「損害回避」との負の相関は、嗜癖が行動制御の障害であることを端的に表すものである。嗜癖につながる行動は、きっかけはそのほとんどが行動の持つ魅力に誘われた興味本位によるものだろう。嗜癖につながる対象に出合う機会を得た場合、新規性追求が高く、恐れや心配性といった特性を持つ損害回避が低ければ、その対象に飛びつき、行為を頻繁に繰り返すことになる。あらゆる嗜癖につながる対象に遭遇する機会は誰にでもあるが、新奇性追求が低く、損害回避が高ければその対象に引かれる力も弱く、不安や用心深さから嗜癖的な行動に走り、自分に不利益をもたらすような行動を頻繁に繰り返すことはないだろう。

今回の調査分析で特記すべきことをいくつか述べなければならない。そもそも気質と嗜癖の関係を研究した **Cloninger** も、扱った現象はアルコール問題だけであった。今回の研究のように、喫煙や性行動については検討していない。一方、初交年齢の低さに加えて性交渉相手の多さを合わせて「危険な性行動」と定義した **Chen, Tanaka, Uji, et al. (2007)** は、同様に高い新奇性追求と低い損害回避であることを報告している。今回、飲酒、喫煙、若年の性交渉がひとつの潜在変数を構成し、加えて気質のパターンが先行研究のそれと同一方向を向いていることは、そもそも嗜癖という概念が実臨床でも有効なものであることを示すものと考えられる。

以上のことを考え合わせると、嗜癖行動の特性は、当人の気質を直接反映したものとも言える。しかし、生得的な気質だけで人間のパーソナリティ全体を説明できるわけではない。また、特定の気質が必ずしも同じ行動結果を生じさせるというわけでもない。

2・8 親の養育態度と自己志向

第 1 章でも触れたが、**Bowlby** は、乳児が生物学的機能を維持するために親との間に維持される結びつきを **attachment** と呼んだ (**Bowlby, 1973**)。 **Bowlby** によると、子どもには生まれつき社会的相互作用への要求が備わっており、その要求は特定の他者（多くの場合は母親）に向けて焦点化される。子どもには、特定の他者に接近を求め接触を維持しようとするための、「ぐずり」や「泣き」、「微笑み」などの行動傾向が備わっており、こうした行動に対し適切に反応してくれる対象に **attachment** を形成する。**attachment** は母親と乳幼児の相互作用によって促進され、母親と乳幼児との間の親密で温かい持続的な関係を基盤に、母と子が満足と喜びを見出しているときに形成される。

この **attachment** 理論で重要なのは、乳幼児期に形成された **attachment style** が後の人格形成にとって決定的な意味を持ち、思春期、成人期にまで持続

する (Bowlby, 1973, 1988) という点であろう。母親が子どもの不安や恐怖を和らげ、安心感を与える能力は **attachment** 形成にとって基本的なものである。子どもが不安や恐怖を抱えているときに母親が適切に対応し、子どもの不安や恐怖を取り除き、安心感を与えるという経験が繰り返されると、それらの経験を基に子どもの中にはポジティブな関係モデルが形成され、環境に対して安心感を持って能動的に探索することができ、他者との関係も積極的なものになる。逆に、子どもが不安や恐怖を抱いているときに、母親が適切な対応ができないという経験が重ねられると、子どもはネガティブな関係モデルを基に、他者との関係を避けるようになり、環境への働きかけも消極的なものとなる。乳幼児期の **attachment** 形成は、重要な他者との人間関係の基礎となるものである。

Bowlby の **attachment** 理論は、Ainsworth らの観察研究を経て、近年では成人期の **attachment** 研究につながり、多くの研究結果が報告されている (Collins, 1990; Hazan, 1987)。これらの研究を見ても、乳幼児期の母子関係あるいは養育体験がその後の人格形成、対象関係のあり方に重大な影響を与えることは否めない。解析結果では、PBI を用いた **parental style** の高得点と TCI における「自己志向」とが正の相関を示した。つまり、親の養育態度が良好であれば、気質面で嗜癖行動に陥りやすい傾向を持っていたとしても、「自己志向」が高まり、嗜癖行動に陥る危険性を軽減できるということである。

「自己志向」は、自尊心を含む概念であり、責任と自己の目標に基づいた行動をとることができるという特性を持つ。これは、自分自身に自信や価値を感じ、自律的で、自己の目標や価値に基づいた行動を取り、その行動の結果に対して自己責任をとることができるという性格特性である。解析では、「嗜癖」と「自己志向」とが負の相関を示した。これは、「嗜癖」と自尊心が強い関連性を持つことを示している。

解析結果にみられる嗜癖行動の特性は、気質をそのまま反映した行動であると捉えられる半面、新奇性追求が高く損害回避が低い気質特性を持った者全てが嗜癖行動に陥るとは限らない。つまり嗜癖行動に陥りやすい傾向を持つ人が、必ず嗜癖行動に陥るというわけではないのである。嗜癖行動に陥る原因、または嗜癖行動の発動要因は、当人の性格特性によるものが大きく関係しており、これは嗜癖行動と当人を取り巻く環境との緊密な関係性を示すものである。

また、「自己志向」の特性である自己の目標に従った行動や、その行動に対する責任は、どれも自尊心に裏打ちされた行動結果であり、自尊心は「自己志向」の中核をなすものである。今回の分析は、嗜癖の定義の中で提示した「嗜癖は、自尊心の低さを原因としている」ということを裏付ける結果にもなった。

第3章 欲望と行為の自己決定

3.1 欲望の2階層と「一般的・社会的価値」

第2章における統計的分析によって、嗜癖という概念の臨床上の成立をある程度実証することができた。同時に、嗜癖に対するパーソナリティの関与をも示すことになった。特に、生得的な気質において嗜癖的な傾向を見せた人であっても、内面的な成長に関わる環境因子の在り方が、嗜癖的行動を阻んでいた。この結果は、パーソナリティの成熟が人としての在り方を規定する重要な要素となりうるということを示している、ということもできるだろう。また、パーソナリティの成熟と併せて、「自尊心」というキーワードも重要性を持っていた。そこで第3章では、嗜癖者が内面に抱く心的構図や、行動の根底あるいは原動力をなす欲望の形成の仕方を深く掘り下げることで、嗜癖者が囚われている内的枠組みを明らかにし、その変化の可能性を探る。

嗜癖を含め人の自覚的な行動のほとんどは、「欲する」こと、つまり欲望 (desire) から出発する。パーソナリティの本質を人間の意志の構造に求めた Frankfurt は、人の欲望を第一階の欲求 (first order desire) と第二階の欲求 (second order desire) の二層に分けて説明している (Frankfurt, 1971)。first order desire とは、人間以外の動物も持つ欲求のことであり、例えば、水を飲もうとする、パンを食べようとする、ボールを蹴ろうとするなどの欲動を指し、現に生じてくる欲求がそのまま行動として実現される場合の欲求である。これに対して、second order desire は、ある事を欲したいと欲すること、と言い表すことができよう。つまり、first order desire の発現を受け、それを欲することが望ましいかどうか、あるいは欲するべきかそうでないかといった「評価」³⁶ がそこでなされることになる。

first order desire のみで行動する動物や幼児の場合、欲求の選択が問題になることはなく、行動は現に生じてくる欲求によって規定される。また、成人においても、例えば「目の前の酒を飲みたい」→「酒を飲む」というように、「酒を飲みたい」という欲求がそのまま「酒を飲む」という行動に移される場合は、first order desire が強く前面に出ているときである。この場合、「酒を飲みたい」という自己の欲求を対象化することはないので、飲むべきか止めるべきかなど、起きている欲求に対しての批判や評価がなされることはない。

Frankfurt は、second order desire が行動を規定する場合に、その欲求を「第二階の意志 (second order volition)」と呼び、この第二階の意志がパーソナリティを特徴づけるとした (Frankfurt, 1971)。また、second order desire は持つ

³⁶ しかし、ここでの「評価」は、「一般的・社会的価値」を前提とした評価にとどまるものであり得る。

が、second order volition を持たない行為者のことを wanton と呼び、second order volition を持つ行為者である person と区別した。wanton の本質的な特徴は、意志を持たないということである。つまり、second order desire をどれだけ多く持っていたとしても、最終的に second order volition に規定された行動でなければ、それは person ではなく wanton ということである。Frankfurt に従えば、意志にもとづいて行動するということが second order volition を持つということであり、person であるということだろう。

しかしながら、Frankfurt の理論は、欲求の連鎖という循環に陥る恐れをはらんでいる。意志に基づく行為を person としての合理的行為だとする考え方は、一見、理にかなっているように見える。しかし Frankfurt の説明だけでは、そこでの意志が実は欲求の単なるすり替え、つまり「意志」と名付けられた欲求であるという可能性も考えられ、後に触れることにもなる合理的自由を前提とした自発性や評価を欠き、高次の欲求や価値にはつながらないという意味でも、second order volition という考え方には疑問が残る。

意志が欲求の単なるすり替えである例として、ギャンブル嗜癖の人がギャンブルを止めることができても、酒量が増えたり釣りやゴルフが頻繁になったと仮定しよう。嗜癖の特性から言ってこの状況は十分に考えられるケースであり、臨床現場においても多くの報告がなされているところである³⁷。このギャンブルを止めたケースにおいても、結局のところ経済的問題や家族との関係はギャンブルをしていた頃と全く変わらない。これは一見、「ギャンブルを止める」という行動が強い意志に基づく合理的な結果のように見えるので、そこから判断すれば、「ギャンブルを止めた」という事実は、意志に規定された合理的な行為ということになる。しかしながら、現実として経済的な問題や家族との関わりは何ら変わっておらず、その意味では本人の在り方、あるいは問題の本質に変化がないのと同じことである。

また、関係嗜癖の一種である強迫的世話焼き、あるいは共依存に陥った妻のケースを考えると、これらの問題行動を抱える人は、ギャンブルや酒に溺れるパートナーの世話を好んで自発的に行っているわけではない。彼女たちを突き動かしているのは、目に見えない社会からの要請（「一般的・社会的価値」）である。「妻は夫を支えるものである」、「母親として子どものために我慢すべきだ」といった考え方や、過去の養育環境から学習した「自分の我を通してしまったら、（父や母などに）嫌われる」、「自分がいなければ家族（あるいは夫）は駄目

³⁷ 例えば Christo ら（2003）は、嗜癖傾向を査定するために開発した質問紙 Shorter PROMIS Questionnaire の信頼性妥当性を検証する中で、ある嗜癖行動を抑えることができて別々の嗜癖行動が現れたり、同時に複数の嗜癖行動が重なって現出することが少なくないことを確認した。

になる」といった自己犠牲的な価値基準ではないか。これらの価値基準は、社会的要求や過去の学習の繰り返しによって刷り込まれたものであるだけに、固着したものとなりやすい。献身的に「尽くす」彼女たちが、実はパートナーの問題飲酒やギャンブル行為を助長する共犯者である、ということに思い至ることはないだろうし、「尽くす」行為自体がパートナーの行為同様に問題行動なのであるという認識さえも抱くことは難しいであろう。

こうした問題行動に限らず、多くの人間の行動は社会や他者の目にさらされており、常に妥当性を要求され、それが個人の価値基準となっている。いわゆる「人の目」「世間の目」といった言葉は、個人を取り巻く状況を端的に言い表している。

以上の事例からも分かるように、自発性や評価の欠落は、表面的な行動には変化がみられても、本人の在り方そのものには、何の変化も起こさない。ここで言う「本人の在り方の変化」とは、他人から見てどうであるとか、以前の行動よりも好ましく感じられるといった「一般的・社会的価値」に規定されるものではない。もしそうであるならば、嗜癖対象のすり替えが行われるだけで、本質的には何も変わらないのと同じことになってしまう。自分自身を認識し、自己の目標に向かい、自らの力で己を変えていくというやり方でなければ、本当の意味での変化は見込めない。このような在り方は、合理的自由のもとに現れる自発性や評価に従うものである。

second order desire が行動を規定する際に用いるものは、その人が抱き育んできた、**Frankfurt** の言うところの「意志」発現の基盤となる「一般的・社会的価値」と大きく捉えるべきである。なぜならば、**second order desire** は、養育環境や社会規範などを含む環境からの学習を基にした性格特性から現れてくるものであり、個々の衝動的欲求 (**first order desire**) を対象化し、査定しているからである。この査定の基準となるものが、「一般的・社会的価値」であり、人間の行動のほとんどはこの段階の手続きを踏んだものであると言えよう。つまり、**Frankfurt** の「意志」は「一般的・社会的価値」を踏まえた上で適用されるのであり、その意味でも **Frankfurt** の「意志」に規定された行動は合理的なものになるとは限らないのである。

とはいえ、こうした「本人の在り方の変化」に対する考え方が、「一般的・社会的価値」、つまり周囲と共有する価値や基準を持つことを全面的に否定するものではない。自発性によって自己の目的に向かう際には、その目的の体系を支える一部として「一般的・社会的価値」が整合的に関わるということをここで付け加えておかなければならないだろう。

3.2 欲望の形成—他者のまなざし

社会参加し、共同体の一員として生きている個人は、様々な関係性を持った他者に囲まれている。個々人の背後には、世間という不特定多数の力が渦巻いている。この意味で私たちは、私自身として存在するというよりも、「世の中の人」の一人として、つまり「世人」という「平均性」の中で日常を生きている。人と人は、「世の中の人」というかたちで向き合い、おおむね世間体を気にしながら、その世間が何を好み、楽しみ、嫌悪するのかを常に察知しつつ、共同存在として平均的な日常を生きているのである³⁸。そして、他者とお互いに「まなざし」を向け合う中で欲望が増幅されることになるのだが、対峙する他者によって、欲望形成に向かう動機付けには違いが見られるようである。そこで、「他者」を関係性の違いによって以下の3種類に分類し、これらの他者を通して個人の内面に立ち現れる欲望の性質を整理してみる。

①私と関係性が深い他者：親や兄弟、親戚、友人・知人のように、私も相手もお互いによく知っていることを前提にコミュニケーションが行われるような関係にある他者。(親密的二人称型関係)

②私の近くに存在はするが、コミュニケーション経験のない他者：例えば、通勤電車でいつも同じ車両に乗り合わせたり、同じマンションや同じ地区に住んではいるが、コミュニケーションをとることのない人。お互い顔は見かけるが、話したことは一度もないというような人。(辺縁的三人称型関係)

③私の関係性の外にある遠い存在の他者：知名度の高い一群の人々。テレビ、雑誌などを通じ、私はよく知っているが、相手は私のことを知らないという関係。「私」にとっては、容易に現実を超えたあこがれの対象となり、自らの夢や願望を投影することができる関係でもある。(投影的三人称型関係)

他者の3区分中、①は「私」と「あなた」という親密な関係という意味において、二人称的であり、②③は三人称的である。もちろん、②の他者が①になることもあるし、場合によっては③が②①となることも決してないわけではない。また、①と②の間には、話をするなどのコミュニケーションはとるものの、親密性において差があるというように、多様な関係が存在する。「私」との関係が密接なほどに、他者は欲望の動機付けに大きな影響を与えることになるのだが、「私」から最も遠く、かつ一方向的な他者関係である③もまた、私たちに夢

³⁸ ハイデッガーは、不特定の世の中の「人」一般を「世人」と呼び、この「世人」のあり方に目を向け、私たちの共同存在を分析した。彼は、私たちが日常的に世の中の人になりきってしまい、自分固有の生き方を選ぶより大衆の中に紛れ込み、大勢に準じた生き方を選ぶという自己喪失的なあり方に陥りがちであると指摘し、こうした自己喪失的な「世人」のあり方を「頹落」と呼んだ。(ハイデッガー、渡邊二郎訳、1977)

や希望、あるいはお手本のような形で、欲望へのある種の動機付けを与え得るという意味において、けっして無視することはできない。

例えば、サッカーのワールドカップの試合を見て、「ロナウジーニョ選手のようなサッカー選手になりたい」と思った（欲望した）子どもたちは世界中に沢山いたはずだ。現にクラブチームに入り、その夢（欲望）の実現に向けてまい進している若者もいるだろう。逆に、こうした関係は反社会的行動の引き金となることもある。例えば、マスメディアを通じて凶悪な事件に接した者が、「私も同じように世間を騒がせたい」という思い（欲望）を抱いたり、実際に実行した（欲望を実現した）という事例は少なくない。サッカー少年にとってのロナウジーニョ選手にしても、犯罪欲求を持つ者にとっての実際の凶悪犯人にしても、あこがれの対象、はるかかなたにある目標、という形で「こうになりたい」「こんな風にやりたい」という欲望の動機付けとなるだろう。

それでは、①の親密的二人称型関係と③の投影的三人称型関係とでは、個人の欲望への動機付けという点でどう違ってくるのだろうか。また②辺縁的三人称型関係は、欲望形成にどのような影響を与えているのだろうか。この2点について、まず、他者の成功に伴って個人の中にわき起こる感情、中でも不快感に目を向けてみたい。

「ロナウジーニョ選手のようにになりたい」と思い、クラブチームに入って練習を続けている少年を例に考えたい。ロナウジーニョ選手（③の他者）が公式戦で勝利につながるゴールを決めたら、少年はますますロナウジーニョ選手に憧れや尊敬を抱き、目標とすることだろう。しかし、クラブで共に練習し、技量的にも同程度だと思っていたチームメート（①の他者）が、一緒に出場した練習試合でゴールを決め、それをきっかけに次の大会のメンバーに大抜擢されたとしたらどうだろうか。少年の心はけっして穏やかではないはずだ。悔しさだけでなく、もしかしたら大きな挫折を感じるだろう。そのチームメートに対する嫉妬心さえ抱くかもしれない。いずれにしても、少年の心の中には、ロナウジーニョ選手を相手にする時とは比べものにならないくらいに、さまざまな不快感情が入り込み、大きな葛藤をもたらす。

大人の世界でも似たようなことはよく経験される。大富豪のビル・ゲイツ氏が豪華客船で優雅にバカンスを楽しんでいようと、豪邸を建てようとも、彼が③の他者である限り、「私」が挫折感や嫉妬心を抱くことはないだろう。しかし、高校、大学と同じ道を進んできた友人（①の他者）がある日突然マイクロソフト社にスカウトされ、それから3年後には大きな家を建てたとしたらどうであろうか。ゲイツ氏の豪邸の話題に対しては、はなから手の届かない夢として心穏やかに接することができる。しかし、身近な友人の「分不相応」に映る「成功」に対しては、祝福の気持ちがある一方で、「もしかしたら自分がその地

位を得ることができたかもしれないのに」と、心穏やかではないかもしれない。

ところが、心に渦巻く挫折感や友人に対する嫉妬心や羨望は、周囲にはもちろん、自分自身も認めたくない感情である。したがって、そのほとんどは自己の内部に抑圧されることになる。この、緊密な関係にある人の成功を前にして抱く挫折感や嫉妬心、羨望の感情の抑圧は、私たち人間の欲望形成に大きく関与していると考えられる。

同じ「羨ましい」という言葉を発するにしても、ゲイツ氏の豪邸の話聞いた時と、友人の新築に対しての発言とでは、その時に抱く気持ちには、明らかに大きな違いがある。友人の成功に接し、「私も明日から仕事をもっと頑張ろう、そしてもっと稼ぐぞ」とか「彼を追い越してやるぞ」といったポジティブな感情が沸き起こる半面、思いつく限りの瑕疵を探し出し、友人の成功を卑小なものにしようとする心の動きも否定できないだろう。もっとも、こうした相反する心の動揺は、誰に聞かせることもなく、自分自身にさえも聞こえていないものとして無視されてしまうかもしれない。だが、自己の内部に抑圧された動揺は、あからさまにできない分だけ「負けたくない、惨めになりたくない。だから社会が認めるような、友人が羨ましがするようなものを手に入れたい」という欲望への強い動機づけとなるはずである。

こうした角度から欲望形成の順路を辿ると、私たちの欲望、そしてその欲望に向けられた行動の選択は、常に社会や他者を意識したものであるとすることができよう。もっと具体的に言うならば、共同体の中で自らが規定する「横並び」状態から「一歩抜け出したい」、あるいは「出し抜きたい」という秘められた感情の発露であるということもできよう。チームメートの大抜擢や友人の成功に対して、「私」が心穏やかでいられないのも、彼らに「出し抜かれた」からである。このため、「私」の欲望は良くも悪くもかきたてられることになる。

こうした、欲望の積み上げは、集団の中で「平均以下」でいることへの不安にもつながっている。このため、②の「個人の近くに存在はするが、コミュニケーション経験のない他者」は「世間」として常に気になる存在である。「人並み」でいることの安心感は、裏を返せば②の他者の視線を感じながら、自らも視線を送り返しているという状態である。こうすることで、自分が平均的かあるいはそれ以上であるということを、主観的に感じることで安心を得ているともいえよう。こうした「相克の関係」が繰り広げられる中で、私たちは不安を打ち消そうと、社会や他人や友人が注目するもの、羨むものを欲望するのである。

3-3 欲望の連鎖

世間との「相克の関係」の中で形成される欲望は、時として秘められた感情

の発露でもありうるという前節の議論を踏まえ、再び Frankfurt が提示した 2 階層の desire に目を向けると、first order desire は「情動」、second order desire は「知性」によるものと言うこともできるだろう。もちろん、first order desire と second order desire は、それぞれに独立した欲望ではなく、相互に関連し合うものである。

情動をもとにした欲望は、欲望そのものが目的の対象になるが、知性が生み出す欲望は、多くの場合生み出された欲望そのものが最終的な目標とはならない。second order desire は、自己の欲求に対して評価的に関わる能力を含むものであり、このとき評価される欲望は、例えば「酒を飲みたい」というような情動を基盤にした欲望である。「酒を飲みたい」→「昨日も飲んだし、今日はやめておこう。『いや』、明日も休みだ、やはり飲もう」→「和食の店で飲みたい。『うん』、たまには外で飲むのもいいだろう」→「タクシーで行きたい。『いや』、料金が高い、バスにしよう」というように、欲望は連鎖しており、その鎖をさかのぼれば、「酒を飲みたい」という情動を基盤にした欲望に行きつく。

それぞれの欲求の箇所にある『いや』や『うん』の部分が、知性から生じた欲望の特性であり、「一般的・社会的価値」の関わる場所である。知性から生じる欲望は、情動的欲求に対して『いや』、『うん』と評価的に関わり、その他の知性からの欲望と連携しながら、情動的欲求を満足させる（あるいは断念、抑制させる）ために機能するのである。また、情動からの欲望も、「酒を飲みたい」から「酒を飲む」というように、「酒を飲みたい」がそのまま直接の目的ではあるが、目の前に酒がなければ、「酒を探す」、「酒を買いに行く」と、知性の力を借りてその欲望を満足させることに向かうことになる。

従って、知性による欲望はその性質上、情動による欲望を満足させるために機能しており、情動による欲望よりも脆弱なものにならざるをえない。嗜癖における、「その行為の結果が自己に不利益をもたらすと知っているにもかかわらず、行為衝動を制御できない」という行為制御の問題も、知性の脆弱性に起因していると言えよう。

一般的に広く受け入れられている信念においては、行動の選択の際には「感情的になるな」と注意されたり、したりするものである。しかし、神経科医である ダマシオ は、感情の衰退が、私たちが一般的に言う感情的になった場合と同様に、不合理な行動の主因になっていると説く³⁹。ダマシオは、「感情」がゆがんだ推論を生み出し、不合理な行動へと導く事実を否定するわけではないが、「理性」と「感情」の関係は、「推論」と「意思決定」のプロセスを規定するものであるとし、「感情」は節度をもって体験されるべきであると警告する。これらのことは、ただ単に知性と感情のバランスの問題にはとどまらない。知

³⁹ ダマシオ, 田中三彦訳, 2000, 108-142

性や感情をバランスよく調整する能力、つまり合理性の能力への要求があるのである。

3・4 複雑性外傷後ストレス障害

ところで、第1章、第2章を通じ、嗜癖者の認知の歪みのベースになるものとして、人生早期の養育体験の関与について述べた。養育環境を通じたパーソナリティの成熟は、ダマシオが取り上げた知性と感情のバランスにも関わると思われる。そこで、今一度、養育環境の問題にたち帰る。

劣悪な養育環境の好例として、1.5 においては虐待について紙幅を割いたが、このような人生早期の対象関係構築の失敗がトラウマとなれば、パーソナリティの各因子に悪影響を与えることになる。ここで言う「トラウマ」とは、主に長期反復性の心的外傷を指す。

一般的に「トラウマ」として知られているのは、外傷後ストレス障害 (Post-traumatic stress disorder: PTSD) で、天変地異や大事故など個人の対処能力を圧倒的に超え、無力感に陥るような出来事に遭うことによって受けた心の傷のことを言う。しかしながら、ここで言う長期反復性のトラウマとは、ハーマンが提唱した「複雑性外傷後ストレス障害 (complex post-traumatic stress disorder: C-PTSD)」という概念である。これは、長期の対人関係において発生するストレス因子が関連して起きる外傷後ストレス障害のことである (ハーマン, 中井久夫訳, 1999)。DSM-IV-TR に、「複雑性外傷後ストレス障害」という正式診断名は存在しないが、PTSD の中の一病態が該当すると考えられる⁴⁰。C-PTSD に該当すると思われる症状としては、感情調整の障害、自己破壊的および衝動的行動、解離、身体愁訴、無力感、恥、絶望または希望のなさ、永久に傷を受けたという感じ、これまで持ち続けていた信念の喪失、敵意、社会的ひきこもり、常に脅迫され続けているという感じ、他者との関係障害、パーソナリティの変化などがある。これらの症状は、対人関係のストレス因子 (例: 小児期の性的または身体的虐待、家庭内の虐待) との関連で見られることが多い。

資料1 は DSM-IV-TR による PTSD の診断基準、**資料2** はハーマンが掲げた C-PTSD 診断のための「七つの柱」である。両基準を比較すると、C-PTSD には PTSD には見られない特性があることに気がつく。例えば、対人関係や感情制御の困難性といった問題は C-PTSD において特徴的に見られる。この対人関係の困難性や感情抑制の問題は、嗜癖に共通する基底要因でもある。

C-PTSD が長期的なストレスの影響によって引き起こされる障害であるということを思うと、この障害が強制収容所のように自由を剥奪され、長期間ある組織の支配下で生存していかなければならない状況の下で現れるものであるこ

⁴⁰ DSM-IV-TR, 448

とが理解できるだろう。言い換えるならば、PTSD がある日突然、誰の身にも降りかかる可能性がある災厄であるのに対し、C-PTSD は長期にわたる心理的な抑圧という条件の下で経験される外傷後ストレス障害である。

自己の存在場所を選択する自由が奪われているという状況の想定は、戦時下の強制収容所や監禁といった特殊ケースに求める必要はない。子どもにとっての家庭や親子関係は、まさに「選択の自由がない」最たるケースである。親（保護者）の庇護なしに生きていくことのできない子どもたちにとって、家庭が彼らを一人の人間として尊重し、そこに保護者との共感と信頼が存在する場であるならば、一番の安全基地となる。しかし、彼らが脅しや恐怖、不安にさらされ続けるならば、家庭は、強制収容所と何ら変わるところのない監禁の場であり、そこから逃げるできない子どもたちは長期にわたるストレスに曝され続けることになる。

C-PTSD の原因となる長期の反復性ストレスを伴う監禁の場は、心理的な閉鎖空間でもある。例えば、子どもにとって家庭環境（親子関係）が望ましいものでない場合、家庭は心理的な壁に囲われた監禁の場であると言えよう。親子という二者関係において、力の弱い側（子ども）にとっては、逃げることを不可能にする壁が立ちはだかっている閉鎖空間という意味である。この壁は、物理的に認識されるどのような壁よりも圧倒的に強固なものであると感じられ、逃れることを防ぐだけでなく、外部からの刺激も遮断する働きを持つようになる。ある子どもにとって、家庭環境が望ましいものであるか、そうでないかということについては、多くの場合、第三者の監視の目は届きにくい。それだけに、心理的閉鎖空間を伴った家庭環境があったとしても、外目には好ましく映ることが少なくない。むしろ、心理的閉鎖空間は第三者の死角を狙って形成されると言ってもいいだろう。

3-5 権力者と服従者の関係

この見えない壁を形成する第1の要因は「権力者と服従者」の二者関係、第2の要因は対外的に行われる「芝居の脚本構築」とも言うべき行動、第3の要因はエスカレーションと自己欺瞞の成立である。

まず、「権力者と服従者」との二者関係についてであるが、通常、健全な二者関係は「権力者－服従者」といった拘束的關係ではなく、自由で平等な関係を形成する。二者関係のありかたについては、文化人類学の立場から、ターナーが「コムニタス」という極めて示唆に富んだ説を開陳している⁴¹。ターナーによ

⁴¹ ターナーは、アフリカのンデング族の調査を通して、彼らの諸儀礼における境界的な段階に示される人間関係の特徴に注目した。ターナーの儀礼過程についての考え方は、儀礼過程の分析の父といわれるジェネップ、A.W.の通過儀礼の三段階区分を踏まえている。ジェ

れば、コムニタスの本質は「具体的、歴史的、個性的な諸個人の間の関係」であり、ここでの個人は、「役割や身分に分節化されることなく、マルチン・ブーバーの“我と汝”というしかたで相互に対面している」⁴²。つまり、コムニタスとは、身分序列、地位、財産、男女の性別や階級組織の次元などを一切捨象した、構造ないし社会構造の次元を超えたところにおける自由で平等な実存的人間同士の関係である。ターナーは、コムニタスと構造との関係という視点から社会様式のあり様を以下のように述べている。

「人間の社会はすべて、陰に陽に、二つの対照的な社会の様式に関係している。そのひとつは、すでにみたように、法的・政治的・経済的地位、役職、身分、役割などから成る構造としての社会様式で、そこでは、個人は社会的人格の陰にかくれてしまい、ただ、あいまいにしか把握されない。もうひとつは、具体的で個性をもつ個人からなるコムニタスとしての社会様式で、各個人は、肉体的・精神的な才能においては異なるが、それにもかかわらず人間性をわかし合っているという点で平等なものとみなされる。第一の様式は、分化され、文化的に構造化され分節化された体系、それは、しばしば、制度化された地位から成る階級組織の体系であるが、その体系の様式である。第二の様式は、社会を未分化で同質的なひとつの全体として示すものである。そこでは、個人は相互に全人格的に関わり合いをもつのであり、身分や役割に“仕切られた”存在としてではない。」⁴³

社会の「第二の様式」は、その反構造的なあり方によってコムニタスを実現する。コムニタスは、既成の社会における共同体（コミュニティ）が陥りがちな構造の硬直化に揺さぶりをかけるように働く。しかし、それは一時的なもの（リミナルなもの）であり、長期にわたって維持されることは不可能である。コムニタスは、次第に第一の社会様式に特徴的な階級組織からなる社会構造に発展するのである⁴⁴。この流れをターナーは次のように述べている。

ネップは儀礼過程を、分離 separation・周辺 margin（あるいは limen、ラテン語で“敷居”を意味する）・再統合 aggregation、あるいは境界以前・境界状況・境界以後の三つの段階に区分している。ターナーはこの三段階の第二段階である周辺もしくは境界状況に示される人間の相互関係様式に着目し、それをコムニタス（ラテン語 *communitas*）と称している。ターナーは、境界的な時期に認識される社会関係の様式を“共通の生活の場”と区別するために、“共同体（コミュニティ）”という語ではなくラテン語のコムニタス *communitas* を使っている。（ターナー、富倉光雄訳、1996, 128）

⁴² ターナー、1996, 182

⁴³ ターナー、1996, 252

⁴⁴ ターナー、1996, 182

「個人や集団にとって、社会生活は、高い地位と低い地位、コムニタスと構造、同質性と区別、平等と不平等を連続的に経験することを含むひとつの弁証法的過程であると、私は考える。低い地位から高い地位へは地位のない過渡期を経て移行する。このような過程では、対立するものは、いわば、相互に構成し合い、相互に必要不可欠のものである。さらに、いかなる部族社会も具体的には、多くの人間や集団や諸部門から成り立つものであり、そのおのおのはそれ独自の発展的サイクルをもつものであるから、ある時点では、多くの人が定まった地位に就いていることと、多くの人が地位のあいだを通過することとがともに存している。換言すれば、各個人の生活は構造とコムニタス、また、状態と移行を交互に経験することである。」⁴⁵

ターナーは、このようなコムニタスと構造との関係を踏まえて、「社会(societas)とはひとつの事物というよりもひとつの過程—構造とコムニタスという継起する段階をともなう弁証法的過程—」と定義し、そこには、この二つの様式の双方に関与したいという人間の「欲求」が働いているとする⁴⁶。しかし、「コムニタスの極大化は構造の極大化を惹起せしめ、構造の極大化は、こんどは、新たなコムニタスを求める革命的な努力をつくり出す」⁴⁷ことになる。したがって、極端に誇張された病的なコムニタスにおいて生起する関係は、「生身の関係」、「構造を欠く」などの性質から、対象をコントロールしやすい状況をつくりだす。「権力者—服従者」関係の成立である。

ここでの権力者は、物理的な力、経済力、社会支持力などにおいて対象（服従者）に対して大きく上回っている。中でも社会支持力は、拘束性を強くするのに最も貢献する。ある事柄が社会から支持されているという程度のことを、ここでは「社会支持力」と言うことにする。例えば親の立場であれば、「親は子どもを愛し育てるものである」という考えは、社会から圧倒的支持を得ている親の態度であり、「親がわが子を虐待する」という事がらに対する支持力はゼロに近いだろう。このため、見たところ正常（一般的）な親子関係の中に、「権力者—服従者」関係によって作られた厚い壁や、ストレスフルな状況があったとしても、周囲は気づきにくくなる。また、物理的な壁に覆われていれば、中で何が起きているのか気になったりもするが、表面的にはオープンな空間の死角で形成される関係であるだけに、他者に対して寸毫の疑問を抱く余地すら与えないのである。

⁴⁵ ターナー, 1996, 129-130

⁴⁶ ターナー, 1996, 294

⁴⁷ ターナー, 1996, 177

3・6 芝居の脚本構築と自己欺瞞の成立

「見えない壁」を形成する第2の要因である、対外的に行われる「芝居」の脚本構築であるが、これは、「権力者—服従者」関係において使用される独特のリアルパーツのアレンジ、つまり、現実の出来事をいくつかのパーツに分け、他の現実の出来事につないだり、あるパーツ部分だけを強調したり、省略したりすることで、第三者の視線に耐えうるように出来事を再構築することである。心理的閉鎖空間が第三者の死角に形成されるのも、「権力者」「服従者」両方が巧妙に書き上げた脚本が原因となっているのである。

このような出来事の再構築を可能にするのは、権力者の願望と、その願望に応えようとする服従者の思い込みである。この権力者の願望と服従者の思い込みは、嗜癖者における分裂や投影同一視といった防衛機制を中心とした種々の症状と類似性が見られる。

第3の要因に挙げた「エスカレーションと自己欺瞞の成立」とは、芝居の頻度と脚本内容の複雑さが徐々に拡大し、日常の全てが厚い障壁で覆われることを意味している。また、芝居によりリアリティを持たせるために、服従者はアドリブを用いるようになる。服従者は役に成り切り、台本にない台詞までしゃべりだすのである。『人間失格』にある主人公・葉蔵の小学校でのあるエピソードはその好例と言えるだろう。葉蔵は、知っていることも知らないふりをし、大人の期待する子どもらしさを強調する。演出を凝らし、徹底的に道化となって大人（ここでは学校の先生）を喜ばせるという過剰なサービスを行い、一時的な満足を得る。

「綴り方には、滑稽噺ばかり書き、先生から注意されても、しかし、自分は、やめませんでした。先生は、実はこっそり自分のその滑稽噺を楽しみにしている事を自分は、知っていたからでした。ある日、自分は、れいによって、自分が母に連れられて上京の途中の汽車で、おしっこを客車の通路にある痰壺にしまった失敗談（しかし、その上京の時に、自分は痰壺と知らずにしたのではありませんでした。子供の無邪気をてらって、わざと、そうしたのでした）を、ことさらに悲しそうな筆致で書いて提出し、先生は、きっと笑うという自信がありましたので、職員室に引き揚げてゆく先生のあとを、そっとつけてゆきましたら、先生は、教室を出るとすぐ、自分のその綴り方を、ほかのクラスの者たちの綴り方の中から選び出し、廊下を歩きながら読みはじめて、クスクス笑い、やがて職員室にはいって読み終えたのか、顔を真っ赤にして大声を挙げて笑い、他の先生に、さっそくそれを読ませているのを見とどけ、自分は、たいへん満足でした。」（太宰，1990，23-24）

そして芝居は現実であるかのように感じられてくる。芝居というもう一つの現実の併存は、自己欺瞞を示すものでもある。さらにこの障壁は、権力者から離れた後も服従者に付き纏い、この壁の不幸な意味に気がつかない限り対象が変わってもその関係は「権力者—服従者」という形をとり続ける。

さらに厄介なのは、芝居の中で生き、現実を否認する行動をとり続けていると、自我の分裂が生じるということである。本来の自己を置き去りにして意識面だけが過剰になってしまうというわけである。ここで言う「自我の分裂」は、嗜癖者における分裂と同等のものである。行為主体の精神が身体から遊離し、自己を眺める傍観者化していく様子を以下に概観する。

3・7 精神の遊離と傍観者化

存在論的に不安定な人間が自分の内部で行う基礎的な組織化について、レイン（阪本健二・志貴春彦・笠原嘉訳，1971）は、「身体化された自己（embodied self）」⁴⁸と「身体化されない自己（unembodied self）」⁴⁹を対比することで説明を試みた。存在論的に不安定な人間は「自己を一次的に精神と身体とに分裂した存在として体験するまでにいたっているように見える。一般的に言えば、彼らは自分を＜精神＞の方ときわめて密接に同一化している」⁵⁰。また、精神と身体とに自分自身を分裂させることは「人間の根底に横たわる不安を処理する一つの試み」であり、不安を「超克する試み」にさえなる。しかし、不安からの防衛として現れた精神と身体の分裂は「もとの不安をかえって永続させる」場

⁴⁸ 自己を身体化されたものとして体験している人間は、「自分が生物学的に生きかつ実在しているということ、自分が肉や血や骨であるということを知っている。そして彼は、自分の身体＜の中に＞自分が存在しうる度合いに応じて、自分が時間の中での持続的存在であることを知るようである。彼は自分の身体をおびやかす危険をこうむる主体として自分を体験する。攻撃・切断・疾患・衰弱・死の危険をこうむる主体として自己を体験する。彼は、身体的欲望ならびに身体の満足や身体の欲求不満のなかにまきこまれる。かくて、人は、自分が他の人間存在とともに在る人間であるための基盤として、自分の身体についての体験を出発点としてもつのである」（レイン，1971,85）

⁴⁹ 「身体化されない自己」においては、「多少とも自分を身体から分離ないしは遊離した存在として体験する。身体は自己存在の核心としてよりは、世界内の他の事物のあいだの一つの事物と感じられる。真の自己の核心となるかわりに、身体はにせ自己の核心とみなされる。遊離した非身体的なく内的な＜真の＞自己はこのにせ自己を、気づかったり、おもしろがったり、ときには憎んだりしながら眺めている。身体から自己がこのように分離してしまうと、身体化されない自己は、世界の生のいかなる局面にも、直接の参与をはばまれる。そして世界はもっぱら身体の知覚や身体感情や運動（表情・しぐさ・談話・行動等）によってのみ媒介される。身体化されない自己は、身体が行うすべてのことに対する傍観者として、直接的には何も関係しない。その機能は、結局、身体が体験し行うところへの観察と統御と批判ということになるが、これはふつう純粹に＜精神的＞と呼ばれている作用に外ならない。したがって身体化されない自己は意識過剰である」（レイン，1971, 88）

⁵⁰ レイン，1971, 82-83

合もあり、「最後には精神病へといたる発展過程の出発点」ともなるのである⁵¹。

「身体化されない自己」（精神）と「身体化された自己」（身体）との分裂は、自己が「身体化された自己」として出発している場合は、ストレスによる一時的な分離であり、危機が去ればもとの身体化された状態に戻るのである⁵²。逆に言うなら、「身体化されない自己」（精神）と「身体化された自己」（身体）とのバランスや距離が崩れ、「身体化されない自己」（精神）への傾斜の程度が大きくなるほど、本来の自己を置き去りにして意識面だけが過剰になってしまうというわけである。この「身体化されない自己」（精神）への過度の傾斜は、もともと不安への防衛形態なのであるが、「身体化された自己」のごとく置かれている「偽自己」の存続を助長する結果となってしまう。「身体化されない自己」（精神）への傾斜がこうじてくると、遊離した精神（「身体化されない自己」）は「観察と統御と批判」のまなざしをもって、「身体が行うすべてのことに対する傍観者」として現れてくる⁵³。

傍観者となった彼は、尊大さを基盤にした誇大な自己像から、低い自尊心による弱くみじめな自己像との間を揺れ動く自身の姿を、あるいは演技する自分を、まるで他人ごとのようにシニカルな態度で眺めるようになる。このときの彼は、ある種の批判的な態度で評価的に自分の行動をモニタリングしているのではあるが、その批判や評価は、今後の行動に反映されることはない。つまり彼は、モニタリングされている自分の行動を反省的に見つめることで、その行動を変化、修正しようとはしないのであり、自分の将来をよりよく変化させていく力を失っているのである。このことは、嗜癖者が悪い結果になると分かっているにもかかわらず、問題行動をやめることができないという「行為選択」「行為決定」に伴う重要な問題ともかかわりを持っているのである。

3.8 自己欺瞞

ところで、嗜癖者における「行為衝動の制御不能」に関しては、自己欺瞞という大きな問題が横たわる⁵⁴。自己欺瞞は、「一般的・社会的価値」が引き起こす欲求と信念によって形成される。Davidson (2004) によると、自己欺瞞に陥る条件とは、ある時点で真実を知っているということ、あるいは、さらに正確

⁵¹ レイン, 1971, 83

⁵² レイン, 1971, 89

⁵³ レイン, 1971, 88

⁵⁴ 嗜癖者は、当該行動によって引き起こされたり悪化する社会的、経済的、心理的、肉体的問題が固定化したり、周期的に起きると分かっているながら、その行動を継続するという特徴を持つ (Goodman, 1990)。このことは、精神分析的に説明すれば、無意識から説明する「分裂機制」ということになるだろう。しかし、「分かっているながら止められない」という嗜癖の特性は、相反する意識された二つの信念の共存、あるいは欲求と信念の不整合といった「自己欺瞞」によって説明する方がよりの確であるだろう。

に言う、欺瞞によって生じる信念とは逆の何かを信じることである。つまり自己欺瞞とは、両立しない信念を同時に抱くという矛盾した状態である。このことは、Davidson の言う「自己欺瞞の生成プロセス」を見ても明らかである。生成プロセスの第一は抑制のない憧れである。他人の境遇や体験に対しての想像をめぐらし、それが自分にも与えられてしかるべきだと信じるようになる。第二はその憧れによる願望が生々しい想像となって現れてくる。第三は自分が欲するものが現実であるかのように行為するようになる。そして最後に、夢の世界に合わせるように振る舞うことによって、それが現実なのだと信じるに至る。

嗜癖の最も不合理な点は、コントロールを失し、自己の不利益になると分かっているながらその行動を続けてしまうということである。この不合理性こそ、相反する二つの信念、あるいは信念と欲求の不整合によるものであり、嗜癖の自己欺瞞性が最もわかりやすい形で現れるところである。

自己欺瞞とはまた、自分を騙すこと、あるいは自分に嘘をつくことである。嘘をついたり騙したりするためには対象を必要とするが、自己欺瞞の場合、嘘をつくのもつかれるのも自分自身であるという不可解な状況をつくりだす。これはどういうことかと言うと、自分が自分に、何を信じているのかということのを偽って見せかけるという意図を見抜かれなければならないのである。そこで、自分自身を欺くことを成功させるためには、矛盾する二つの信念を受け入れ、それを別々に分離させておく必要がでてくる。なぜならば、二つの信念の矛盾は、直接突き合わせない限り矛盾だとは分からないからである。

こうした欺瞞にさらされ続けていると、その真実の不足の程度に応じて、現実の世界から遮断され、他者から遠く離れた「架空の王国」の中で孤立していくことになる⁵⁵。一方では自分の考えを隠し、また一方では信じていないものを信じているふりをして、そのために他の人が彼を十分に理解することを不可能にする。さらにもっと不幸なことは、自分自身でさえ存在することのできない世界に住むことを強いられるようになるのである。私たちが現実として主観的に受け入れているものは、厳密に言えば直接的に他人が見たり触れたり体験できない世界である。だから嘘を信じる人は、それによって“彼自身の世界の中”－他人は入ることができないし、その中に嘘をついた人自身さえ実は存在しない世界－に住むことを強いられる。そして次第に自分自身であることから遠ざかり、自己の行為をもまるで他人ごとのようにモニタリングするだけの嗜癖者

⁵⁵ Frankfurt は、詩人の Adrienne Rich による、嘘をつくことが必然的に持っている－嘘をつかれた人への有害な結果とは別に－嘘をついた当人への有害な結果に触れ、「嘘つきは、言葉で言い表せない孤独の存在を導く」という、嘘をつくことで、孤立していく様子を詳細に述べている。(Frankfurt, 2006, 78-80)

のように、自己を動かす力に対して無力な傍観者になる(Frankfurt, 1971, 15-17)。⁵⁶

以上のように嗜癖の大きな特性としての自己欺瞞は、他人の境遇や体験に対しての想像など抑制のない憧れといった一般的・社会的価値をもとに芽生え、自己認識が為されないままに、閉鎖状態の中で無自覚に自己再帰的(傍観者的)に信念へと凝り固まったものと言えるだろう。そこで、私たちが **person** としてあるためには、自己の欲求を「評価する」という **evaluate** の能力と、合理的自由を前提とした自発性の能力が重要になる。

3・9 個人のルール

人間の行動は、多かれ少なかれ、欲望によって突き動かされたものではあるが、いかなる状態であっても、それは選択・自己決定されたものである。その事実、たとえ制御不能状態である嗜癖行動といえども逃れられるものではない。このことが、嗜癖者に対する「だらしない」「意志が弱い」といった、表層的な見解を固定化する一因になっていると考えられる。

欲望を含め内在化された要素を行動へと結び付け、その行動特性を規定する力を、ここでは仮に「個人のルール」と呼ぼう。というのも、「個人のルール」は社会的制約あるいは社会的強化、親や学校による教育、経験・学習などによって形成されるその人なりの規範であり、結果の良し悪しにかかわらず行動の基準となるべきものであるからである。その形成にあたってはパーソナリティなどからうける影響も大きい、それはむしろ内在化された要素を行動に変化させる触媒のようなものと考えべきである。

「個人のルール」が、当人にとってより善きもの(ライフ・タスク)となるためには、行為選択にかかわる自発性、合理性の能力とでも呼ぶべき能力の存在が必要となってくる。行為選択あるいは自己決定は、個人のルールにのっとって内在化された要素を行動化する段階で関わりを持ってくるものである。このときに求められる自発性、合理性の能力は、決して霊的な不思議な力というものではなく、恐らくは私たちが「自分次第なのだ」と思うときに自ら(「いまここに実体として存在する行為者の全体像」)が表す能力であろう。そして私たちは、その能力の可能態として存在すると考えるべきである。「個人のルール」がライフ・タスクとして機能するようになると、自己の内に望ましい、自らを誇れる属性を見出すことができるようになり、そこから生まれ出でる行為は「徳

⁵⁶ 実際は自分の行為でありながら、それを他人ごとのようにモニタリングするというのは、社会学の立場からギデنزが提示した「再帰性」の概念と同じ意味であろう。「再帰性」とは、反省に見られるような、より良い結果を求めて行動を評価し、そのことを次の行動に生かすというようなことではなく、自己の行動は意識されていても、自発的評価が加えられない状態のことをいう。再帰性と反省については、畑本(2008, 80-85)を参照。

に基づく魂の活動」(アリストテレス)となる⁵⁷。

嗜癖を含め、人間のあらゆる行動には、内在化された要素とそれを表面化(行動化)する触媒としての「個人のルール」という包括的な行動形成プロセスがあるにもかかわらず、これまでの精神分析学や心理学、精神医学からのアプローチは個々の因子に目を奪われ過ぎてきたように見える。嗜癖的な問題行動へのアプローチでも、決定的に抜け落ちているのは、いまここに実体として存在する行為者の全体像である。換言すれば、「いまここに実体として存在する行為者の全体像」の欠落とは、その本人の一部分である(とはいえ、それは決定的に本人を苦しめているものではあるが)問題行動を査定するにあたって、個別の因子に目を奪われるあまり、行為者をある一定の枠組みに押し込めてとらえているということを意味する。

例えば、「支配者—服従者」関係の中で長期間に渡りストレスが加えられると、絶対的に弱い立場にある服従者は、人が「個人のルール」を形成する際に必要不可欠である「自発性」や「合理性」を発揮できない状況に陥りがちである。しかもこの状況は、他者に気づかれにくい死角で起きるという性質上、問題行動と向き合うにあたって、その根本原因に目が向けられることは稀である⁵⁸。むしろ、表面化したストレス反応のみが注視され、それが個人の人格全体を示す特性であるかのように捉えられる。従って結果的には、発達障害や人格障害といった個別的な因子に目が向きやすくなるという構図を作り出し、個人はその枠組みのみで判断されるようになる。この枠組みが、あたかも行為者の全体像であるがごとくとらえられると、それは不変のものであると考えられ、問題解決もこの小さな枠組みの中で図られることになる。

嗜癖においては、ある問題行動を抑えると、別の問題行動が発生するという現象が見られる。このことは、「不変の枠組み」のなかでは、変化を求めて内部の因子に働きかけても、その枠組みを超えた視点を持たない限りは、結局のところ決定的な変化を得ることはできず、「不変の枠組み」の中でのいたちごっこが繰り返されるに過ぎないということを示唆している。「個人のルール」もまた、生得的気質や誕生後の環境からの影響を受けながら形成されるものであるが、Cloninger (1993) がパーソナリティとは変化するものであると指摘するように、決して不変的ではない。内的因子、「個人のルール」因子のどちらにも関与するパーソナリティが変化するものであるならば、「いまここに実体として存在する行為者の全体像」を見る枠組みも可変的であるととらえるべきである。

⁵⁷ アリストテレスは「あらゆる領域において、同じような厳密性を求めてはならず、それぞれの主題に応じて、その研究にふさわしい程度の厳密性を求めるべきである」としている。(アリストテレス, 2002, 3-54)

⁵⁸ 「1・9 権力者と服従者の関係」参照。

3・10 行為の3段階

第2章において、環境（ここでは親の養育態度）がパーソナリティの性格部分に影響を与え、それが嗜癖傾向の強弱に関係していることを明らかにした。ただ、人の行動はそれが嗜癖的であれ、社会的に容認されたものであれ、いずれの場合も気質や性格特性などもろもろの因子の表出であると考えるのが妥当であり、その原因を例えば気質のみ、あるいは性格のみに限定して追究するという考え方は合理性を欠く。むしろ、人の行動は、気質、性格特性あるいは環境因子といった様々な因子が複雑に絡み合っており、取り込まれた内在化された要素の現実化（表出）と考えられ、嗜癖のような不合理な行動を起こすか、起こさないかということは、内在化された要素の現実化のやり方の違い、あるいは行為の選択の問題であると言えよう。

岡部は、行為の自己決定と選択に関して以下の三つの階層（問題の次元とか領域の違い）を提示し、人間の成熟段階との関連性についても言及している。（岡部，2006，2007）。

(1) そもそも、行為であるかどうかの問題になる次元。言い換えれば、行為の成立要件が問題になる次元。

(2) 為された行為が選択された行為であるかどうかの問題になる次元。即ち、意志の弱さないし無抑制が問題になる次元。

(3) 選択された行為の優劣が問題になる次元。実際に為された選択について、可變的・規範的な意味での合理性⁵⁹が問題になる次元。言い換えれば、不合理、愚かさ等が問題になる次元。

これら三つの階層は、嗜癖にも十分適用可能であり、嗜癖の形成過程のみならず、回復プロセス、あるいは治療という観点においても多くの手掛かりを示唆している。(1)の段階では、行為者の意図することが行為として現実化したかどうかということのみが問題になる段階で、そこに評価的なものは付加されない。例えば、酒を飲む、タバコを吸う、セックスをするという意図的な行為自体の実現段階である。従ってこの段階での行為は、嗜癖行動に該当するものではなく、それが行為であるかどうかということだけが問題になる次元である。

岡部は、行為の成立要件に関わる重要な条件として、「自発性」と「意図性」

⁵⁹ 可變的・不變的な意味での合理性については、岡部が Grice の考えを詳細に述べている（岡部，2006）。Grice は、私たちに自然發生的に備わった、自然的な合理性の能力としての自然的推論能力と、後天的に備わる合理性の能力とを区別する。さらに Grice は、後天的に備わるとする合理性の能力を、1) 基礎的・不變的能力と、2) 規範的・可變的能力に分けている。基礎的・不變的能力とは、言語能力のように、外部にあるものを内部に取り入れるような仕方を実現される合理性の能力である。これに対し、規範的・可變的能力は、基礎的不變的能力を基盤に、規範性を意識しながら、それぞれの仕方（可變的な仕方）で個別的に実現される合理性の能力である。

を挙げる（岡部，2006）。このうち「意図性」を、嗜癖行動にあてはめるならば、その行動が選択されてはならない行動であることをよく知っていながら、その行動を選択してしまうといったいわゆる「意志の弱さ」が問題になる部分と関わりを持つ。

(2) の段階は、行動が選択された行動であるかどうかの問題になる次元である。ここでは、選択の仕方ではなく、選択自体の中身（選択すべきものを選択すること）が問われることになる。岡部は、アリストテレスの「選択」の概念を用いて、弱さ（意志の弱さ **weakness of will** ないし無抑制 **incontinence**、**akrasia**）に基づく行為を、1）強制されたのではなく、自分でしたものであり、2）何をするかを知っていて、意図的にしたものであって、3）他の誰でもなく、自分で決めた（自己決定した）行為ではあるのだが、4）選択された行為ではない、としている。

嗜癖とは「その行動の結果が自己に不利益をもたらすと知っているのにもかかわらず行動衝動を制御できない状態に陥ったもの」であり、行為者の意図に基づいた無抑制が問題になる行動である⁶⁰。「選択された行為ではない」ということは、選択すべき行動があるのだが、実際にそれは選択されずに、それとは別の、弱さに基づいた行動が選択された場合を意味する。この段階で、選択すべき行動を選択しないで、弱さに基づく行動を選択してしまったとき、人は自分の弱さを嘆くことになる。さらに厄介なのは、選択すべきと判断された行動を選択したにもかかわらず、実はそれが不合理な選択であった場合というのがある。どちらの行動選択においても、そこで求められるのは、(3) の段階の可変的・規範的意味での合理性ということになる。

また、(2) の段階は、自分が行う行動に対して自己の評価が加えられる段階でもある。人は選択されるべき行動ではなく、弱さに基づいた行動をとっている場合は、自分の意志の弱さを嘆くだろう。また、選択すべきものであると判断した行動であっても、不合理な選択の結果であるならば、空虚感がつきまったり、周囲とのバランスがうまくとれないなど、行動に対する肯定的な評価を見いだせないということにもなるだろう。この段階は葛藤状況をつくりだすことになる。葛藤の有無は、嗜癖行動とそうでない行動を分けるものでもあり、嗜癖とは葛藤状況下で繰り返される行動と言うこともできる。

治療的介入は、この段階において必要になってくる。そこでは、親子関係をはじめとしたこれまでの生活史やその他の周辺環境との関わり方、自己の気質や性格など内的なものを見つめ直す作業を通して、自己理解をすることが求められる。ありのままの自分と向き合うということが目標となる重要な段階である。それは、問題となっている行動に対して自分が無抑制、無力であるという

⁶⁰ 「1・1 嗜癖の定義」参照。

ことを認めることでもある⁶¹。この段階で自己理解が行われないままでは、次の(3)の段階へと移行することは困難である。

(3)の段階は、選択された行動に対する意味や価値が問題となる次元である。行動の成立要件として重要なのは、「自発性」と「意図性」であるが、この段階では、「自発性」が主要な役割を果たすことになり、自分が目指す目的を意識して、その実現を目指し、自分の考えに従って意図的に行動するということが求められる。これは、自発性、合理性、理性的能力のもとに、目的の実現を目指して熟慮し、その結果下した自分の判断に従って、それを意識して行動するということである。この場合、社会的要求（社会規範）が意識されるわけだが、ここで求められるのは社会的要求に対する答え方である。(2)の段階で要求されるような自己理解をどれだけ繰り返しても、状況は何も変わらない。自己を動かし、変化させることに対して無力な傍観者となっているだけである⁶²。帰結（結果として表出した行動）を大きく変えることができるのは(3)の段階である。自己理解、現実理解が進むと、「なぜ」という原因追究ではなく、「何をすべきか」という問いへと変化する。つまり、(3)は現実を変化させる可能性をはらんだ段階ともいえるのである。

3・11 自発性における人間の可塑性と自尊心

情動が基になる欲望に対して、人間の知性は従属的である。しかし、私たちは時として生活を振り回すほどに沸き起こる激しい欲望を覚えながらも、日常の生活を維持し、個人的にも社会的な領域においても適応的に生きることを可能にする合理性の能力も同時に持ち合わせている。

第2章で示したように、嗜癖とパーソナリティ、親の養育態度を因子とした共分散構造分析による解析結果を見ると、気質が嗜癖に「GO」と叫ぶ一方で、性格（自己志向：SD）は、「待て」と命令していた。そしてこの図式を可能にしているのが、parental style の高得点、つまり親の養育態度の良好さであった。この結果が示すのは、親の養育態度などの個人を取り巻く環境次第で、表出する行動の質も変わってくるということであるが、それでは私たち人間の持つより高次の能力を置き去りにした不十分な理解に留まってしまう。そこには「自己志向」を含むパーソナリティに自発性、合理性の能力が発動し、それが嗜癖に対して「待て」と命令していると見ることができる。つまり、価値基準を変化へと導くものとして自発性、合理性の能力が発動されるのである。

⁶¹ 例えば、飲酒問題を持つ人たちの援助にあたっている民間団体のアルコホリック・アノニマス（Alcoholics Anonymous：AA）による回復の「12ステップ」が、「私たちはアルコールに対し無力であり、思い通りに生きていけなくなったことを認めた」という第一ステップではじまるのも、変化のための自己理解を意識したものであると考えられる。

⁶² 「1・11 精神の遊離と傍観者化」参照。

自発性、合理性の能力は、私たちの意志の力を超えて沸き起こる多くの欲望に曝されながらも、私たちをより善い方向へと導くための力になるものである。ここで言う「価値」とは、Frankfurt の言う second order desire において行動が選択される際に用いられる「一般的・社会的価値」とは別の次元の「価値」である。この次元での「価値」は、究極的な目的を求める（欲望する）際に意味を持つようなものである。そして、究極的な目的こそ、アリストテレスが『ニコマコス倫理学』第1巻でいう、幸福（善）である⁶³。

自発性の発露、あるいは個人のルールへの積極的関わりを本人全体のあり方を構成する因子に加えるなら、内在化された要素を行動に変えるやり方はもっと自由度の高い洗練された変化を生みだし、ある固定されたルールの枠の中をただぐるぐる回るだけというような受動的循環は避けられるのではないだろうか。「私」という存在の全体像は、決して過去の出来事や環境からの影響といった受身的なものだけで規定されるのではなく、これらの出来事や環境に積極的に関わる自発的、合理的、理性的能力と呼ばれるものが関与する可能性を含んでいる。

「自発性」の発動の基盤となるものとしては二つのことが考えられる。一つは人間の可塑性、もう一つは自尊心である。

例えば、脳は経験や環境（刺激）の影響を受けながら、神経細胞の数やつながり方を複雑に変化させることができる⁶⁴。可塑性とは、脳のように修正可能な

⁶³ 目的と幸福に関しては、Grice (2001), 112-134 参照。

⁶⁴ 脳や脊髄（中枢神経系）は、神経細胞（ニューロン）とグリア細胞で構成されている。ニューロンは神経の興奮の伝達を行い、グリア細胞はニューロンに対して支持的、栄養的な働きをしている細胞である。ニューロンの増殖は、胎生4ヶ月の中頃で最高に達し、毎分25万個のニューロンが誕生する。その後ニューロンは、グリア細胞（星状グリア線維）に誘導されて大脳皮質内の定位置へと移動し、軸索の伸張と樹状突起の生成を行う。成長したグリア細胞が作り出すミリエン鞘により軸索の鞘形成が行われ、脳の髄鞘形成も連続的に起きてくる。また、生後2年を頂点に胎生4ヶ月から生後10年くらいまで、猛烈な勢いでシナプスが形成されることがわかっている。

シナプスは、ニューロンから他のニューロンの間にある細胞接合領域であり、刺激がやり取りされ、神経の活動が最も繊細に処理される場所である。ニューロンの成熟を支えるグリア細胞が増し樹状突起が複雑に分枝していくことで、他のニューロンとのシナプスを作る場が増え、情報処理能力がどんどん増していくことになる。そこでシナプスは成長の過程で必要とされる量の数倍余分に形成されるのだが、刈り込みにより、適切な機能を果たすシナプスのみが生き残る⁶⁴。その結果、繰り返し刺激された神経回路が強く太くなり、速く刺激を伝えられるように進化し、その他の不要な神経網は削除されてしまうわけである。こうして社会に適応する脳が作られていくのである。

大脳皮質の成長過程において、シナプスの形成が劇的に行われる幼・小児期の経験や環境（刺激）は、脳回路の形成に多大な影響を与える。生まれたときは、細かい神経回路はほとんど完成しておらず、その後与えられるさまざまな経験や環境（刺激）の影響を受けながら神経細胞の数やつながり方は複雑に変化する。見方を変えるならば、脳は、さまざまな刺激要因によって修正可能な自由度をたくさん残しているとも言えよう。したがって、個

自由度をたくさん持ち、インプットされた量の何倍ものアウトプットを可能にするという情報処理能力のようなものである。可塑性は不変に見える枠組みを一瞬にして変化させる力を持つ。

その力は、「ひらめき」という言葉で表現できよう。「ひらめき」は、哲学、芸術、思想、科学から、日常生活にいたるまで、人間のすべての思考活動において現れ得るものである。いわば「コロンブスの卵」の逸話のようなものだ。提示された問題に対し、ひらめきによって得られた解決方法は拍子抜けするぐらい単純であるが、狭められた意識の枠組みを一気に解き放つ力を持つ。ところが、私たちは「卵を立てなさい」という問題を前に、「卵を原型のままに立てなければならない」などといった、もともと問題にはない条件を勝手に持ち込んで、考え方の枠組みがあたかも不変であるかのようにしてしまい、結果として卵を両手で支えた後にそっと手を放してみたり、息を吞んでみたりと、無駄な努力を重ね、解決不能の循環に陥るのである。

このように私たちは、慣れ親しんだ観念（先入観）に捉われる傾向を持っている。可塑性のエネルギーを自発性へと結ぶには、自分（場合によっては周囲も含め）が拠り所としていた観念を一瞬で突き崩すような「ひらめき」様の体験が求められる。その体験はけっして霊的な類のものでなく、自分自身へのある種の「気づき」という言葉で言い換えることもできる。「気づき」とはいまの自分の姿に恥じ入り、根本的な変化を希求する原動力となりうるものであり、こうしたありのままの自分を評価する目こそが自尊心である。

嗜癖に関して第1章で仮説設定した自尊心の低さは、第2章で実証することができた。自尊心の低下は自由な思考力の減退を招くことになり、人を慣れ親しんだ観念の枠内に留め続け、変化を恐れたり躊躇するという状態を作り出す。一方、自尊心の高まりは人間の可塑性による情報処理能力をより高次のひらめきや発見へと結びつけ、固定された観念から抜け出すということを自発的に行うために不可欠な原動力となる。嗜癖者が一度に複数の問題行動を抱えたり、表面化した行動を抑えることができて、他の問題行動が現れるなどの特性を見せるのも、当事者を含め嗜癖に向き合う人たちが小さな「不変の枠組み」に捉われているからである。「枠組み」に捉われることのない高い次元で別の世界を持つためには、ひらめきや発見を求めて枠組みを越え出るエネルギーである自発性の力を後押しする自尊心が重要な役割を担っていると言えよう。

人の置かれた家庭環境や社会環境をはじめさまざまな要因が、脳の発達、ひいては人格形成に重要な影響を与えることとなる。

3.12 合理的自由

Frankfurt や Davidson は、私たちの行動を欲求と信念によって分析した。Grice は、これらの「欲求・信念」理論に修正を加える必要性を二つの視点から指摘している (Grice, 1986, 1-35)。まず、full human action ⁶⁵(person としての行為) は strong freedom を求め、「欲求・信念」理論は、それを提供することがないということである。strong freedom とは、恐らくは合理的自由と解釈することができるだろう。「欲求・信念」理論に見るように、因果的説明を手がかりに分析する試みは、それによって合理的自由が与えられることはない。

第二は、「欲求・信念」理論は欲求の循環性を消去することができないため、循環の中に取り込まれてしまい、その狭い領域にとどまり続ける結果となるということである。このことは実質的無変化の循環状態を示すものであり、「欲求・信念」理論では、嗜癖レベルの行動分析のみにとどまり、person としての行為の分析が欠如していることを示唆したものであるとも解釈できる。

person としての行動、あるいは person そのものが、パーソナリティの成熟に関わるものである。パーソナリティは、大きく生物学的要因に規定される「気質」と環境によって規定される「性格」との相互作用によって成るといわれている (図 6)。この考え方は、精神医学や心理学の分野で広く受け入れられている理論である。しかし、それだけでは人間の持つすべての側面を包摂したパーソナリティ概念に到達することは難しいだろう。人間には、自分が何であるのかということを認識する自発性の能力が備わっているからである。従って、person 概念と関わるパーソナリティの成熟には、気質と性格の相互作用だけの従来のパーソナリティ概念ではなく、パーソナリティそのものも自分がどういふ存在であるかを認識することで、気質や性格に働きかけて変容させる新たなパーソナリティモデル、「気質、性格、自己認識モデル」(図 7) が必要になると考えられる。

最終的に Grice (2001, Aspect of Reason, 5 Some Reflections about Ends and Happiness, 112-134) は、以上のことを究極的目的という考え方でまとめている。「欲求・信念」理論においては、一次的な欲求やより低い次元の欲求についての果てしない議論を繰り返すといったふうに、議論自体が循環した閉鎖的なものとなるが、究極的目的という観点から見ると、それらの低い次元の欲求も高次の目的や価値へと繋がっているということになる。ある目的がいくつか組み合わさった目的の体系を持つということは、そのこと自体が高次の目的へと繋がるということも示している。究極目的 (幸福) について Grice (2001,

⁶⁵ 直訳すると「十分な人間の行為」ということになるが、ここでは、person に近づくことを成熟としてとらえ、十分な人間を person であると考えすることで、「person としての行為」と解釈した。

132-133) は以下のような興味深い七つの特徴を挙げて説明している。

(1) 実現可能性

採用された目的の体系は、実現可能であるべきである。その体系によって指示される行為や実践が、首尾よく実現できないと分かる程度が高いほど、体系を変更する根拠もより強固なものとなる。この特徴が実効性を持つ特定の場合として、自然本性によってであれ、訓練によってであれ、行為者は、自分の目的の体系を有効に働かせるために必要な能力を身につけるべきであるという実践的能力が必要になってくる。

(2) 自律

この特徴は、(1) の実現可能性と密接に関連する。ある人の目的の体系が、入手可能性を自分でコントロールできない、特にそれが他人のコントロールのうちにあって、コントロールできない、そういうものの助けに、より頼ることがなければならないほど、その体系はアリストテレスが「外的な善」と呼ぶものに、より少なく依存することになり、一般にそれより安定したものに、あるいはより確実に安定したものになる。

(3) (幸福を) 構成する目的間の適合性

目的は、特徴としては、異なった程度において実現可能であるようなものであるということを、また、ある目的の実現（の重要性）が他の目的の実現によって決して減少しないような（目的の）体系を要求するのは非現実的であるということを私たちは認めなければならない。実際に、私たちが合理的に期待してもよいのは、目的間の調和である。すなわち競合する目的をめぐって、それぞれの目的に関して予想される実現の度合に、許容し得るバランスを見出す可能性である。

(4) 包括性 (Comprehensiveness)

ある体系は、それが特定の実践的な問題に関して解決をもたらす限り、包括的である。解決不可能の度合が高くなるほどに包括性はより低いものとなる。より正確に言えば、一般原則に照らして決定されるべきであるそうした実践的な問題に対して答えを与える能力に応じて、体系の包括性は異なる。包括性の欠如は、体系の変更を正当化する。

(5) 構成要素である目的間の促進関係

ある目的の追求が他の目的の追求を推進させるとしたら、体系の安定性は増加する。

(6) 単純さ

人生の指針として（目的の）ある体系が有効かどうかは、特定の問題においてどうするのかを決定するのがどれくらい簡単であるかに、部分的には依存する。

もしそれが、実践的な問題について答えをもたらすはするが、その答えを識別するのが困難である場合には、その体系は、もっと単純に答えを手に入れるのが容易な別の体系に比べると、不便なものとなる。

(7) 満足感

満足できる体系は、競合する体系と比較して安定しているだけではなく、無抑制という無力化する効果に対しても安定する。

これら七つの特徴は、不調和・不整合な形で現れる場合もあるが、調和のとれた望ましい形として現れる可能性もある。不整合な目的の体系においては欲求の連鎖が生じ、嗜癖のような不合理な行動となって現れる。一方、調和のとれた整合的な目的の体系を持ち、それが合理的自由を求めるならば、高次の欲求や高次の価値へとつながり、**person** としての行為へと帰結することになる。

しかし、私たちのほとんどは、「欲求・信念」理論が扱うようなあらかじめ与えられた欲求が問題となるような、ある種の嗜癖的領域にいても言えるし、この領域にあって高次の目的や欲求、価値を正当化するということは、「欲求・信念」理論と同じ道を歩むことになるということにも気がつく。嗜癖的循環という無変化の状態から、**person** として成熟への変化を遂げようとするときに、私たちが問題とすることになるものが合理的自由であり、この合理的自由が問われることによって、自分が何であるのかを認識し、そこで初めて高次の目的や欲求、価値が機能し始めるのである。

ただし、自分自身の幸福を構成するものとして、目的の体系を受け入れるということを、何か規範のような評価領域に求めるのではなく、意志の問題であると考えてしまつては、個々人の心理的状态に目を奪われた主観主義に陥つてしまい、無変化という循環をつくってしまう。**Grice (2001)** は、個人の幸福は、目的の体系を所有することであり、この目的の体系を用いて何ごとかをなすことができるとし、その際、目的の体系は、最大限安定したものでなければならないとする。つまり、目的の体系は、個人の中で安定しているだけではなく、時代や場所の変化、有為転変に対する絶対的安定性によって決定されるべきものである。

このように安定した目的の体系は、絶対的安定性を保っており、これを規定するのは、主体的でも相対的でもない絶対的価値である。目的の体系は、確かに自分で作っていくものではあるが、主体的、相対的あるいは客観的価値とは別のものであり、評価領域を統制する基準としての絶対的価値が要求される。しかし、嗜癖者においては、目指すべき目的を持たないか見失っているために、行為決定は、常に対立文脈の中で行われる。言い換えれば、欲求と欲求の葛藤の中で行為の判定が下されているのである。**Grice (2001)** は、幸福に対する欲

求は、「高次の欲求」であるという。「高次の欲求」とは、その実現がそれ自体のために望まれるような普遍や事態ではなく、そのような普遍や事態に対する欲求のことである。すなわち、幸福は、安定した目的の体系と絶対的価値に基づく高次の欲求から構成される。この高次の欲求が、自発性の能力であると考えるのは、これまでの考察の道筋から言っても十分に的を射たものと思われる。

つまり、自発性を発揮するということは、その行為自体を「する」ということであり、それと同時に、その行為は、「善い」ということになる。またその時に、周辺で何が起きようとも、場が変わろうとも、それを「する」のであり、その後も、実に安定した形で「善く」「する」というそれだけが進行していくのである。それは、例えばいままで何度も禁煙に失敗しながら、長年たばこを吸い続けてきた嗜癖者が、ある日たばこの火を消すことを「する」ということであり、その後も、何の葛藤も苦しみもなく、安定した形で「たばこを吸わないこと」を「する」状態が続いているということである。そこには、「吸うか吸わないか」といった対立項はどこにも見あたらないのである。

自発性、あるいは高次の欲求が働く段階では、「善く」「する」ということのみが問題になるだけで、相対的に見てどうであるとか、欲求を欲求するというように、ある欲求を対象化してそれを相対的、客観的にどう欲求するかというようなことは問題ではない。ここで重要になるのは、欲求や信念といったものではなく、目的の体系や価値という幸福の構成要素なのである。

嗜癖という現象は、私たち人間の持つさまざまな欲求の連鎖であり、目的間の不調和や不整合であると考えられることもできる。こうした不調和や不整合に目を向けることは、逆に合理的自由への問いへと発展する可能性をはらんでおり、私たちが究極的目的を目指す **person** としての可能性を持つ存在であることを示すことにもつながるだろう。

結 論

本論文の狙いは、嗜癖という不合理な行動の分析によって、人間の不合理性あるいは合理性の源泉を一体どこに求めたらよいのかという考察を行うことにあった。嗜癖概念の境界がはっきりしない上に、最終目的が合理性・不合理性という目に見えない対象についての言及だけに、論じ方によっては、議論が曖昧なままに終始する危険性をはらんでいた。このため、概念の再定義を試み、統計的な手法も取り入れるなど、可能な限り問題点を具体的にする形で展開することを心がけた。

第 1 章では、まず、嗜癖概念そのものの定義についての仮説設定を行い、嗜癖の全体像、特に嗜癖者の内面においていかなる現象が起きているのか、その現象はいかにして形成されるのかということを、先行研究を基にした概念図を提示して説明を試みた。この中で特に興味深いのは、嗜癖者における認知の歪みである。概念図においては、嗜癖者の自我が、ありのままの自分や現実の対象関係を認識する目をわざと曇らせるバイアス的なものを「刺激防御壁」と名付けた。現実をありのままに受け入れることに対する恐怖は、認知の歪みをもたらすだけでなく、そこには不安、不快感情に対する防衛機制が働く。嗜癖もまた、満たされない欲求に対する防衛機制である「スリ替え充足」(斎藤)あるいは、「償い行動であり、行動することを通じて自己同一性と気分の問題を処理しようとする試み」(Dittmar, 2004; Elliott, 1994)なのである。

嗜癖という循環型の防衛機制は、行動抑制の不能という特性の故に、その循環システムの一角に必ず罪悪感、自尊心の低下という因子を内包する。特に自尊心の低下は自己愛の障害にもつながっており、さらにたどるならば人生早期の対象関係のあり方にまでさかのぼることが可能である。本稿では、幼児期における虐待経験を、対象関係の歪み（あるいは認知の歪み）をもたらすひとつの例としてクローズアップしたが、人生早期の最も基本的な人間関係が親子関係であることを考えるならば妥当であると考えられる。人生早期の経験が、その後のパーソナリティに及ぼす影響は、マラー、ウィニコットあるいはボールビーらの研究を見ても明らかである。

一方、第 2 章における疫学的、統計的分析手法は、他の二つの章とはいささか趣が違ったものとなった。しかし、嗜癖という包括的概念が精神医学の分野においていまだ確立していない、あるいは受け入れられていないという事情を勘案するならば、嗜癖を論ずることの意義や根拠を提示するためにも、概念それ自体が臨床的に成立するということを実証する必要があった。大学生 4024 人分の質問紙調査は、喫煙、飲酒（以上物質嗜癖）と危険な性行動（プロセスある

いは関係嗜癖)に関する調査と、日本語版 TCI を使ったパーソナリティの査定、日本語版 PBI による被養育体験の査定を目的としたものであった。この3種類の調査で得られたデータを使った共分散構造分析の結果、嗜癖という概念が実臨床の場においても有効であるという数値結果を得ることができた。

また、これに付随して、気質と性格というパーソナリティを構成する二つの因子のうち、生得的な気質においては、高い新規性追求と低い損害回避が嗜癖の傾向を強めていた。一方、環境によって可変的な性格は、当然のことながら親の養育態度と関係した。特に性格の下位因子である「自己志向」は親の養育態度と正の相関を示し、嗜癖とは負の相関を示した。このことは、気質的に嗜癖的な傾向を持っている人であっても、環境によって嗜癖的傾向が抑えられるということを意味している。「自己志向」の特性である責任と自己の目標に基づいた行動は、自尊心に裏打ちされたものであり、「自尊心の低下」をその原因とした嗜癖概念定義の仮説(第1章)を補強することになった。

第2章における解析結果と嗜癖者の自己システムを考え合わせた時、嗜癖者のパーソナリティの未成熟さを考えないわけにはいかない。例えば、嗜癖とは否認の病であると言われるほどに、自己欺瞞性は嗜癖者に共通するところである。また、「行為の自己決定」という観点から嗜癖をながめると、人間のあらゆる行為の起点となる欲求の生成あるいは発展過程において、低い自尊心の故に現状の枠組みを変えることができない嗜癖者の姿が浮かび上がる。

第3章では、人間の欲望形成と発展の道筋を追い、「高次の欲求」「高次の価値」という究極的な価値観への到達を見た。この中で、特に重要視したのは人間が本来持つ自発性と合理性の能力である。これらは、内在化された要素を行動に変えるにあたって、自由度の高い洗練された変化を生み出すことになる。嗜癖とは、認知の枠組みが極端に固定された状態にある。この枠組みの固定化を抜け出すことが、嗜癖からの回復の絶対条件といえよう。そのためには、内在化された要素の行動化に際しての触媒的働きをする「個人のルール」の劇的な変化が必要であり、その原動力となるのが自発性であり、合理性の能力である。自発性の能力は「ひらめき」あるいは、ありのままの自分への「気づき」と表現することができよう。また、合理性の能力は、情動が優位性を持つ欲望を抱きながらも適応的に生きる力でもある。ともに、パーソナリティを基盤に、自尊心に裏打ちされて能力を発揮するのだが、とりもなおさず、自発性、合理性の能力はパーソナリティの成熟度合いとも大きく関わっているということができよう。

さて、第1章から第3章まで、嗜癖をメインテーマとしながら、通奏低音のように議論の根底を流れていたのは、「自尊心」というキーワードである。自尊心の低下は、人を不合理な行動へと走らせ、逆に自尊心の高まりは自発性・合

理性の能力の発揮を促す。つまり、人が抱く自尊感情は、時には不合理な行動の源泉となり、またある時には私たちに究極的な目的に向かう **person** へと引き上げる原動力にもなりうる。自尊心の在り方を考えたとき、嗜癖という問題行動を通して見えるのは、欲望の連鎖や不調和、不整合といった負の側面だけではない。そこから垣間見える回復への道筋へと視点を移したとき、人間が持つ高い可能性も見えてくるはずである。

引用·参考文献

- Abela, J. R. Z. (2002), Depressive Mood Reactions to Failure in the Achievement Domain: A Test of the Integration of the Hopelessness and self-Esteem Theories of Depression. *Cognitive Therapy and Research*, 26, (4), 531-552 .
- Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E., Wall, S. (Eds.) (1978), *Patterns of attachment: a study of the strange situation*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Andersen, S. L., Teicher, M. H. (2004), Delayed effects of early stress on hippocampal development. *Neuropsychopharmacology*, 29, 1988-1993.
- Bartholomew, K. (1990), Avoidance of intimacy: An attachment perspective. *Journal of Social and Personal Relationships*, 7, 147-178.
- Bartholomew, K. (1993), From childhood to adult relationships: Attachment theory and research. Sage: London: In S. W. Duck (Ed.), *Understanding relationship processes 2: learning about relationships*, 30-62.
- Bond, M. & Perry, J. C. (2004), Long-term changes in defense styles with psychodynamic psychotherapy for depressive, anxiety, and personality disorders. *American Journal of Psychotherapy*, 161, 1665-1671.
- Bowlby, J. (1977), The making and breaking of affectional bonds. I. aetiology and psychopathology in the light of attachment theory. *British Journal of Psychiatry*, 130, 201-210.
- Bowlby, J. (1958), The nature of the child's tie to his mother. *International Journal of Psycho-analysis*, 39, 350-373.
- Bowlby, J. (1969), Attachment and Loss. in Attachment: vol.1. *New York: Basic Books*.
- Bowlby, J. (1973), Attachment and Loss: Volume 2. Separation: *Anxiety and Anger*. New York: Basic Books.
- Bowlby, J. (1988), Developmental psychiatry comes of age. *American Journal of Psychiatry*, 145, 1-10.
- Briere, J. (1996), A self trauma model for treating adult survivors of severe child abuse. Thousand Oaks, CA: Sage.: *The APSAC handbook on child maltreatment*, 140-157.
- Brown, E. J., Kolko, D. J. (1999), Child victims attributions about being physically abused: An examination of factors associated with symptom severity. *Journal of Abnormal Psychology*, 27, 311-322.
- Byrne, C. P., Velamoor, V. R., Cerovsky, Z. Z., Cortese, L. & Losztyn, S. (1990), A comparison of borderline and schizophrenic patients for childhood life events

- and parent-child relationships. *Canadian Journal of Psychiatry*, 35, 590-595.
- Champney, H. (1941), The measurement of parent behavior. *Child Development*, 12, 131-166.
- Chen, Z., Tanaka, N., Uji, M., Hiramura, H., Shikai, N., Fujihara, S., & Kitamura, T. (2007), The role of personality for marital adjustment of Japanese couples. *Social Behavior and Personality*, 35, 561-572.
- Christo, G., Jones, S.L., Haylett, S., Stephenson, G.M., Lefever, R.M.H., Lefever, R. (2003), The Shorter PROMIS Questionnaire Further validation of tool for simultaneous assessment of multiple addictive behaviours. *Addictive Behaviors*, 28, 225-248.
- Clarkin, J. F., Yeomans, F. E., Kernberg, O. F. (2005), Psychotherapy for borderline personality focusing on object relations. *American Psychiatric Publishing*, 1-32.
- Clarkin, J. F., Foelsch, P. A., Levy, K. N., Hull, J. W., Delaney, J. C., & Kernberg, O. F. (2001), The development of a psychodynamic treatment for patients with borderline personality disorder: A preliminary study of behavioral change. *Journal of Personality Disorders*, 15, 487-495.
- Clarkin, J. F., Levy, K. N., Lenzenweger, M. F., & Kernberg, O. F. (2004), The personality disorders institute/borderline personality disorder research foundation randomized control trial for borderline personality disorder: rationale, methods, and patient characteristics. *Journal of Personality Disorders*, 18, 52-72.
- Clarkin, J. F., Levy, K. N., Lenzenweger, M. F., & Kernberg, O. F. (2007), Evaluating three treatments for borderline personality disorder: A multiwave study. *American Journal of Psychiatry*, 164, 922-928.
- Clarkin, J. F., Yeomans, F. E., & Kernberg, O. F. (2006), *Psychotherapy for borderline personality: Focusing on object relations*. Washington D.C.: American Psychiatric Press.
- Cloninger, C. R. (1987), Neurogenetic adaptive mechanisms in alcoholism. *Science*, 236, 410-416.
- Cloninger, C. R., Christiansen, K. O., Reich, T., & Gettesman, I. I. (1978), Implications of sex differences in the prevalences of antisocial personality, alcoholism, and criminality for familial transmission. *Archives of General Psychiatry*, 35, 941-951.
- Cloninger, C. R., Przybeck, T. R., & Svrakic, D. M. (1991), The tridimensional personality questionnaire: US normative data. *Psychological Reports*, 69, 1047-1057.
- Cloninger, C. R., Sigvardsson, S., & Bohman, M. (1988), Childhood personality predicts alcohol abuse in young adults. *Alcoholism: Clinical and Experimental Research*, 12, 494-505.

- Cloninger, C.R. (1987), A systematic method for clinical description and classification of personality variants. *Archives of General Psychiatry*, 44, 573-588.
- Cloninger, C.R., Svrakic, D.M., Przybeck, T.R. (1993), A psychobiological model of temperament and character. *Archives of General psychiatry*, 50, 975-990.
- Collins, N.R., Read, S.J. (1990), Adult attachment, working models, and relationship quality in dating couples. *Journal of Personality and Social Psychology*, 58, 644-663.
- Coventry, K.R., Norman, A.C. (1998), Arousal, erroneous verbalisations and the illusion of control during a computer-generated gambling task. *British Journal of Psychology*, 89, 629-645.
- Curtin, F., Walker, J.P., Peyrin, L., Soulier, V., Badan, M., Schulz, P. (1997), Reward dependence is positively related to urinary monoamines in normal men. *Biological Psychiatry*, 42, 275-281.
- Davidson, D. (2004), *Problems of Rationality*. Oxford University Press.
- De Bellis, M. D., Keshaven, M. S., Shiffett, H. (2002), Brain structures in pediatric maltreatmentrelated posttraumatic stress disorder: A sociodemographically matched study. *Biological Psychiatry*, 52, 1066-1078.
- Demitrack, M.A., Gold, P.W., Dale, J.K., Krahn, D.D., Kling, M.A., Straus, S.E. (1992), Plasma and cerebrospinal fluid monoamine metabolism in patients with chronic fatigue syndrome. *Biological Psychiatry*, 32, 1065-1077.
- Dittmar, H. (2004), Understanding and diagnosing compulsive buying. In R. Coombus (Ed.). New York: Wiley, Chap. 13.: *Handbook of addictive disorders: A Practical guide to diagnosis and treatment*.
- Dittmar, H. (2005), Compulsive buying - a growing concern? An examination of gender, age, and endorsement of materialistic values as predictors . *British Journal of Psychology*, 96, 467-491.
- Donovan, D.M. (1988), Assessment of addictive behaviors: implications of an emerging biopsychosocial model. In D.M. Donovan, G.A. Marlatt (Eds.). London: Hutchinson: *Assessment of addictive behaviors*, 3-48.
- Elliott, R. (1994), Compulsive consumption: Function and fragmentation in postmodernity. *Journal of Consumer Policy*, 17, 159-179.
- Frankfurt, H. G. (1971), Freedom of the Will and the Concept of a Person. *Journal of Philosophy*, 68, 5-28.
- Frankfurt, H. G. (2006), *ON TRUTH*. New York: Alfred A. Knopf.
- Furukawa, T. (1992), Perceived parental rearing: personality and mental status in Japanese adolescents. *Journal of Adolescent*, 15, 317-322.

- Garvey, M.J., Noyes, R.Jr., Cook, B., Blum, N. (1996), Preliminary confirmation of the proposed link between reward-dependence traits and norepinephrine. *Psychiatry Research*, 65, 61-64.
- Giddens, A. (1992), *The Transformation of Intimacy: Sexuality, Love and Eroticism in Modern Societies*. Polity Press.
- Goodman, A. (1990), Addiction: definition and implications. *British Journal of Addiction*, 85, 1403-1408.
- Greenfield, D. N. (1999), *Virtual addiction help for Netheads, Cyberfreak, and Those who Love Them*. New Harbinger Publications.
- Grice, P. (1986), Actions and Events. *Pacific Philosophical Quarterly*, 67, 1-35.
- Grice, P. (2001), *Aspect of Reason*. Oxford University Press.
- Hazan, C., Shaver, P. (1987), Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of personality and Social Psychology*, 52, 511-524.
- Jacobson, E. (1964), *The Self and the Object World*. New York: International Universities Press.
- Kernberg, O. F. (1980), *Internal World and External Reality: Object Relations Theory Applied*. New York: Jason Aronson.
- Kijima, N., Tanaka, E., Suzuki, N., Higuchi, H., Kitamura, T. (2000), Reliability and validity of the Japanese version of the Temperament and Character Inventory. *Psychological Reports*, 86, 1050-1058.
- Kitamura, T., Kijima, N., Sakamoto, S., Tomoda, A., Suzuki, N., Kazama, Y. (1999), Correlates of problem drinking among young Japanese women: personality and early experiences. *Comprehensive Psychiatry*, 40, 108-114.
- Kitamura, T., Kishida, Y. (2005), Early experiences and development of personality: A study of the Temperament and Character Inventory in 4000 university students in Japan. In (Ed.) L.V.Kingler. *Trends in lifestyle and health research*, 1-20, Hauppauge: Nova Science Publishers.
- Kitamura, T., Watanabe, M., Aoki, M., Fujino, M., Ura, C., & Fujihara, S. (1995), Factorial structure and correlates of marital adjustment in a Japanese population. *Journal of Community Psychology*, 23, 117-126.
- Kitamura, T., Suzuki, T. (1993), A validation study of the Perental Bonding Instrument in a Japanese population. *Japanese Journal of Psychiatry and Neurology*, 47(1), 29-36.
- Kitamura, T., Tomoda, A., Kijima, N., Sakamoto, S., Tanaka, E., Iwata, N. (2002), Correlates of retro-spective early life experience with personality in young Japanese women. *Psychological Reports*, 91, 263-274.

- Klein, M. (1957), *Envy and Gratitude, a Study of Unconscious Sources*. New York: Basic Books.
- Mahler, M. S. (1971), A study of the separation-individuation process and its possible application to borderline phenomena in the psychoanalytic situation. *Psychoanal Study Child*, 26, 403-424.
- McEven, B. S. (2000), The neurobiology of stress: From serendipity to clinical relevance. *Brain Research*, 886, 172-189.
- Muller, R., T., Sicoli, L. A., Lemieux, K. E. (2000), Relationship between attachment style and posttraumatic stress symptomatology among adults who report the experience of child abuse. *Journal of Traumatic Stress*, 13, 321-332.
- Muller, R. T., Lemieux, K. E., Sicoli, L. A. (2001), Attachment and psychopathology among formerly maltreated adults. *Journal of Family Violence*, 16, 151-169.
- Murphy, E., Brewin, C. & Silka, L. (1997), The assessment of parenting using Parental Bonding Instrument: two or three factors? *Psychological Medicine*, 27, 333-342.
- Neuner, M., Raab, R., Reisch, L. A. (2005), Compulsive buying in maturing consumer societies: An empirical re-inquiry. *Journal of Economic Psychology*, 26, 509-522.
- Olivardia, R., Pope, H., Borowiecki, J., Cohane, G. (2004), Biceps and Body Image: The relationship between muscularity and Self-Esteem, Depression, and Eating disorder symptoms. *Psychology of Men & Masculinity*, 5 (2), 112-120.
- Onstad, S., Skre, I., Torgersen, S., & Kringlen, E. (1994), Family interaction: parental representation in schizophrenic patients. *Acta Psychiatrica Scandinavica*, 384, 67-70.
- Orford, J. (1985), *a psychological view of addictions*. New York: Wiley: Excessive appetites.
- Parker, G. (1989), The parental Bonding Instrument: psychometric properties reviewed. *Psychiatric Development*, 7, 317-335.
- Parker, G., Tupling, H., Brown, L.B. (1979), A parental bonding instrument. *British Journal of Medical Psychology*, 52, 1-10.
- Parker, G. (1979b), Parental characteristics in relation to depressive disorders. *British Journal of Psychiatry*, 134, 138-147.
- Parker, G. (1983), *Parental overprotection: a risk factor in psychological development*. New York: Grune & Stratton.
- Perris, C., Jacobsson, L., Lindstrom, H., vonKnorring, L., Perris, H. (1980), Development of a new inventory assessing memories of parental rearing behaviour. *Acta Psychiatrica Scandinavica*, 61, 265-274.
- Plantes, M. M., Prusoff, B. A., Brennan, J., & Parker, G. (1988), Parental representations of

- depressed outpatients from a U.S. sample. *Journal of Affective Disorders*, 15, 149-155.
- Raskin, A., Boothe, H. H., Reatig, N. A., Schulterbrandt, J. G., Odle, D. (1971), Factor analyses of normal and depressed patients' memories of parental behavior. *Psychological Reports*, 29, 871-879.
- Rey, J. M. (1995), Perceptions of poor maternal care are associated with adolescent depression. *Journal of Affective Disorders*, 34, 95-100.
- Roberts, J. E., Gotlib, I. H., Kassel, J. D. (1996), Adult Attachment Security and Symptoms of Depression: The Mediating Roles of Dysfunctional Attitudes and Low Self-Esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, 70, (2), 310-320.
- Roche, D. N., Runtz, M. G., Hunter, M. A. (1999), Adult attachment: A mediator between child sexual abuse and later psychological adjustment. *Journal of Interpersonal Violence*, 14, 184-207.
- Rodriguez Vega, B., Bayon, C., Franco, B., Canas, F., Gaell, M. & Salvador, M. (1993), Parental rearing and intimate relationships in woman's depression. *Acta Psychiatrica Scandinavica*, 88, 192-197.
- Sato, T. Sakado, K., Uehara, T., Narita, T., Hirano, S., Nisioka, K. & Kasahara, Y. (1998), Dysfunctional parenting as a risk factor to lifetime depression in a sample of employed Japanese adults: evidence for the 'affectionless control' hypothesis. *Psychological Medicine*, 28, 737-742.
- Sato, T., Sakado, K., Uehara, T., Nishikawa, K. & Kasahara, Y. (1997a), Perceived parental styles in a Japanese sample of depressive disorders: a replication outside Western culture. *British Journal of Psychiatry*, 170, 173-175.
- Sato, T., Uehara, T., Sakado, K., Nisioka, K., Ozaki, N., Nakamura, M. & Kasahara, Y. (1997b), Dysfunctional parenting and a lifetime history of depression in a volunteer sample of Japanese workers. *Acta Psychiatrica Scandinavica*, 96, 306-310.
- Schaefer, E.S. (1965), Children's reports of parental behavior: An inventory. *Child Development*, 36, 413-24.
- Schvaneveldt, J. D (1968a), Correlates of perceptions toward maternal overprotection. *Journal of Genetic Psychology*, 112(2d Half), 267-73.
- Schvaneveldt, J. D. (1968b), Development of a film test for the measurement of perceptions toward maternal overprotection. *Journal of Genetic Psychology*, 112(2d Half), 255-66.
- Solyom, L., Silberfeld, M., Solyom, C. (1976), Maternal overprotection in the etiology of agoraphobia. *Canadian Psychiatric Association Journal*, 21, 109-113.

- Stallings, M.C., Hewitt, J.K., Cloninger, C.R., Heath, A.C., Eaves, L.J. (1996), Genetic and environmental structure of the Tridimensional Personality Questionnaire: three or four temperament dimensions? *Journal of Personality and Social Psychology*, 70, 127-140.
- Stein, D.J., Hollander, E., Liebowitz, M.R. (1993), Neurobiology of impulsivity and the impulse control disorders. *Journal of Neuropsychiatry and Clinical Neuroscience*, 5, 9-17.
- Stephenson, G.M., Maggi, P., Lefever, R.M.H., Morojele, N. K. (1995), Excessive behaviours: an archival study of behavioural tendencies reported by 471 patients admitted to an addiction treatment centre. *Addiction Research*, 3, 245-265
- Takeuchi, M., Yoshino, A., Kato, M., Ono, Y., & Kitamura, T. (1993), Reliability and validity of the Japanese version of the Tridimensional Personality Questionnaire among university students. *Comprehensive Psychiatry*, 34, 273-279.
- Teicher, M. H., Dumont, N. L., Ito, Y. (2004), Childhood neglect is associated with reduced corpus callosum area. *Biol Psychiatry*, 56, 80-85.
- Tennant, C. (1988), Parental loss in childhood: its effect in adult life. *Archives of General Psychiatry*, 45, 1045-1050.
- Terr, L. C. (1991), Childhood traumas: An outline and overview. *American Journal of Psychiatry*, 148, 10-20.
- Tomita, T., Aoyama, H., Kitamura, T., Sekiguchi, C., Murai, T., Matsuda, T. (2000), Factor structure of Psychobiological seven-factor model of personality: a model-revision. *Personality and Individual Differences* in press.
- Uehara, T., Sato, T., Sakado, K. & Someya, T. (1998), Parental Bonding Instrument and the Inventory to Diagnose Depression Lifetime version in a volunteer sample of Japanese workers. *Depression and Anxiety*, 8, 65-70.
- Valle, L. A., Silovsky, J. F. (2002), Attributions and adjustment following child sexual and physical abuse. *Child Maltreatment*, 7, 9-25.
- Warner R., & Atkinson, M. (1988), The relationship between schizophrenic patients' perceptions of their parents and the course of their illness. *British Journal of Psychiatry*, 153, 344-353.
- Watson, P. J., Hickman, S. E., Morris, R. J., Milliron, J. T., Whiting, L. (1995), Narcissism, self-esteem, and parental nurturance. *Journal of Psychology*, 129, 61-73.
- Yoshino, A., Kato, M., Takeuchi, M., Ono, Y., & Kitamura, T. (1994), Examination of the tridimensional personality hypothesis of alcoholism using empirically multivariate

- typology. *Alcoholism: Clinical and Experimental Research*, 18, 1121-1124.
- Zweig, F. H. & Paris, J. (1991), Parent's emotional neglect and overprotection according to the recollections of patients with borderline personality disorder. *American Journal of Psychiatry* 148, 648-651.
- American Psychiatric Association 編, 高橋三郎, 大野裕, 染矢俊幸訳 (2002), DSM-IV-TR 精神疾患の診断・統計マニュアル 新訂版. 医学書院.
- アリストテレス., 林一功訳 (2002), ニコマコス倫理学. 京都大学学術出版社.
- ウィニコット, D. W., 牛島定信訳 (1977), 情緒発達の精神分析理論. 岩崎学術出版社.
- 遠藤優子 (2001), 臨床から見た共依存・アダルトチルドレン問題 『共依存とアディクション 心理・家族・社会』. 培風館, 85-126.
- 岡部勉 (2007), 合理的とはどういうことか 愚かさと弱さの哲学. 講談社選書メチエ.
- 岡部勉 (2006), 先端倫理研究 創刊号 不合理・愚かさ・弱さ—自己決定論再考—. 熊本大学倫理学研究室紀要, 14-25.
- カーンバーク, O., 前田重治監訳 (1983), 対象関係論とその臨床 (精神分析双書 第Ⅱ期第10巻). 岩崎学術出版社.
- カント, 平田俊博訳 (2000), 人倫の形而上学の基礎づけ. カント全集7巻. 東京: 岩波書店.
- 岸田泰子, 北村俊則 (2000), 青年期の性行動を規定する要因としての Temperament and Character Inventory (TCI) と Parental Bonding Instrument (PBI). 精神科診断学, 11 (4), 455-462.
- 木島信彦, 斎藤令衣, 竹内美香, 吉野相英, 大野裕, 加藤元一郎, 北村俊則 (1996), Cloninger の気質と性格の7次元モデルおよび日本語版 Temperament and Character Inventory (TCI). 精神科診断学, 7, 379-399.
- 北村俊則 (2005), パーソナリティ障害とパーソナリティ傾向の形成に与える心理社会的要因. 九州神経精神医学, 51 (1), 7-18.
- 北村俊則 (1993), Hospital anxiety and depression scale (HAD 尺度). 精神科診断学, 4, 371-372.
- ギデンズ, A., 松尾精文, 松川昭子訳 (1995), 親密性の変容—近代社会におけるセクシュアリティ, 愛情, エロティシズム—. 而立書房.
- コフート, H., 本城秀次・笠原嘉監訳 (1995), 自己の修復. みすず書房.
- コフート, H., 水野信義・笠原嘉監訳 (1994), 自己の分析. みすず書房.
- 斎藤学 (1984), 嗜癖行動と家族. 有斐閣.
- 斎藤学 (1998), 「嗜癖」異常心理学講座V. みすず書房.
- 坂戸薫 (2000), Parental Bonding Instrument (PBI) とうつ病. 精神科診断学, 10, 399-407.
- サルズマン, L., 成田義弘, 笠原嘉訳 (1985), 強迫パーソナリティ. みすず書房.
- サルトル, 松浪信三郎訳 (1999), 存在と無 上・下. 人文書院.

- シェフ, A. W., 斎藤学訳 (1993), 嗜癖する社会. 誠心書房.
- ターナー, V. W., 富倉光雄訳 (1996), 儀礼の過程. 新思索社.
- 高橋誠一郎 (2000), Parental Bonding Instrument (PBI) と摂食障害. 精神科診断学, 10, 417-427.
- 竹内美香, 吉野相英, 大野裕, 加藤元一郎, 北村俊則 (1992), Cloninger の 3 次元人格 (TPQ) 理論および日本語版 Tridimensional Personality Questionnaire (TPQ). 精神科診断学, 3, 491-505.
- 竹内美香 (2000), PBI の発生と養育態度尺度の歴史. 精神科診断学, 10, 375-398.
- 太宰治 (1990), 人間失格. 集英社文庫.
- ダマシオ, A. R., 田中三彦訳 (2000), 生存する脳—心と脳と身体との神秘. 講談社.
- 成田善弘 (1989), 改訂増補 青年期境界例. 金剛出版.
- ハーマン, J. L., 中井久夫訳 (1999), 心的外傷と回復. みすず書房.
- ハイデガー., 渡邊二郎共訳 (1977), 存在と時間. 中央公論社, 世界の名著 62.
- フロイト, S., 懸田克躬, 高橋義孝他訳 (1969), フロイト著作集 5『性欲論・症例研究』. 人文書院.
- ベンジャミン, J. S., バージニア, A. S., 井上令一, 四宮滋子訳 (1996), カプラン臨床精神医学テキスト 第2版 DSM-IV-TR 診断基準の臨床への展開. メディカル・サイエンス・インターナショナル, 421.
- マーラー, M. S., ほか著, 高橋雅士・織田正美・浜畑紀訳 (1981), 乳幼児の心理的誕生. 黎明書房.
- マスターソン, J. F., 成田善弘他訳 (1979), 青年期境界例の治療. 金剛出版.
- マスターソン, J. F., 富山幸佑・尾崎新訳 (1990), 自己愛と境界例. 星和書店.
- 増田周二, (高原正興、矢島正見、森田洋司、井出裕久編著) (2004), 社会病理学講座第3巻 病める関係性—ミクロ社会の病理. 学文社, 100.
- ムーア, B. E., ファイン, B. D., 福島章監訳 (1995), アメリカ精神分析学会 精神分析辞典. 新曜社, 1995, 13-14.
- 吉田卓史 (2000), 強迫性障害の PBI. 精神科診断学, 10, 409-416.
- レイン, R. D., 阪本健二・志貴春彦・笠原嘉訳 (1971), ひき裂かれた自己. みすず書房.

資料 1

外傷後ストレス障害の診断基準（DSM-VI-TR による）

- A. その人は、以下の2つがともに認められる外傷的な出来事に暴露されたことがある。
- (1) 実際にまたは危うく死ぬまたは重傷を負うような出来事を、1度または数度、あるいは自分または他人の身体の保全に迫る危機を、その人が体験し、目撃し、または直面した。
 - (2) その人の反応は強い恐怖、無力感または戦慄に関するものである。
注：子供の場合はむしろ、まとまりのないまたは興奮した行動によって表現されることがある。
- B. 外傷的な出来事が、以下の1つ（またはそれ以上）の形で再体験され続けている。
- (1) 出来事の反復的、侵入的、かつ苦痛な想起で、それは心像、思考、または近くを含む。
注：小さい子供の場合、外傷の主題または側面を表現する遊びを繰り返すことがある。
 - (2) 出来事についての反復的で苦痛な夢。
注：子供の場合は、はっきりとして内容のない恐ろしい夢であることがある。
 - (3) 外傷的な出来事が再び起こっているかのように行動したり、感じたりする（その体験を再体験する感覚、錯覚、幻覚、および解離性フラッシュバックのエピソードを含む。また、覚醒時または中毒時に起きるものも含む）。
 - (4) 外傷的な出来事の1つの側面を象徴し、または類似している内的または外的きっかけに暴露された場合に生じる、強い心理的苦痛。
 - (5) 外的出来事の1つの側面を象徴し、または類似している内的または外的きっかけに暴露された場合の生理学的反応性。
- C. 以下の3つ（またはそれ以上）によって示される、（外傷以前には存在していなかった）外傷に関連した刺激の持続回避と、全般的反応性の麻痺。
- (1) 外傷に関連した思考、感情、または会話を回避しようとする努力。
 - (2) 外傷を想起させる活動、場所または人物を避けようとする努力。
 - (3) 外傷の重要な側面の再起不能。
 - (4) 重要な活動への関心または参加の著しい減退。

- (5) 他の人から孤立している、または疎遠になっているという感覚。
- (6) 感情の範囲の縮小（例：愛の感情をもつことができない）。
- (7) 未来が短縮した感覚（例：仕事、結婚、子供、または正常な寿命を期待しない）。
- D. （外傷以前には存在していなかった）持続的な覚醒亢進症状で、以下の2つ（またはそれ以上）によって示される。
 - (1) 入眠、または睡眠維持の困難。
 - (2) いらだたしさまたは怒りの爆発。
 - (3) 集中困難。
 - (4) 過度の警戒心。
 - (5) 過剰な驚愕反応。
- E. 障害（基準 B、C、および D の症状）の持続期間が1カ月以上。
- F. 障害は、臨床上著しい苦痛、または社会的、職業的、または他の重要な領域における機能の障害を引き起こしている。

▼該当すれば特定せよ

急性 症状の持続期間が3か月未満の場合

慢性 症状の持続期間が3か月以上の場合

▼該当すれば特定せよ

発症遅延 症状の発現がストレス因子から少なくとも6か月の場合

（American Psychiatric Association 編、高橋三郎・大野裕・染谷俊幸訳、『DSM-IV-TR 精神疾患の診断・統計マニュアル』、2002、医学書院、pp450-451）

ハーマンによる複雑性外傷後ストレス障害の7つの柱

- 1 全体主義的な支配下に長期間（月から年の単位）服属した生活史、事例には人質、戦時捕虜、強制収容所生存者、一部の宗教カルトの生存者を含む。事例にはまた、性生活および家庭内日常生活における全体主義的システムへの服属者をも含み、その事例として家庭内殴打、児童の身体的および性的虐待の被害者および組織による性的搾取を含む
- 2 感情制御変化であって以下のものを含むもの
 - ・持続的不機嫌
 - ・自殺念慮への慢性的没頭
 - ・自傷
 - ・爆発的あるいは極度に抑止された憤怒（両者は交代して現れることがあってよい）
 - ・強迫的あるいは極度に抑止された性衝動（両者は交代して現れることがあってよい）
- 3 意識変化であって以下を含むもの
 - ・外傷的事件の健忘あるいは過剰記憶
 - ・一過性の解離エピソード
 - ・離人症 / 非現実感
 - ・再体験であって、侵入性外傷後ストレス障害の症状あるいは反芻的没頭のいずれかの形態をとるもの
- 4 自己感覚変化であって以下を含むもの
 - ・孤立無援感あるいはイニシアティヴ（主動性）の麻痺
 - ・恥辱、罪業、自己批難
 - ・汚辱感あるいはスティグマ感
 - ・他者とは完全に違った人間であるという感覚（特殊感、全くの孤立感、わかってくれる人はいないという思い込み、自分は人間でなくなったという自己規定が含まれる）
- 5 加害者への感覚の変化であって以下を含むもの
 - ・加害者との関係への没頭（復讐への没頭を含む）

- ・加害者への全能感の非現実的付与（ただし被害者の力関係のアセスメントの現実味は臨床家よりも高いことがありうるのに注意）
- ・理想化あるいは逆説的感謝
- ・特別あるいは超自然的関係の感覚
- ・信条体系の受容あるいは加害者を合理化すること

6 他者との関係の変化で以下を含むもの

- ・孤立と引きこもり
- ・親密な対人関係を打ち切ること
- ・反復的な救助者探索（孤立・引きこもりと交代して現れることがあってよい）
- ・持続的不信
- ・反復的な自己防衛失敗

7 意味体系の変化

- ・維持していた信仰の喪失
- ・希望喪失と絶望の感覚

（ハーマン, J. L. 著、中井久夫訳、『心的外傷と回復』、1999、みすず書房、p.189）

図1) 嗜癖者の自己システム図

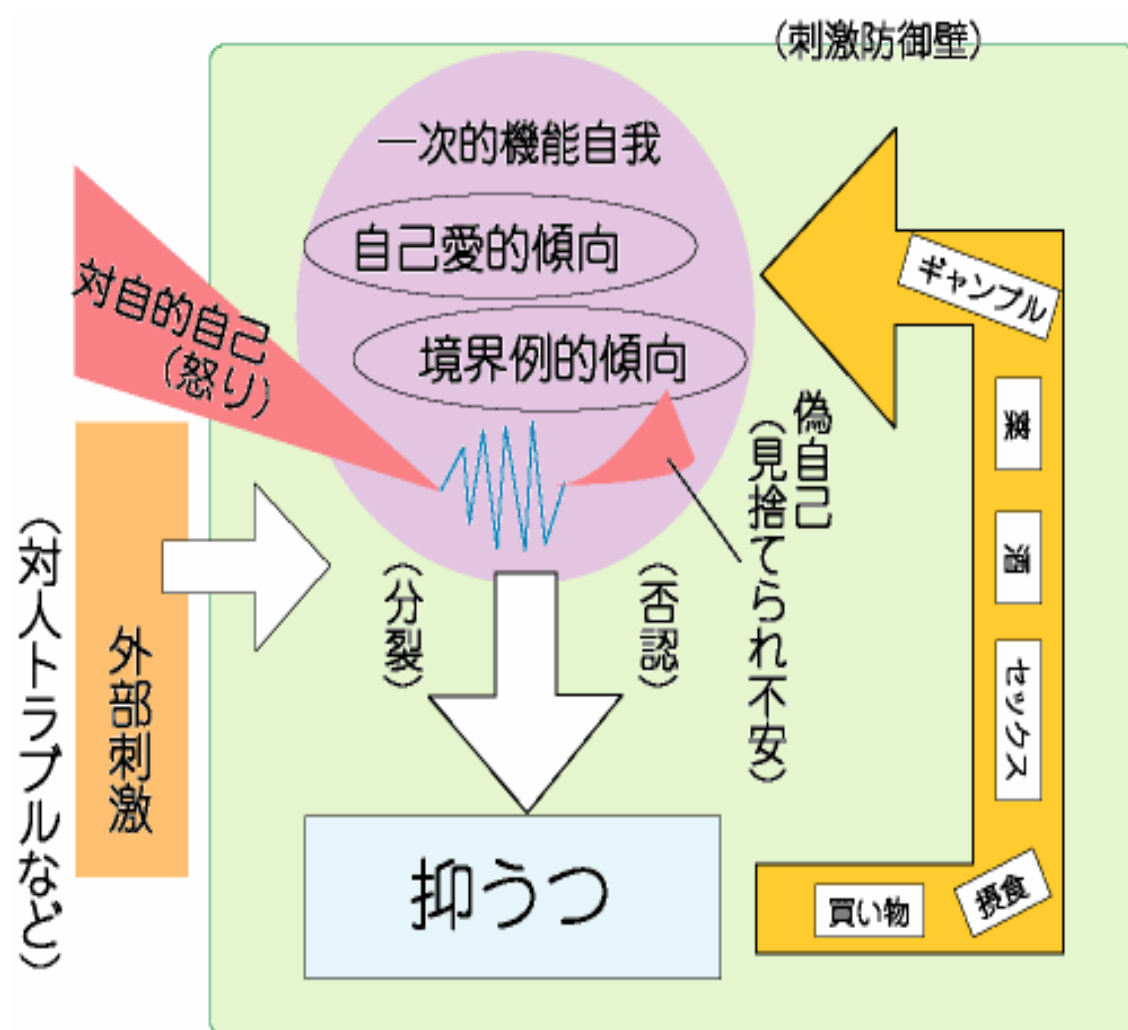


図2) 非嗜癖者の自己システム

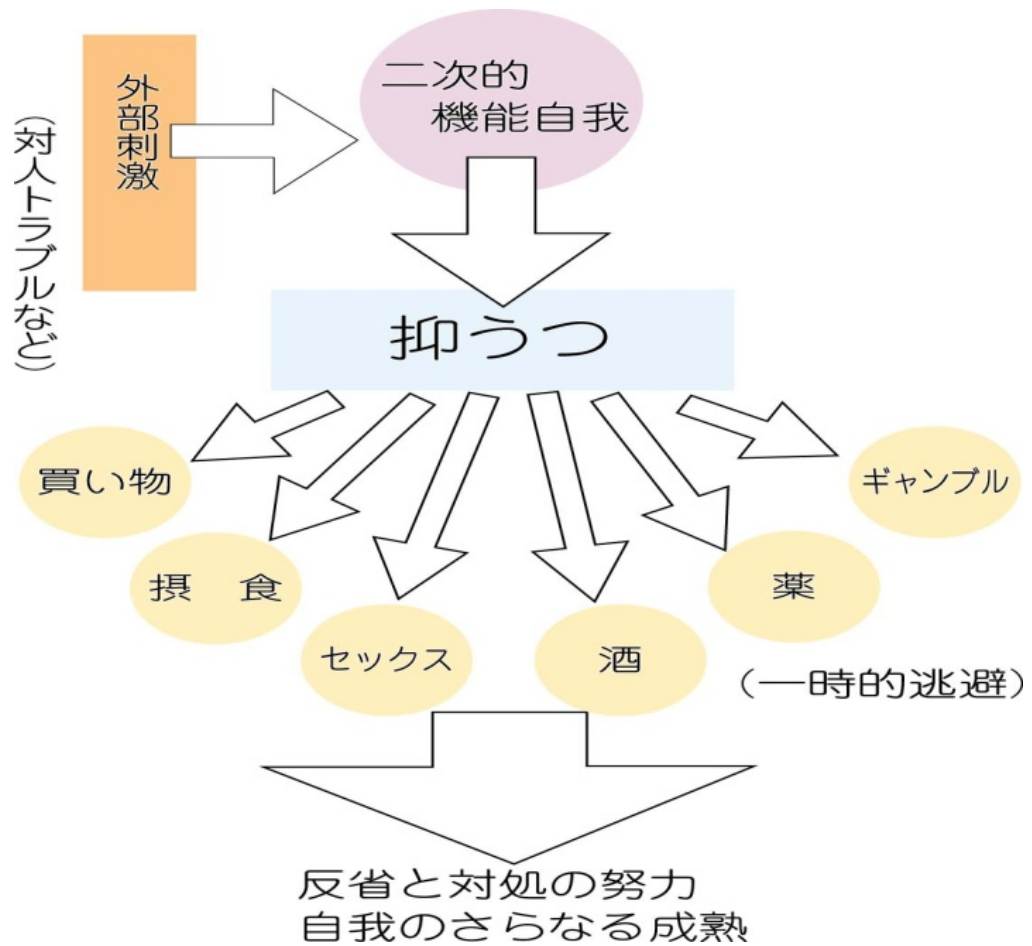


図3) Cloninger 理論における気質と性格の関連図

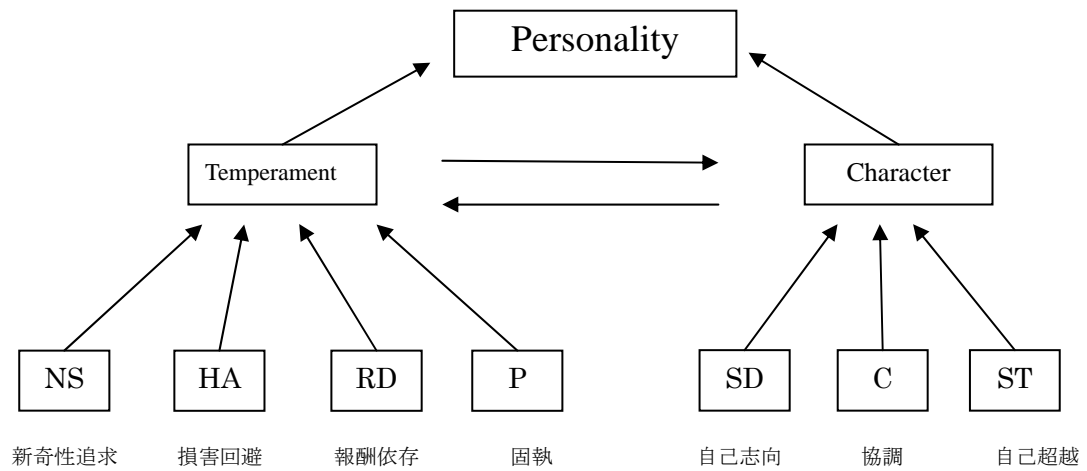


图4)

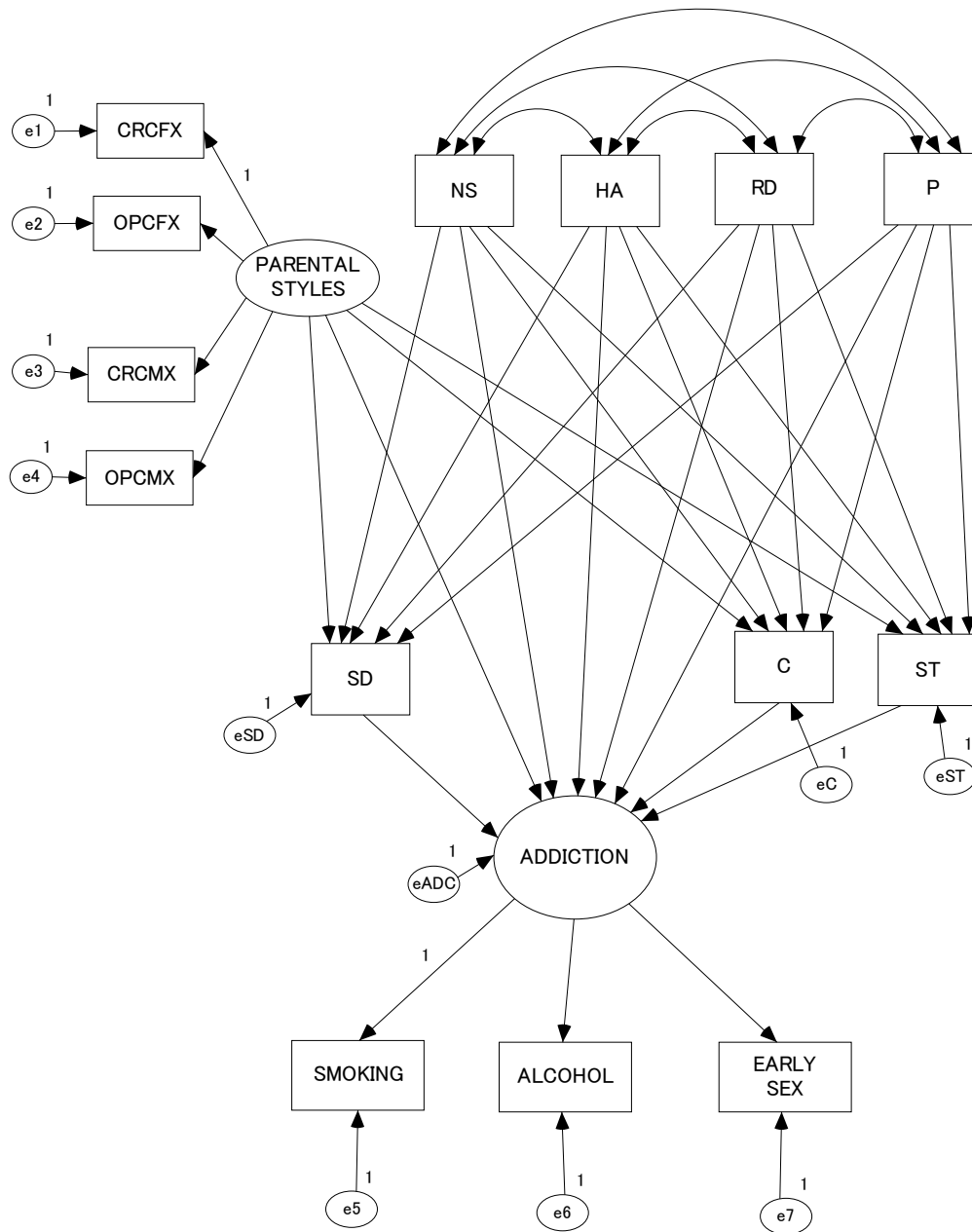
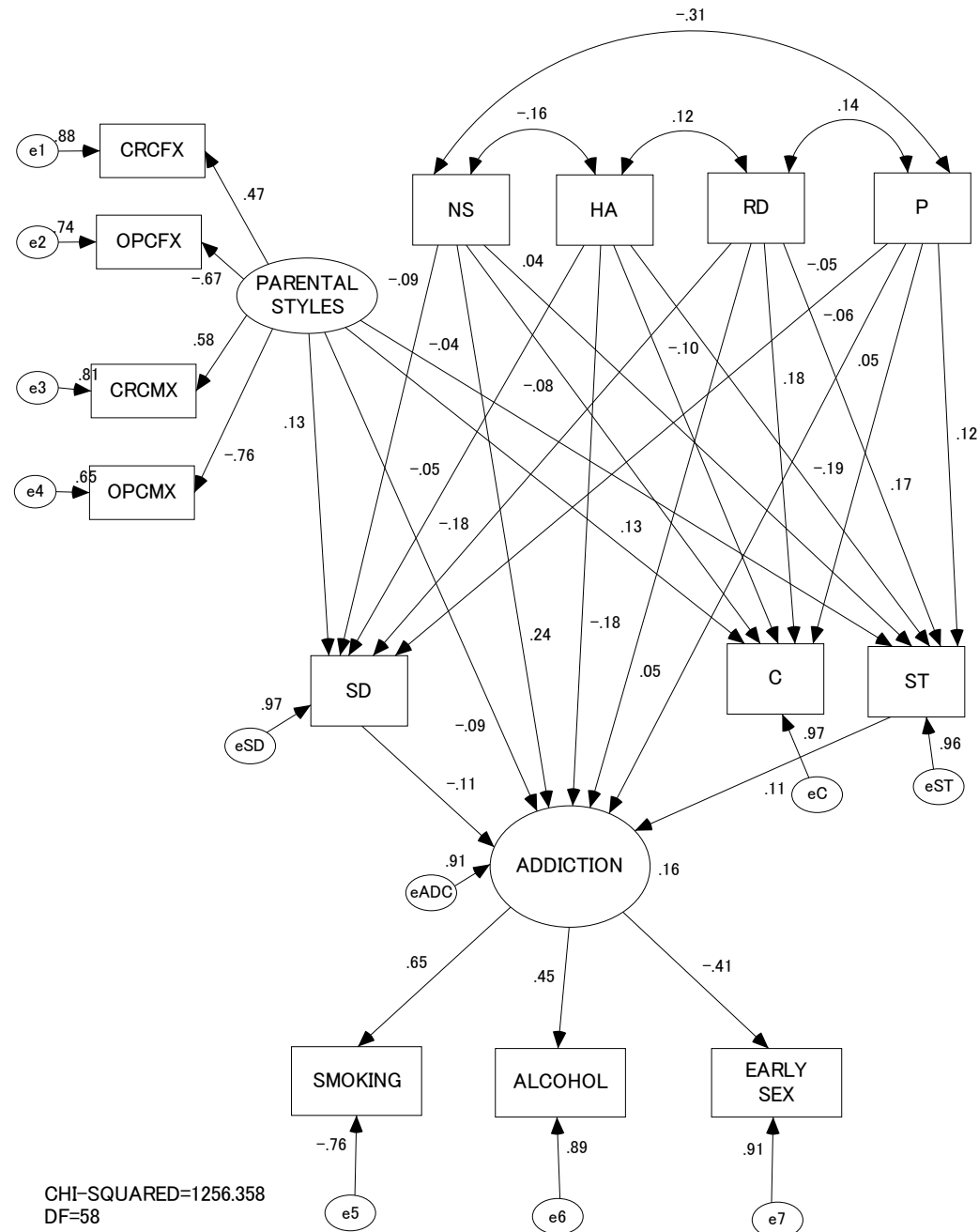


图5)



CHI-SQUARED=1256.358
 DF=58
 GFI=.961
 AGFI=.930
 CFI=.824
 RMSEA=.072
 AIC=1350.358

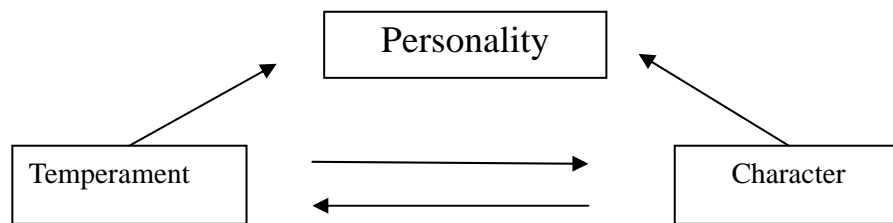


図6) 従来のパーソナリティモデル

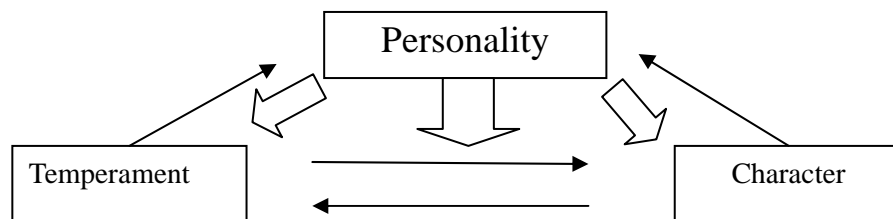
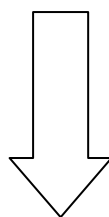


図7) パーソナリティの気質、性格、自己認識モデル